星の降る街に

霧島

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星の降る街に

【Ｎコード】
Ｎ１４２１Ｓ

【作者名】
霧島

【あらすじ】
ある街外れ、古びた一軒家の不動産屋のガラスに一枚の張り紙。太陽系から少し離れた星に【あなたも住んでみませんか？】の文字に、不思議と惹かれ足を止める。住む前に、様子を見に行ってくるだけでも・・と、地球を離れ宇宙を旅することになった、商社ＯＬの、鳴沢ケイ（なるさわ　けい）２９歳　独身。不動産屋の主人に、王政国家のこの星に行くのなら『鍵』を届けて欲しいと頼まれ、簡単にＯＫしてしまったが、これが、これからの旅の騒動のもと、なんて思いもしなかった。

同期の「氷のプリンス」渡辺隼人(わたなべ はやと)が自分をずっと思い続けていたことを知る。ヤキモチやきで独占欲いっぱいな隼人。ケイが旅の途中に出逢う彼を始め、人々とのかかわりを持つたびに、ドキドキハラハラ・・。

２９話以降、櫻井も地球からｄｅｓｅｒｔｏで合流し、ケイや隼人が望まなくとも、思惑に本格的に巻き込まれて、命の危険にさらされる場面が多くなります・・。

話の中に出てくる、星の名前や登場人物はすべて架空のものです。

（星の名前は実在してるものもありますが・・）☆

いつも、訪問していただいてありがとうございます。

よかったら二人の宇宙旅行に、お付き合いくださいませ＾＾

1　出会い（前書き）

。訪問していただきありがとうございます。４／１に同じタイトルでアップしましたが、手違いがありましたのでこちらに再度アップさせて頂いてます。これから山あり谷ありの宇宙旅行に、お付き合いいただければと思っています。よろしくお願いします＾＾

1　出会い

ある街外れの、古びた一軒家の不動産屋の張り紙。

【あなたも住んでみませんか？】

どこかと場所をみると、太陽系をすぎて更に数日行った星。最近開発されている所のようで。ちなみに、地球発の列車の終着駅らしい。珍しい・・王政国家か。

近頃は、地球を離れ他の星に移住するひと達が増えてるって、噂で聞いたけど。

「ふぅ…ん。興味はあるわねぇ。でも…。」

はり紙の前で、ぶつぶつぼやきながら見ているのは、一人の女性。名前は、鳴沢ケイ（なるさわ　けい）２９歳。

商社に勤めるＯＬ。同期の仲間が寿退社する中、仕事を続けている。仕事も責任職にも就くようになってからは、更に仕事に打ち込むようになった。

今のところ彼もいないし、結婚の予定もない。実家の母親はうるさいけれど

聞かないことにしている。

それでも近頃、このままで私はいいのか・・と漠然と思うようになってきた。

結婚だけが幸せではない。でも、一生一人は寂しすぎるな・・と。

人生の分岐点にきているのかもしれない。

でも、どうすればいいか。答えはでない。

気がついたら、会社では、同期で残っているのは、隣のデスクに座る、はやとだけ。
渡辺隼人３１歳。彼も、独身だけどなぜ結婚しないか不思議なくらい。
仕事も完璧でできるし、モデルなみの容姿をしているし。
彼に憧れる女性社員は、数知れず・・。
社内では、１．２位を争う位（らしい・・噂では）もてるみたい。
もちろん、付き合った女性の噂は聞いているけれど、結婚まではいかないらしい。
仕事中は、情け容赦ないので、とても近寄りがたい。
「氷のプリンス」と周りに呼ばれていることを、彼は知っているだろうか。
厳しいけれど、そのあとちゃんと後輩などのフォローをさりげなくやっているところを
知っている私。なぜか、彼は、私にはやさしくて甘い・・・。
もちろん、私より役職は上。同期なのに悔しいな・・と思う心は秘めているけど。
あえて口にはださない。

・・

「住むと決める前に、様子を見に行くのもいいかもね」

と、軽い気持ちで不動産屋の扉を叩いた。

これが、彼女の人生を大きく変えることになるなんて、思ってもみなかったこと。

2　迷い

「こんにちは」
お店の重い扉を開けながら声をかける。

返事がない・・・・。

もう一度「こんにちは」と大き目の声で、奥に声をかけると、奥からここの主人であろう
年配の男性がゆっくりと出てきた。

「あの、外の張り紙をみたんですが。『住まないか』という。」

「住む予定かい？」

「住む前にとりあえず興味があるので、見に行ってみようかと思いまして」

「ふぅ～ん」と主人が返事をして、私を頭のてっぺんから足の先まで眺める。

「一人で行くのかい？」と聞く主人。

「まだ決めてないです」と一応答える。
たしかに、まだ何も決めてないから。

仕事の事もある。旅もどのくらいの期間になるのかわからないし。
もしかしたら、帰ってこないかもしれない。

ふと、隼人の顔が浮かぶ・・。私が旅に出るといったら、彼はなんて言うだろうか。

明日あたり、一緒に飲みに行って、話しをしてみよう。

「もし、行く気持ちがあるのなら、2～3日中にもう一度くるといい。旅の手配もしてあげるから」と店の主人の言葉に頷き、チラシをもらい店を後にした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

次の日の昼休み。

自分のデスクで、昨日もらってきたチラシをおいて眺めていると、頭上から声が聞こえる。

「何みてるの？」

頭上の声の主は、昼食から帰ってきた同期の隼人。

「ん？ちょっとね。旅に出ようかと思って」

「旅？どこ行くの？」

隼人も、隣の自分のデスクに戻って、椅子に腰掛ける。

「宇宙旅行」

「は？？」

隼人は、あっけにとられた顔をする。

チラシを隼人にみせる。

「『住みませんか』と書いてあるけど、なんとなく興味があって、その星の様子を見に行ってみようかなって思ってるの。」

昨日の不動産屋のやりとりを、説明する。

「で？いつ帰ってくる予定？」

とチラシを見ながら、隼人が訊ねる。

「ん～～。そこなのよね。どのくらい目的地まで行くまでにかかるのかわからないし。

それと、気に入った場合、そのままあっちへ永住する可能性もないとはいえないし・・。

あんまり長いこと仕事も休めないし、そろそろやめ時かな？とも思ってるし」

「・・・・・・」

ふと隣を見ると、隼人は、言葉を無くしてびっくりした表情でこちらを見ている。

「仕事やめるのか？」

「今、正直迷ってる」

「じゃぁ・・・・」

と、話をしてる間に昼休みが終わる。

「今日、後で飲みに行かないか？そこでまた話そう」

と隼人が誘ってきたので、
冗談半分で「隼人の奢りで？」
と聞いたら、
「いいよ」
と、にっこり微笑んで返事をしながら、私の頭を優しく撫でて出かけていった。
え？？
一瞬のことに、動きが止まる。
今何？
「氷のプリンス」と呼ばれてる隼人が、微笑んで私の頭を撫でていった・・よね。
ふと、周りを見ると、女性陣の鋭い視線を感じた・・・。
みなかった振りをして、午後の仕事に集中することにした。
正直、集中する振りをして、昨日からのこと、さっきの隼人とのことが頭の中を駆け巡って、それどころではなかったのは、周りは知らない・・・。

3　待ち合わせ

仕事を終え、隼人との待ち合わせ場所に向かう。
隼人も、出かけ先から直帰なので、外で待ち合わせすることにしたのだ。
普段も時々一緒に飲みに行くことがあるけれど、会社から一緒だと周りの視線が
痛いので、外で待ち合わせることにしている。なにせ、会社内では、隼人の彼女
にと狙っている社員も多いので、騒ぎは起こしたくないのだ。そうじゃなくても
、同期というだけで、いらぬ攻撃を受けやすいのに、余分な刺激は避けたい…。

待ち合わせ場所に着くと、まだ隼人は来ていなかった。金曜日ということで、人
通りは多い。もうすぐくるかな？と思っていたら、二人組の男の人達に声をかけ
られた。

「お姉さん一人？一緒に飲みに行かない？」

最初は、自分に声をかけられたことに気がつかなくて黙っていたら、腕を捕まれ
連れていかれそうになった。

「何するんですか。私は待ち合わせしてるんです。困ります。」と腕を振り払お
うと思った時、

「困るねぇ。人の彼女を誘うなんて」後ろから腕が伸びてきて、抱き寄せられ、
びっくりして、振り返った。
見上げると、隼人が射るような視線で男達を見ていた。

「なんだ、彼氏待ちか」と言いながら、男達はさっさと去って行った。

呆気にとられて動けない…。
「おまちどおさま。ごめん、遅れて」隼人は、抱き寄せたまま私に謝る。

「ううん、私が早い時間に着いたから」
返事をしながらも、意外な展開についていけてない。隼人が私を抱き寄せてる意
味がわからない。

「さあ、行こうか。」
にっこり微笑む王子スマイルの隼人に、思わずドキッとする。肩を抱かれたまま
歩きだす。

「ねぇ、隼人?あの、もう離れてもいいんじゃない?」

「良いの、良いの」と言いながら、何故かご機嫌な隼人とそのまま歩き、いつも
行く居酒屋に着くと、腕から解放された。

はぁ……心臓に悪い…。
隼人の態度に、心がついていけない。
ちらっと横を見上げると、隼人と目が合う。
「どうした？」
フワッと微笑みながら、私の頭を撫でる。
「いつもの隼人と違うなと思って」
「そう？」
「うん…」
と俯き加減で答える。
「とりあえず店入ろ」
隼人に言われ、あわてて店に入る。
今から話さなきゃいけないのに…。
心と葛藤しながら、店に入った。

4　想い人

店に入ると、満席に近いため、空いているカウンター席に座る。

「何にする？」

「俺は生ビール。あとは適当でいいや。ケイは？」

「私はハイボールにしようかな。あとは任せるわ。今日は、隼人の奢りでしょ？」

お店に入って、初めて横に座る隼人と目が合う。

「そうだったね。」

と言いながら何品か選んで、店員さんに注文した後、隼人が話し出す。

「昼間の話…どうするんだ？」

ドキドキしすぎて頭の回転が乱れてる私に、ストレートに話を振ってきた。

「ん～どうするも、まだ決められない。」

本当は、行く気持ちがほとんど決まっているけれど、言い出せない…。

「本気で行きたいのか？」と真剣な顔で尋ねる隼人。

「行こうとは思ってる…。」ハイボールを口にしながら呟くように

答える。

一瞬、沈黙の間が空く。

「…今の生活を止めてまでもか？」

更に、眉間に皺を寄せ難しい表情をしながら、尋ねる隼人の顔を見ながら話し始める。

「知らない所へ、それも未知の宇宙へ行こう…と思うのは、今の生活をしていても
前が見えないから。」

「？」隼人はわからないという顔で私を見る。

「この年まで独身で、と言っても、結婚を考えた彼もいなかったわけじゃないの。
実現しなかっただけで」

「普段、他に何も変化のない仕事中心の生活をしてきて、同期はみんな結婚して
やめていっても、私は結婚がすべて幸せ、ではないと思っていたの。
別に強がり言っているわけじゃないのよ。来年は３０歳になるし。
、このまま何もしないより、何かしてみたい…と思っていた時に、
ちょうど不動産屋の前を通りかかってこの話に出会ったの。」

「それに、仕事もそろそろ後輩達も増えてきて任せられるようになってきたし、辞めても
支障がないかなと。」

「支障はでてくるよ…。」溜め息混じりの隼人の声。

「そう？きっと大丈夫よ。それに私の席も空けば、隼人の隣に来たい人達がたくさんいるだろうし。」
クスクス笑っていると。

「……」

「どうしたの？」急に黙ってしまった隼人に不安になる。

「ごめん。考え事してた…。」

「ケイ？」急に名前を呼ぶのでドキッとする。

「なぁに？」

「行くつもりなら、また不動産屋を訪ねるんだろ？」真剣な眼差しで、私を見つめる。

「そうね。詳しい話も聞いてみないといけないし、行くようになったら旅の手続きもしてくれるって言ってたし。」

「その話の時、俺も行く。」

「えっ？」意外な返事に、隼人の顔を見る。

「いや…、宇宙旅行なんてめったにないだろ。どんなものなのか聞いてみたくなってさ。」
珍しく慌てたように答える。

「彼女と行くために？」さりげなく聞く私。

「彼女いないし。」少しむっとした声で即答する。

「今は、じゃないの？」

アルコールの力で、ちょっと絡んでみる。今まで近くにいても聞いたことがなかったから。

「いいよ～。明日土曜日だから仕事休みだし、一緒に行ってみる？」

何杯目かのグラスの中味をを飲み干す。

「ああ…。」

「隼人？」隣の顔を覗きこむと、悲しげな瞳と目が合う。

「出ようか」目を伏せ、隼人が立ち上がる。支払いをして店を出てきた。

店から駅に向かうが、話をすることなく二人で歩く。駅につく少し前、

隼人が立ち止まって私を見つめる。

「明日、家に車で迎えにいくよ。１０時でいい？」

「うん。いいの？」

「いいよ。車の方が行きやすいだろ？」

「ありがとう。待ってる。今日はご馳走さま。隼人と話もできたしよかった。」

隼人がにっこりと微笑むと同時に、伸びた手が、私の頬を撫でる…。

「やっぱり、今日の隼人、いつもと違う。どうしたの？」

「ん？どうもしないよ。ただ今日は・・ケイに無性に触れたくなっただけ・・かな。」

言葉を無くして、固まる私に、

「じゃ、明日迎えに行くから」

と、手を振って電車のホームに向かっていく隼人。

なんなのだろう・・・・・。

私は今日の出来事を頭の中で整理ができずに、しばらく動けなかった・

5　流れ星

頭の中が真っ白になりながらも、やっとの思いで電車を乗り継ぎ自宅に帰る。とりあえずお風呂に入り少し落ち着いた後、ミネラルウォーターのボトルを片手に、ベランダから夜空を見上げる・・・。

「星が綺麗だなぁ・・。」

星空を眺めるのが好き。特に冬の夜空は、いつもより星が輝いて見える気がする。漆黒の空に無数の輝き・・。

今夜は、オリオン座が真上に見えて、思わず見上げる。オリオン座の近くに居るシリウスは、太陽以外で地球上から見えるもっとも明るい恒星（自分で輝く星）。

「宇宙に行ったら見えるのかな・・・。」

呟いてから、ふと頭が現実に戻る。

「宇宙旅行かぁ・・・。」

昨日から今日までの出来事を、頭の中で振り返る。

何故、行こうと私は思ったのか。本気で行く気があるのか？

宇宙空間なんて、命の保障はない。この街を出て、すべてを投げ出して行く覚悟ができているのか？

もしかしたら、帰ってこられないかもしれない。

それでもいいのか・・・？

自分に問いかける。

一度、決めたこと。もし、ここでやめたらきっと私のことだから一生後悔する。
後悔するくらいなら、行けるところまで行ってみよう。
目的の星は、地球発の鉄道の終着駅。宇宙船もあるみたいだけど、とりあえず鉄道を使ってみるか。
両親には、長い旅にでると言っておこう。追求されても面倒だし、余計な心配はかけたくない。娘が宇宙旅行行くなんて知ったら、反対されるに決まっている。その前に、結婚しろって言われそうだし。仕事も、手続きしなきゃ。やめる1ヶ月前に言わなければいけなかったな・・たしか。
何か言われるかな？今から1ヶ月だと、年末、お正月挟んで1月中頃か。。

考えていると、テーブルの上に置いた携帯電話が鳴り、メールのランプが点く。

送り主を見ると、「隼人？」
思わずドキッとする。

〜あれからいろいろ考えてしまって、眠れなくなったよ。ケイが隣のデスクからいなくなるなんて思ってもみなかったし。ケイも今考えているのか？ｆｒｏｍ　ｈａｙａｔｏ〜
〜ごめんね。悩ますようなこと相談してしまって。私も今、夜空を見ながら考えていたわ。ｆｒｏｍ　ｋｅｉ〜
〜謝るようなことじゃないよ。で？何考えていたの？ｆｒｏｍ　ｈａｙａｔｏ〜
〜すべて投げ出して、本気で行く覚悟があるのかって自問自答してた。ｆｒｏｍ　ｋｅｉ〜
〜俺の問いかけと一緒だね。結果は出た？聞きたいような聞きたく

ないようなだけど。ｆｒｏｍ　ｈａｙａｔｏ｝
｛行こうと決めて、これでやめたら、私のことだから一生後悔すると思う。だから、行けるところまで行こうかと・・。ｆｒｏｍ　ｋｅｉ｝

少し時間が空く。今度は、携帯電話の電話のランプが点く

「もしもし？」ボタンを押してでる。相手は、もちろん隼人。
「メールだと、だんだん歯痒くなってきたから電話にした。」
「隼人、やっぱり今日はいつもと違うね。『氷のプリンス』が嘘みたい。」
「『氷のプリンス』って何？」
「隼人の影の名称。かっこいい王子様の風貌なのに、仕事になると、情け容赦ないからみんな脅えるでしょ？だから『氷のプリンス』だって。知らなかった？」
「初めて聞いたよ。『氷のプリンス』ってなんなんだよ。」
電話口で大きなため息をつく。
「でも、情け容赦なくても、隼人はその後ちゃんとフォローしてるものね。だから後輩達がついてくるんだわ。」
「ケイだって、後輩には厳しいけど、ちゃんとフォローしてるだろ？」
「あら・・よく見てたわね。厳しいだけだとついてこないじゃない？自分だっておこられっぽなしや、理不尽な怒られ方はいやだから、後輩にもしないだけよ。」
「だから、男女問わず好かれるんだな・・ケイは。」ため息交じりの声の隼人。
「あはは。それはないでしょ？年もみんなより上だし。」
「気がついてないだけだよ。俺の周りでもケイ狙いがいるし。」
「あら・・そうなの。でも、もう私もいなくなるし、モテ期も終わりね。」

「ケイ・・。」
「ん？どうしたの？」
「やっぱり明日にするわ。さて、そろそろ無理やりでも寝ようか。
１０時に迎えに行けなくなると困るし。」
「ほんとにいいの？用事があるなら、私一人でいくけど。」
「いいの。俺が行くって言ったんだから。マンションの前で待ってるよ。」
「わかった。１０時ごろに降りてくね。」
「了解。じゃ、ケイおやすみ・・。」
「おやすみ。隼人。」

「はぁ・・・・・」
ベットサイドで大きなため息をつく。
「俺、どうしたらいいんだろう・・。ケイがいなくなるなんて考えたくない。最悪俺も一緒にいくか。」

思いを告げられず、葛藤する。寝られない夜は更けていく・・。

隼人との電話を切ると、部屋に静けさが戻る。
昼から違った雰囲気の隼人のことを思う。恋愛ごとに鈍感な私だけど、
何となく、隼人の思いを感じ始めている・・。
でも、私が旅に出てしまえばそれまでだから。
思った心に蓋をする。思いが通じてしまえば、別れがつらくなる。

ふと夜空を見上げた時、流れ星が目の前を流れた・・。

「あ・・。お願いする前に消えちゃった。これから旅にでれば見えるかな。」

この先のこと、思うことはたくさんあるけれど、
まずは明日・・。

体も冷たくなってしまったので、ベランダの開いている扉を閉める・・。

6　不動産屋

昨日の話の勢いから、今、隼人の車に乗って不動産屋に向かっている。

助手席に座っているけれど、何故か落ち着かなくて俯いてしまう。

「入社して１０年近いけど、プライベートで逢うのは初めてだよね。」

声に顔を上げると、微笑んでいる隼人。

「今まで逢う機会もなかったし。それに、昨日話をしなかったら、私がこうやって隼人の車の助手席に座ることもなかったわ。今すごく不思議な感じなの。

でも、今日が最初で最後ね。」

にっこりしながら正直な気持ちを伝える。

「そんなことない。」

不意に頭が温かくなる。

隼人の手が、私の頭を優しく撫でる。

「いつでも隣に座ればいいよ。」

「隼人…。」

……

……

話をしている間に、車は、街はずれの不動産屋に着いた。

これから話をするんだと思うと、自然と身体に力が入る。

「行こうか。」

車から降りようとした私に、隼人が手を差し出す。

無意識に手を握ると、隼人が私の手をしっかりと握り返し、手を繋いだ。

それも不思議と違和感なく自然に…。

そして、二人で不動産屋の入り口扉の前に立つ。。

「こんにちは」

扉を開けながら入って声をかける。この間と一緒でやっぱり返事がない。

「こんにちは」

今度は奥に向かって、大きな声をかけると、店の主人がゆっくりと出てきた。

「そろそろ来ると思っていたよ。おや？彼も一緒なのかい？」

隼人の顔をちらっと見て、私に尋ねる。

「いや…そういうわけでは…。」

「手を繋いでいるから、仲がいいのかと思ってね。」

あ、そうだった。
思わず手を離そうとしたら…反対に繋いだ手を強く握り返されてしまった。
びっくりして隣の隼人をみると、仕事中でもあまり見せないような真剣な
顔をしている。

「僕にとって彼女はとても大切な人なので、今日は一緒に話を聞かせてもらいに
きました。」
私は一瞬、隼人の言葉に固まる。

店の主人は、
「もちろん二人で聞いていくといいよ。納得してから結論を出した方がいい。」
「そこ座って待ってて。今コーヒー入れてくるから。」
主人は、そう言って奥へ入って言った。

店の応接間に残された私たち。
座っても手を離さない隼人に声をかける。
「隼人？」
「ん？」
「手、離さないの？」
繋いでいる手を指さす。
「いい。このままで」

「さっきご主人に言ったことは？」
一瞬戸惑った顔をしたけどすぐに、
「俺の本心…。」
多くは語らない隼人。そのかわり握った手を、ぎゅっと握った。

私は、気がついてしまった隼人の心を、どうやって受ければいいのか、繋いだ手
の平から伝わる温もりを感じながらも、戸惑いを隠せなかった。

7　思わぬ展開

店の主人が、奥から戻ってきた。

「さてそろそろ、本題に入ろうか。」

私たちに、コーヒーを勧めてくれ、自分もカップを持ち、正面に座った。

「お嬢さん、まずは名前を教えてもらえるかい？」

かばんの中にある名刺を取り出して渡す。

「鳴沢ケイです。」

「鳴沢さんね。商社勤めなんだ。

それで、今日ここに来たということは、先日の話に、気持の動きがあったということかな？」

無言で頷く。

「いろいろ考えましたが、先日もお話させて頂いたように、すぐにあちらに【住む】

というのは決めかねます。でも、どんな星なのか行ってみたいと思って。

星まで行く道中のことを含めてお話を聞きたいと思い、今日は伺いました。」

「わかった。」

主人は、私の顔をみて頷いて返事をすると、横に座る隼人に視線を動かす。

「彼も一緒に聞くかい？」
隼人も黙って頷く。

「じゃあ、まず初めに目的地の星の話をしようか。」
主人はそういうと、ファイルをテーブルの上に広げた。

「位置は、地図見て貰うとわかるけど、地球はここね」
と、指で指す。

「鉄道の終着駅のある、目的地の星がここ。ｓｐｅｒａｎｚａ［スペランツァ］、
希望という名の星。」

「ｓｐｅｒａｎｚａまで、何もなければ、鉄道で１ヶ月かかる。宇宙船だともう少し早いかな。」

「何もなければ？というと。」
隼人が主人に尋ねる。

「すべてに安全の保障はない…ということだね。ｓｐｅｒａｎｚａについてしまえば、
地球にすむより安全に快適に生活ができる。王政国家で、国がちゃんと機能してる
からね。」
隼人を見ると、厳しい顔付きでファイルを見ている。

「列車の出発は、毎月５、１５、２５日。地球時間２０時、５０番線ホームから」

「それと旅費の件は、鳴沢さん、ひとつ提案なんだけど。」
急に主人から話を振られ、びっくりする。

「なんでしょうか？」

「今回、もしｓｐｅｒａｎｚａに鳴沢さんが行くのなら、旅にかかるすべての費用は
私が持ちます…という提案で。」

「は？」
提案に言葉がでない。

「条件…というか、ｓｐｅｒａｎｚａにいる知人に届けて欲しいものがあって。
もちろん、怪しいものでもないから大丈夫。それを届けてくれるなら費用を
任せてほしい。」
そして、隼人の方に振り向き、

「もし、彼も一緒にいくのなら、そちらも心配なく任せてほしい。」
隼人が言葉なく、繋いだ手を強く握ってくる…。

「悪い条件ではないと思う。もし、ｓｐｅｒａｎｚａに住むようになれば、手配もする。」

「１週間ぐらいで返事を待ってる。」

……

店の主人に見送られ、隼人の車に戻ってきた。
助手席でぼんやりしていると、
「さてと。」
顔をあげると、隼人がこちらを向いてる。
「とりあえず、お昼だしご飯食べに行こうか？朝も食べずにきたからお腹すいた。
ケイもそうだろ？」
「そういえば。夕べ眠れなくて朝も食べてない…。」
そっと隼人の左手が私の右手を繋ぐ…。
「食べてからゆっくり考えよう。」
コクンと頷く。
隼人の運転する車が動き出し、気持ちのいいＪａｚｚの音がスピーカーから流れてくる。
外の景色を眺めながら、少しの間、音に身をまかせることにした…。

8　告白

隼人の運転する車は、海岸沿いのイタリアンカフェに着いた。
車から降りて外にでると寒さはあるけれど、潮風が気持ちをつつんでくれる。

「海はいいな～。」

「食事をしたら少し海岸歩こうか？」
背中越しにふわっと温かさを感じる。隼人が後ろから抱きしめたからだ。

「身体が冷える前に中に入ろう。」
どちらからともなく、自然に手を繋ぎ、店に入る。

海が見える窓際に座り、隼人はＰｉｚｚａ、私はＰａｓｔａを頼んだ。

しばらく外の景色をぼんやり眺めていると、

「疲れただろ？」
声の方へ振り向く。

「疲れてない…って言ったら嘘になるかな。何だか一辺に色々頭の中に入ってきて、整理しきれないみたい。」

「そうだよな。1週間整理しながら考えるといいよ。でも、旅のことは、気持ちは
ほとんど決まってるだろ？」

「うん…。」

その後、旅の話は触れず、お互いの趣味や普段の生活、仕事の話などをする。
10年近くも一緒に働いて知らないことの方が多かったことに、びっくりした。

食後のコーヒーを飲みながら、目の前の隼人に聞く。
「隼人は、店主の話を聞いていてどう思った？」
急に聞かれ、すぐに言葉がでない。

「どう？って。」
ケイの表情を伺いながら、聞き返してみる。

「店主の印象や旅の条件など説明を聞いてみて。」
真剣な表情で返してくる。

「店主はとりあえず、胡散臭い所もなさそうだし、旅のことは…色々考えることはあるんじゃないかな？」
「そうね。条件をだしてきた時はびっくりしたわ。まぁ、それだけ大変な道のりだってことかもしれないけど…。」
そこまで言ってから、黙り込む。

「出ようか？」

私の手を握り立ち上がる。頷くと、隼人もにっこりする。支払いを済ませ
外にでると、強い潮風が頬を撫でる。
思わず、自分の腕で身体を抱きしめると、その上から温かい体温が重なり、
隼人のコートの中にすっぽり入ってしまっている。

「隼人、あったかい。」
コートの中で隼人が私の腰を引き寄せる。見上げると、こんな顔されたら
女の子はイチコロ…みたいな、柔らかい笑顔で私を見つめている。

「少し歩こう。」
二人で、カフェからすぐの所にある海岸の砂浜に足を運んだ。

「海、久しぶりだから嬉しいわ。気分が凹んでいる時とか無性に行きたくなるけど。
ほっとするの。不思議ね。」

「今は凹んでるの？」
隼人はコートの中で、私を引き寄せる。

「ううん。今は大丈夫。ドキドキはしてるだけ。」
見上げて隼人の顔を見つめる。

「ケイ…。はぁ…やっぱり俺だめだわ。」

「ん？どうしたの…って。」

気がついたら視界が暗い。隼人にがっちり抱きすくめられていた。
「言おうか迷っていたけど、やっぱり言わずにいられない。」
「ケイ好きだよ。誰にも渡したくない。」
何となく隼人の気持ちは感じていたけれど、改めて言われ腕の中で固まる。
普通の女の子なら、きっと文句なしで喜ぶ台詞。
私は、数週間後には、旅にでる。けれど…。
「ありがとう、嬉しい。あなたに思って貰えるなんて。私も隼人のこと…
好き…。」
言ってしまった…。

「……。ほんとっ？」
隼人が真剣な顔で私を見つめる。

コクンと頷く。
「ほんとよ。今回、一番初めに不動産屋で話を聞いた時、隼人の顔が浮かんだの。
どう思うかな？って。でも、最終的な判断するのは自分自身だと思ってる。
同僚の域は越えられないし、相手にもされないと思っていたから、今まで言わな
かったの。あなたのことが心のどこかにいたから、付き合っていた彼との結婚
にも踏み込めなかったのかもしれない…。」
「でも、旅にでてしまえば終わりだと思って…。思いに蓋をしよう

と思ったら、
辛くて昨夜は寝られなかった…。」
隼人の目をまっすぐ見つめ思いを伝える。
隼人の指が、私の顎に触ったと同時に、唇に温かいものが重なる…。
「チュッ。」
濡れた音をたてて離れる。
「俺もずっと前からケイのこと好きなんだよ。気がつかなかった？
たぶんケイと
他の人との接し方が違ったと思うけど？」
「『氷のプリンス』の隼人が、私には優しくて甘いのは感じてたわ。
何故私だけ？って思ってた。」
「普段はそれでも抑えていたんだ。彼氏と付き合っていたのも知っ
てた。わかっ
ていてもどうしようもなかったし。俺も何人かと付き合ってみたよ。
でもやっぱり駄目だった。」
「ケイ、俺はお前じゃなきゃ駄目なんだよ。」
強く抱きしめられる。
隼人の言葉に涙が溢れる。
「もっと早く思いが通じていたら離れなくてもよかったのに…。」
「ｓｐｅｒａｎｚａ［スペランツァ］に俺も一緒にいくよ。」
「えっ??」
びっくりして隼人を見る。
「昨日の電話の後、迷ったんだよ。でもさっきの話聞いて決めた。

安全の保障がない
道のりをケイだけで行かせたくない。」
「こうやって思いがやっと通じて尚更ね。」
私の頭をそっとなでる。

「でも、帰ってこれる保障はないじゃない。仕事も隼人いなくなったら会社は
困るだろうし。これは私の問題で…。」
「ケイ?これは二人の大事なことだよ。一人で行かれたら、待ってる俺は
どうしたらいい。もし、途中で亡くしてしまったら一生後悔する。」
「もう、離れたくないんだよ。」
「隼人…。」

気がついたら、海に輝く太陽の光が西へ傾いてきていた。

「ケイ、今日は帰したくない…。」
返事の代わりに、隼人の洋服をギュッと握りしめる。
私の額にチュッ、と軽くキスをすると、

「車に戻ろうか。」

たくさんの思いを抱えて、二人は歩きだした。

9　決心

溢れんばかりの思いをお互い感じながら、今は隼人の運転する車に乗っている。

「まだ時間早いけど、家にこない？」
まだ気持ちがフワフワしている私に声をかける。昨夜の辛く悲しい思いが嘘のようで、
今の状況が信じられない。

頷くと、繋いでいる手をギュッと握ってくる。私も彼の体温を感じながら握り返した。

部屋に入ったとたん、隼人に抱きしめられた。
最初は優しくキスをしてきたのが、だんだん深くなり足に力が入らなくなる。

「俺、もうだめ…。」
不意に身体が浮く。
「隼人？」

すでにお姫様だっこされていて、つれて行かれたのは寝室…。
ベッドにそっと降ろされ、それからは、お互いの熱を感じながら激しく求めあった。
それは、まるで今までの時間を埋めるように…。

カーテンから差し込む朝日…。
隣で私をしっかり抱えて眠っている隼人がいる。
普段は、隙のないかっこいい彼も、寝顔はあどけない・・・。
寝顔を見ながら昨日からのことを思い出す。

「夢じゃないよね…。」
と呟く・・と、

「夢じゃないよ。」
と声がする。

「おはよ。」
私を抱きしめながら、額にキスをおとす。

「おはよう。起きてたのね。」
「さっき目が覚めてケイの寝顔みてた。」
恥ずかしくて顔を隠す。

「こうやって腕の中に居てくれることが嬉しいと思ってさ。」
「私も、嬉しい。。」
「ケイ…愛してるよ。もう誰にも渡さない。覚悟してて？俺、わりと独占力強くて、すっごいヤキモチ妬きだから。」
「隼人が？信じられない。きっと私の方が、ヤキモチ妬くことが多いわね。これから。」
「なんで？俺、会社のやつらにも嫉妬するし、今までもしてたし。」
「…さりげなく爆弾発言ね。今までもしてたの？」
「してたよ。ケイと話す男の奴らに。だから特に男相手には容赦なかったかも…。」
「え？？？私がらみだったの。『氷のプリンス』は。」

「そう。その『氷のプリンス』はやめて。」
ほんとうに嫌そうな顔をする。

「じゃあ『氷』はとってあげる。でも『プリンス』は、私にとっても隼人は王子様だから間違ってないわ。今までも、会社でヤキモチ妬いていたのは私もそうだし。」
隼人の抱きしめる力が強くなる。

「お互い、近くに居すぎて気がつかなかったのね。」
「これからは更に近くなるよ。」
隼人の顔をみると、柔らかい優しい笑顔で、意味深なことを言う。

「会社もそうだけど、旅にでれば、いつも一緒だろ？」

現実に頭が戻される。

「隼人、本当にｓｐｅｒａｎｚａ［スペランツァ］に行くの？私は月曜日辞めるように話するつもりだけど。」
「行くよ。決心は変わらないし俺も辞めるよ。急で引き継ぎもやらなきゃいけないから、会社には言っておいた方がいい。一緒に話いくか？」
「う～～ん。」
「どうした？」
「会社というより、会社の女性陣の反応が怖い…。あの視線が私に突き刺さりそう。」
「なにそれ。月曜日には俺ら付き合ってるの公表するつもりだし。男除けに。」
「え？」
「言っただろ？俺独占力強いって。他の奴らに絡んで欲しくないから。」

普段見せたことがない、意外な反応に、笑みが零れる。
「わかった。言うのは別々の方がいいと思うわ。お互い立場も違うし、それに。」
「それに？」
「二人で行ったら、いろいろ追求されるの目に見えてるし。」
隼人もクスクス笑いながら、
「そうだなぁ。そりゃ根掘り葉掘り聞かれるだろう。」

明日が怖い……。

……

月曜日。

隼人が言った通り、私たちが付き合ってるのを公表してから、私の周辺の視線がいつもより厳しい。
それ以外に、私が男性の後輩と喋ったりしてると、別の視線を感じるのは気のせいではない…。
その後の後輩には、隼人は容赦なかった。

会社には、一身上の都合で辞めるということで、年明け1月末で辞めることになった。
隼人は引き継ぎの関係で、2月末に辞めることになったらしい。どういう話をしたかは聞いてない。

会社の方が、決まったので、週末の土曜日に、隼人と不動産屋に行くことにした。

一枚の張り紙を見たことによって、周りの環境が激変している。
運命なんてわからないし、この先これからどうなっていくのかなんてわからない。
それでも・・自分自身で決めたこと。私は後悔はしない。

部屋の窓から夜空を見上げる。空気が澄み、満天の星空が広がる。
輝く星たちに、旅の無事を祈った。

１０　旅の『鍵（かぎ）』

週始めから、１２月の年度末の忙しさに加え、会社を来月辞めるようになって、引き継ぎの仕事もあり、毎日残業で帰りが遅く、うんざりした日々を送っている。
隼人も、管理職で私以上の仕事を抱え、お互い擦れ違い、話もできなかった。

やっと迎えた週末の土曜日。

今日は、不動産屋へ話に行くようになっていた。
車で迎えにきてくれた隼人も流石に疲れた顔をしている。

「おはよう。」
「おはよう。隼人、身体大丈夫？…っん。」
助手席に乗った私を突然引き寄せ、何度も唇を重ねる…。
「心も身体も充電切れだよ。まだ足りないけど、今ので少しだけ回復した。ほんとはこのまま押し倒したい気分だけどね。」
思わず顔が赤くなる…。
そんな私に、クスクス笑いながら、左手を私の右手に重ね、車は不動産屋へ向かった。

……

「こんにちは。」
不動産屋の扉を開けると、珍しく店の主人が、奥から出てきていた。

「いらっしゃい。やっぱりきたね。」
笑顔で迎えてくれる。

「はい。」

「どうぞ、座って。」
主人に薦められ、隼人と並んで座った。

「それで？気持ちは決まったのかい？」
「はい、彼と相談して一緒に行くことにしました。」
主人が隼人に視線を動かす
。
「よかったのかい？一緒に行くようになって。」

隼人も頷く。
「先日の話を聞いて、彼女を一人で行かせる訳にいかないと思いました。仕事も彼女は1月、僕は2月いっぱいで辞めるように会社には話をつけました。」
「そのほかの細かいことは、出発までにはちゃんとしていくつもりです。」

「わかった。そこまで話がまとまっていれば、手配していいね。今回の旅に関わるお金の心配もしなくていい。もちろん、旅費も往復ね。」

私は不思議に思っていたことを主人に聞く。
「二人分の旅費をみて下さるほど、私に預けていくものは大切なもの、なのでしょうか？道中は何があるのかわからないし、私達も万が一たどりつけない可能性もあるのに…です。」
「もちろん、私達は旅費の件は助かりますが。」

「本当は、自分が行かなければいけないんだけれど。」

と言いながら主人が話はじめる。

「今ここを離れる訳にいかないんだ。どうしようかと思っていた時に、鳴沢さんが来店してくれた。でも若い女性だし。なので最初に聞いたんだよね。」

「一人で行くの？」って。私は答えた。

「そう…。その時、鳴沢さんはまだ何もわからないと言っていたし。チラシを持って帰ってもらって、数日後には、彼と一緒にきたから、もし鳴沢さんが本当に行くつもりなら彼も一緒に行ってくれると心強いと思っていたんだよ。決して安全な旅じゃないからね。」

「鳴沢さんにお願いするものは、『鍵と手紙』なんだ。この間も言ったけれど、怪しいものじゃない。」

「ｓｐｅｒａｎｚａ［スペランツァ］についてからの連絡先と、持っていく場所の地図も一緒に入れて置くから、お願いできるかな？鳴沢さん。」

「もう行くのは決めていますし、持っていく相手先も判っているのならお預かりします。でも、先程も言った通り、ｓｐｅｒａｎｚａ［スペランツァ］に着けない場合もあるかもしれない。その時はどうしますか？」

一応、預かっていく身としては、確認しておきたい。

「鳴沢さんには、責任を押し付けることはないし、着かない場合は、向こうから連絡が入るはずだから、心配しないでほしい。」

私の目を捕らえるように見て答える店の主人。

「わかりました。行ってみないとわかりませんが、渡せるように努

力します。」
「一人で行くならお断りしたかもしれませんが。」
隣にいる隼人を見る。
「二人なら大丈夫だと思います。」
隼人もにっこり微笑む。
「ありがとう。よろしくお願いします。」
主人もほっとした表情をする。

「出発は、彼が2月末に仕事を辞めるのなら、3月15日でどうだろうか？」
隼人の方に向く。
「そうですね。手続きの都合もあるので、その日なら大丈夫かと。」
「ケイはどう思う？」
隼人が聞いてくる。
「いいんじゃないかしら。私は大丈夫。隼人が良ければ。」
「じゃあ、3月15日にしよう。出発時間は、20時。ちなみに、speranza［スペランツァ］も地球時間で動いてる数少ない星だから。旅の道中も、基本的には地球時間で車掌さんが伝えると思う。停車する星ごとに、地球時間に対してズレがあるけど。」
「旅に使う書類やパスポートやキャッシュカード、電話などは、出発までには用意するから、店に取りに来て欲しい。」
また連絡するという主人に送られて、店を後にした。

……

いよいよ現実化してきた今回の旅。
楽しみのような、不安のような複雑な思いが心に広がる。
『鍵』の存在も気になるし…。
「ケイ？」

隼人の呼ぶ声にびっくりする。
「どうした？不安そうな顔して。」
私の顔を覗き込む。

「ん？大丈夫。ちょっと考え事してただけ。」

「これから忙しくなるな～。仕事とプライベートで両方だぜ。」
隼人の優しい手が、私の頭を撫でる。
「ケイと旅に行けるのも楽しみだし。」
「俺がついてるから、不安にならなくてもいい。」
隼人の笑顔に、素直に頷く。
「さてと、お腹もすいたし、昼ご飯食べに行こうか。」
隼人の優しさに、心が溶けるように、自然と笑顔を返す。

忙しい日々の、つかの間の休日。

雪がちらつく街の中を車は走り抜ける…。

11　自覚

真夜中の、音のない時間。ビルの合間から見える星空。今夜も静かに光り輝いている…。

隼人に送ってきてもらって、今夜は早く寝ようと布団に入ったけれど、どうしても眠れない…。

諦めて布団からでてきて暗闇の中、毛布を被る。

夜空を眺めながら、これからのことに思いをめぐらせる。

「隼人を巻き込んでしまったけれどよかったのかな…。」

ずっと気にかけていたこと。私が行くのは、自分が決めたのだから何があったとしても仕方ない。でも、今回の旅は安全の保障はないし、万が一のことがあった時に、隼人も一緒に巻き添いになってしまう。私のわがままで、隼人の人生を潰してしまっては申し訳ない…。

今ならまだ間に合う。

そう思ったら、いてもたってもいられず、もうこの時間なら寝てるだろうと思う隼人の所にメールする。明日には何か言われるのは間違いないけれど。

『隼人、今回の旅、一緒に行くようになっているけれど、考え直せないかな？やっぱり私のわがままで行く旅に隼人は行かない方がいいと思う。私はまた地球に戻ってくるつもり。今は待っててて…とは言えないけれど。万が一の事があった時、隼人の先の人生まで壊し

てしまう方が私は辛い。あなたのことが嫌いになったわけじゃない。私の愛している大切な人を巻き込みたくないの。考え直してもらえるかな…。ごめんなさい。おやすみなさい。ｆｒｏｍ　ｋｅｉ』
隼人に対しての最後のお願いをメールに託し、送信する。

「勝手なこと言ってるって怒られる…ね。きっと。」静かな空間の中、呟く。

と、その時携帯の電話が鳴る。びっくりして確認すると、

「隼人…、起きてたの？」もう真夜中だというのに。出ようかどうしようか迷う。鳴りやまない携帯電話のボタンを恐る恐る押す。

「もしもし…。」

「ケイ？」

「うん。」

「話しがある。１５分位したらそっちいくから待っててて。」
と言って、一方的に切ってしまった。

「え？今からって。」
今日は、日曜日だから仕事は休みだけど、まさか本気でくるつもり？
呆気にとられてると、

「ピンポ～ン！」
チャイムがなる。
こんな真夜中、お客様が来る時間ではない…ということは、間違い

なく、先程の電話の主。
恐る恐る鍵を外して扉を開けた、と同時に隼人が玄関に入ってきて、私を強く抱きしめる。
呼吸が早い…走ってきたんだ。
「何なんだよ、あのメールは。」
私の顔を両手で挟む。
「あの文面そのままよ。」
大きな溜め息をつく。
「とりあえず部屋に入って話そう。」
私の手を引っ張り、部屋に入る。
ソファーに座った隼人の隣に、そぉっと座る。
「それで、今になって気持ちが変わってきたのはなぜ?」
仕事中の厳しいオーラをまとって私の顔を見る。機嫌が最高に悪い…。まさか『氷のプリンス』が我が家に来るとは。でも伝えなきゃ。
「今になってじゃなくて、ずっと気になっていたことなの。とりかえしがつかなくなる前に言わないとと思って。旅に一緒に行ける嬉しい気持ちの後ろにいつもいたわ。道中何かあれば、隼人のこの先の人生を壊してしまうかもしれないっていう恐怖があって。それなら最初から行かなければいいと思ったの。」
「帰ってきたい気持ちはあっても帰れなくなるかもしれないし…。せっかく気持ちが隼人に伝わったのに、こんなにも愛しているのに、離れてしまうのはつらいけど…。」
気がついたら、涙が溢れ出して止まらなくなっていた。

「もういい…。」
いつの間にか、いつもの優しい表情に戻り、私の身体を抱きしめていた。

「ケイ、そのまま聞いてくれ。俺はこの前も言った通り、お前が一人で行ってしまったらどうすればいいかわからないし今更離れたくないんだ。地球に帰れなくなってもいい。ケイが一緒なら。一緒に行くことを、俺自身が決めたんだ。もう迷っていない。一生地球に住むか、宇宙にでて違う環境で住むか、その時になったら決めればいいだろ？」

「隼人…。」
私は言葉にならなかった。

「ケイ、旅にでるまで一緒に住まないか？もちろん帰ってきてからも。身の回りも片付けていかないといけないだろうし。部屋は俺の部屋だけ残して旅にいけばいい。これからもっと忙しくなるし、逢えないのがつらいのがなくなる。どう？」

私はやっと止まった涙がまた溢れ出した。隼人の提案に黙って頷く。顔をあげ、お互い見つめ合う。

「愛してる…。」
隼人はそう呟くと、抱きしめたまま啄むようなキスをしてくる。だんだん角度をかえ、深くなる。私も隼人を思う愛しさに溶けてしまいそうな気持ちになる。もう迷わなくてもいい。そう思えることがなにより幸せを感じる。

週末、私は今まで住んでいた家から、隼人の住む家へ引越しをした。

……

……

旅の始まり。
私の新しい人生が始まる。

新しい年を迎え、私も職場を退職し、隼人と旅の準備をし、出発の日は駆け足でやってきた。

１１　自覚（後書き）

作者の霧島です。いつも足を運んで頂きありがとうございます。本当は１１話から、宇宙に旅立つ話にするつもりでしたが、主人公が悩んでいる様子でしたので、１２話以降に出発することにしました。やっと、気持ちの整理がついたようで。隼人も惚れ込んでいますが、旅には、恋路の強敵が出てきます。どうなりますやら・・。これからもよろしくお付き合いくださいませ。

１２　旅立ちの日

鉄道の駅入り口に、二人が降り立つ。

国内外を走る鉄道と宇宙に繋がる鉄道の始発駅ということもあり、野球場が４つや５つ入りそうな広さと、その上吹き抜けで高さもある。駅には、隣接のビルや店もあり人も多く賑わっている。

「迷子になりそう・・。」

圧倒され思わず呟く。

頭上でクスクス笑う隼人の声。

「ちゃんと手を繋いでいないと迷子になるぞ。」

隼人の言葉にムッとする。

「こどもじゃないから。」

「わかったわかった。」

相変わらずクスクス笑いながら嬉しそうに私の手をとる。

「隼人・・嫌いっ。」

手を離そうと思ったら、ぐっと引き寄せ抱きしめられた。

「ごめん・・。今更嫌いになられても困る。」

見上げると本当に困ってる顔をして私を見ている。背伸びして私から唇を重ねる。

「本気で嫌いになるわけないじゃない。」

にっこり見つめると、

「まいった…降参…。」
隼人の溶けてしまいそうな笑顔にドキッとしてしまう。
「さてと・・行きますか。」
頷くと隼人が荷物を持ち、手続きのため、二人で受付窓口に向かう。

……

旅立つ1週間前。
最後の打ち合わせのために、不動産屋にきていた。
「いよいよ1週間後だね。」
主人が大きな袋を抱えてきた。
「持っていくものが間に合ってよかったよ。」
言いながら、袋の中からテーブルの上に出す。
「まず二人のパスポートね。もし、道中無くしたとしても、最寄の駅で再発行してもらえるから心配しないで。指紋登録してあるから、無くしたパスポートは使えなくなるし。」
「鉄道の切符も同じく。」
「すごいですね。」
思わず感嘆の声が出る。

「指紋なら二人として同じ人はないもんなぁ。でも偽造できない・・
とは、１００％いえないでしょうけど。」
隼人は主人に話しかける。

「たしかに、１００％ではないね。気をつけるに越したことはない。
あと、パスポートに記載してある住所は、ここの店にしてあるから、
とられたとしても、第三者に、二人の住んでいる所は知られること
はないし、実際僕も二人の住所はしらないから教えようがない。」

「え？」
びっくりして聞き返す。

「念には念を押しておかないと、何に利用されるかわからないから
ね。」
主人がにっこり微笑んで答えてくれる。

「そこまで迷惑かけては・・・。」
と言いかけると、

「ありがとうございます。お世話になります。僕たちに何かあった
ときにはこちらに連絡が入りますね。」
なにやら細かい話を二人で話し始めた。
どうも、私の思いと違った次元で二人は話しているみたい。そう思
って話の中に入るのをやめた。

二人を眺めながら、ぼぉっとしていると、

「ケイ？どうした？」
隼人が私の顔を覗く。

「ん？二人で話してたから黙っていただけよ。」
「そっか。気がつかなくて悪かった。ごめんな。」
隼人の大きな手が私の頭を撫でる。
彼はよく私を撫でてくれるけれど、優しい手が気持ち良くてホッとするから大好き。
「あとは携帯電話とクレジットカード。両方全宇宙で使えるから心配しないで」
もう私は、何も言わず頷くだけ。
「あとはね。」
と、言いながらＢ５サイズの封筒を差し出した。
「鳴沢さんにお願いする、鍵と手紙ね。」
そう言われて、無意識に受け取る。
「この前も言った通り、ｓｐｅｒａｎｚａ［スペランツァ］、についてからの地図と連絡先が書いたものも入っている。」
「無事終着駅まで着けることが前提だけど、万が一着けなかったり、無くなってしまっても、責任は感じなくていいからね。」
「一応、鍵にはＧＰＳのような物も組み込まれてるし。」
「はぁ…。」
返事のしようがない。
「実は、せっかくのプライベートの旅、何だか押し付けてしまったようで申し訳なく思っているんだ。」

「それには私が承諾したことで、気になさらないで下さい。」
「彼も一緒なので心強いですし。」
隣に座る隼人も頷いている。
「そう言って貰えると嬉しいな。鍵を持っている以上、こちらでも場所がある程度把握できるし、何かあったら携帯で連絡してくれればば力になるから。」
「ありがとうございます。私たちの方がすべて準備して頂いて申し訳なく思っています。旅の途中に連絡するようにしますね。」
「いい旅になるように祈ってるよ。」

準備が揃って、店を出てきたら、もう辺りは真っ暗で、星が輝く時間になっていた。

……

「あと1週間か…。」
自宅に戻り夜空を眺めていると、背中に温かいものを感じる。隼人が後ろから抱きしめてきたからだ。
「何を考えてる？」
「ん？いよいよ出発なんだなぁって思ってた。」

「そっか…。」

「国内旅行なら、こんなに身構えて準備しなくてもいいんだけど、今回のは特別だから、期待と不安が交互に来る感じ。」

「今日の、店の主人の話を聞いて特にそう思う。隼人は思わない？」

「たしかに、いろいろ思うことはあるけどさ。」

といいながら、私を正面に振り向かせ抱きしめる。

「すべて始まってみなきゃわからないものだと思うよ。仕事でもそうだっただろ？新しいプロジェクトに取り掛かるのに、心配よりとりあえずやってみて結果がでると。」

「だから今回の旅も行ってみないとわからない。行く前から不安になることはないんだよ。」

「俺も一緒だし。」

「そうだね。でもごめんね隼人。結局一緒に行くようになってしまって。私が辞めればよかったのかもしれないけど。」

「もう、それは言わないの…。」

私の顔を両手で挟み、額に優しいキスをする。

「俺は、一緒にいられるだけでいい。この気持ち伝わってる？」

挟んでいた手が顎に移り、今度は深く唇を重ねる…。

「俺を信じなさい。ちゃんとお前を守るから。」

黙って頷く・・・。

「ありがとう。隼人と行けるのはとっても嬉しいし心強い。これからよろしくお願いします。」

運命は自分で開くもの…。待っていては、幸運は掴めない。
勇気を持って、一歩前へ歩みだす…。

１３　波瀾の幕開け

「確認させて頂きます。」受付につくと、パスポートと切符を出した。

二人それぞれに、指紋認証で確認する。

「渡辺隼人さん、鳴沢ケイさん、ですね。確認させて頂きました。ありがとうございます。」

「車両は２０号車、お部屋は3号室のＴｗｉｎコンパートメントになります。」

「ｓｐｅｒａｎｚａ［スペランツァ］行き、出発は５０番線、時間は２０時になります。確認のため、出発１５分前には乗車されますようお願いいたします。」

「ありがとう。」

パスポートと切符を受け取る。受付を離れると、立ち止まって大きな深呼吸をする。

「どうした？」

少し前を歩く隼人が立ち止まって振り返る。

「何だか緊張してドキドキしちゃった…。はぁ～～。」

床に座り込みたいくらい、力が抜けた。

「そっか。落ち着いた？」

にっこり微笑んで、頭を撫でる。

「俺も気持ちは、新婚旅行みたいで、嬉しくて、ドキドキしてたけ

どなぁ。」
さらっと爆弾発言する隼人。私もドキドキしながら、顔まで赤くなる…。

「まだ出発まで時間があるし、食事でもする？地球に戻るのは、ちょっと先になるだろうから。」

「そうね。食事というよりケーキが食べたいな。あと、おいしいミルクティーが飲みたい。荷物の中に、紅茶のティーパックも入れてあるけど。」
「ちなみに隼人の好きな銘柄のコーヒーも入れてあるし♪」

「良く気がついた…というか、荷物の中に何が入っているか、宝探しみたいであとで見るのが楽しみだよ。ケイ可愛すぎる。」

クスクス笑いながら、私の手を繋ぎ、
「じゃ、時間までカフェでも行こうか。」

歩きだすと、周りが騒がしい。その中からこちらに向いて走ってくる男の人がいた。急なことで、私は避けきれず男の人とぶつかってしまった。ふらついて倒れ込む寸前、隼人が抱えてくれた。

「危ないじゃないの。」
と言うと、相手の男は私の顔をみて、一瞬固まって、びっくりしたような顔をしたがその後、何も言わず走り去って行った。

その姿を、隼人は厳しい『氷のプリンス』並のオーラを放ちながら見ていた。

「なんなの…あいつ。気分悪いなぁ。」

「ケイ、大丈夫か？」
心配そうな顔で私の顔を覗き込む。
「体は大丈夫だけど、気分は最悪。」

「…だよな。」

「行こうか。」
私の肩を抱き寄せ、歩き始めた。

この時の出会いが、旅に影響するなんて…。
気がつくのはまだ先のこと。

14　Midnightblue

「おいしい。」
大好きなケーキとミルクティーを口にして、思わず笑顔になる。
先程のイライラしていた気持ちが、やっとおさまってきた。

「ほんと、甘いもの食べてる時は幸せそうだよなぁ。」
私の前で隼人は、ブラックコーヒーを飲みながら、微笑んでいる。
カップをさりげなく持つ姿に
思わず見惚れる。

「とっても幸せよ。」

「俺といる時よりも？」
ちょっぴりいたずら目線で私を見る。

「幸せの大きさが違うと思うけど？」
笑いながら視線を返す。

「微妙な返事だな。」
クスクス笑う隼人。

「私は、隼人が一緒にいるから幸せなの…。」
言ってしまってから、恥ずかしくて、カップに残っているミルクティーを飲み干した。

「さてと、時間だ。そろそろいくか。」

そっと立ち上がると、いつの間にか、横に立っていた隼人が耳元で、

「俺もケイが一緒にいるから幸せなんだよ。」
言いながら腰を引き寄せ
「愛してるよ。」
と、頬にキスをした。

……

５０番線ホーム。

鉄道の駅の中でも、最上階にある、漆黒の宇宙に一番近い駅…。
夜空を見上げると、今夜は満月の月が優しく輝いている。

ホームに上がってきたけれど、列車はまだ入ってきていなかった。

「早かったのかな？」
「もうすぐくるだろう。」

話をしていると、ホームに音楽が鳴り、滑るように列車が入ってきた。
ここに来るまえに見たポスターで、列車の色はわかっていたけれど、本物は、闇の中でも存在感のある艶のある青。
目の前に止まった列車に、感嘆の息を吐く…。

「絵で見るのと、実際目の前で見るのと全然違う。素敵な列車ね。」
「持っている雰囲気で圧倒されそうだな。すごいよ。色はポスターに書いてあったけど、『Ｍｉｄｎｉｇｈｔｂｌｕｅ』って、たしか布とかだと濃紺だけど、列車に塗装するとこれだけ艶やかになるんだな。直訳すると『真夜中の青』か…。宇宙を駆け抜ける列車に相

応しい色だよな。」

「さすが隼人。色には詳しいわね。仕事の経験がいきてる。」

「まぁね。ケイも…だろ？」

「隼人ほどでもないけど、ほどほどには分かるわ。新人の頃、色見本もいやってほど見たから。」

「見たよなぁそういえば。俺もそんな詳しいわけじゃないけど、営業で必要だったからその分勉強して、わかるだけ。」

二人で列車にくぎ付けになって話をしていると、中から車掌さんが出てきた。

「お待たせいたしました。ｓｐｅｒａｎｚａ［スペランツァ］行き、当列車をご利用頂きありがとうございます。」

車掌さんと、スタッフが入口に並び、笑顔で一人一人に声をかけ、迎える。

隼人と私も挨拶しながら、乗車した。

２０号車の、Ｔｗｉｎコンパートメントの部屋に入ると、あまりの豪華さにびっくりして呆気にとられる。

荷物を置きながら見回す。

「ホテルの一室みたい。」

「不動産屋の主人、何者だろうな。」

隼人がボソッと呟く。

「仮に、今回援助がなくて、私の私財全部投入しても、この部屋での旅は無理だったと思う。」
「私の持っている鍵が、それだけ大切ってことね。」
「たぶん、そうだろうな…。」
と言う隼人は、何か考えているみたい。

「ケイ、これからの旅は俺から離れるなよ。何となくひっかかるものがあるし、不動産屋の主人の言う通り、安全の保障がない旅だから。」
「もちろん誰がきても手出しはさせないけどな。」
手を伸ばし、私を抱きしめる。

「大丈夫？無理しないでね。」
私も、隼人の背中に手を伸ばし抱きしめる。

「これでも剣術の心得はあるし、護身の拳銃も、もちろん持ってる。でも、一番いいのはそういう危険がないこと。」
「大丈夫、俺がついているから。」
抱きしめた腕の力が一瞬緩んだと思ったら、唇に温かいものが重なった。彼の体温は、私の不安な心を無くしてくれる。隼人がいてくれて良かったと思った。

……

「コンコン」
「車掌ですが、切符の確認に伺いました。」

入り口の小窓から確認すると、先程の車掌さんの姿が見えたので、内側から開けた。

「車掌のジョニーです。切符とパスポートを確認させて頂きます。」
隼人と私のをそれぞれ確認する。

「渡辺様、鳴沢様、ですね。ありがとうございます。行き先は、ｓｐｅｒａｎｚａ［スペランツァ］。１ヶ月程の旅になります。よろしくお願いいたします。」
「こちらこそ、よろしくお願いいたします。」
「各星の滞在時間などの案内は、地球時間になります。あと、このお部屋の鍵は、今から終着駅まで指紋認証になりますので、それぞれ登録お願いいたします。」
「あと１０分程で出発になります。ではまた何かありましたらお呼び下さいませ。」
と言って車掌は去って行った。

「もうすぐ出発だって。」
窓から改めて外を見る。今度この景色を見るのはいつになるのだろう。もしかしたら二度と見ることが出来ないかもしれない。いろいろなことが、脳裏に浮かぶ。

「いい旅になるといいな。」
横に座る隼人。

「なるわ、きっと。」
笑顔で答えると、隼人も頷く。

ホームでは、出発のアナウンスと音楽が流れている。
人生が変わるであろう、旅が始まる…。

14　Midnightblue（後書き）

話の中に出てくる列車の色『Midnightblue』ですが、今回色を探していた際、私のイメージ通りの色が見つかりました。名前も・・素敵でしょ？＾＾

http://www.colordic.org/colorsample/4162.html

１５　漆黒の空へ（前書き）

更新が少し遅くなりました。今回は話の流れ上、２話分くらいの文字数で書いています。お時間がある方、よかったらお付き合いくださいませ。

15　漆黒の空へ

出発のメロディーが、ホームに流れ、同時にゆっくりとｍｉｄｎｉｇｈｔｂｌｕｅの列車が動きだした。

スピードが増してくると、窓の外の景色も流れるように動いていく。眼下には、月に照らされた、私たちが今まで住んでいた街が見える。

だんだん離れていく街を、窓際で眺める。

地球での海外旅行なら、悩むことなく、もっと簡単に考えて旅にでたんだろうけれど、今回の旅は最初から全く違う。

結局両親には一方的に、海外に数ヶ月行ってくると言ってきた。返ってくる言葉は想像がつくから。

（結婚相手は、たぶん…帰れたら紹介できるだろうけど、ごめんね。と心の中で呟く。）

外を見ていると、漆黒の空に向かっている列車の先頭車両が、遠くに見える。少しカーブがあるのか。もちろんレールがあるのは見えないから、前に進んでいるのだろうけど、不思議な感じ…。

「ケイ？」

声のする方に振り向く。

「ん？」

隣に座る隼人が穏やかな微笑みで私を見つめる。

「無事に地球に帰ってくるんだろ？そんな心配そうな顔しなくてもいいんだぞ。」
どうも私の心は読みやすいらしく、いつも隼人は私に一番欲しい言葉をくれる。

「ありがと。」
嬉しい気持ちを、笑顔で返す。

「せっかくの二人旅なんだから楽しまないとね。」
横から伸びてきた腕が、私の肩を抱く。
「普通に何もなければ、往復２ヶ月バッチリ、ケイと一緒にいられるし。新婚旅行でもそんなに長い旅にはならないぞ。」
とあっさりと言い放つ。

「あの…。」
遠慮がちに、隼人を見つめる。
「女性の私が言うのもなんですが…。」
「私を貰って頂けるのかしら？」
「いや、付き合い始めてそんなにたっていないし、新婚旅行とか言われても…。」

一瞬、目を丸くして固まる隼人。その後、クスクス笑い始めた。

「真剣に言ったのに…。」
隼人から離れようとしたら、抱いてる肩を更に引き寄せられ、抱きしめられてしまった。

「俺は、最初から言っただろ？ケイじゃなきゃだめだし、誰にも渡さないって。
プロポーズは改めてしようと思っているよ。時と場所を考えてね。

第一、結婚しようと思ってなければ、一緒にここまでこない。」
見上げると、
「だろ？」
といいながら、私の額にキスをする。
「本当は、宇宙空間にでてからにしようと思っていたんだけど。」
ポケットから小さなケースを取り出す。
「開けてごらん。」
私は渡されたケースを開けた。
「あっ。」
中にあったのは、お揃いの指輪。
「正式な婚約指輪と結婚指輪はまた決まった時に渡すから、これは…予約指輪みたいなのかな。」
「予約指輪なんて聞いたことないわ。」
「俺が決めた。必ず一緒になるって。」
「もしかして、俺と結婚するのいや？」
「いやって言ったらどうする？」
そんな気持ちは全くないのだけど。
「いやって言わせないから大丈夫。」
今までみた中でも、最高クラスの笑顔で微笑む。

「俺、ケイのことだけを愛してるから。」
「隼人…。嬉しい。私もよ。愛してる。」
隼人に抱き着くと、しっかりと抱きしめてくれる。
「俺らは、恋人としての付き合いは短いけれど、出逢ってからは１０年近いし、毎日逢ってたから、時の長短は感じない。口にはださないけど、お互い思い続けてきたなんて、凄いことだよな。」
「運命の人との出逢いは『時』が必ずあるって言うけど、隼人とは、今なのかもしれない。あの時会社で、偶然話をしなければ、今ここに二人でいられなかったもの。導かれて…って気がする。」
「指輪はしてもらえる？」
隼人が改めて聞く。
「もちろん、喜んで。」
隼人がケースから指輪を取り、私の左指にはめた。
「サイズ、ピッタリ。よくわかったわね。」
「前にさりげなく聞いた時、言ってたからね。」
「さすが…。」
後の私の呟いた言葉は、聞いてなかったらしい。
「もうひとつ、この指輪の意味は、これからの旅で、たくさんの男たちに会うだろうから、男よけの意味…もある。俺、独占欲強いから。」
「宇宙で通用するかわからないけれど、こっちの方にメインの意味

があるかもしれない。」
真剣な顔で話している隼人をみると、なんだか嬉しくて、私から隼人に唇を重ねたが、すぐに主導権は隼人に代わり、息ができないほど、お互い角度を変えながら強く重ね合う。意識がなくなりそうになってきた時、

「このままベッドへ連れていって抱きたいけど、あと少しで宇宙空間にでるみたいだから、その後にしようか。」
と言って、私を抱きしめる。

隼人の潤んだ瞳に見つめられドキドキする。身体全体が色気のあるオーラが出てきてるようで、それだけで溶けてしまいたい気分になる。

思いが通じる前と後では、隼人のオーラの強さが全然違う。こんなに情熱的だったのかと。前は、よっぽど私の前で押さえていたんだろうと思うくらい。後は、特に最近はもう、遠慮なく洩れている感じで、長旅一緒だけど、私の身体が持つだろうかと心配になるくらい。
でも、今は隼人の腕の中が一番安心できる。今まで付き合った彼に感じたことのない気持ち。本当に心から愛しいと思う。隼人も同じ気持ちなのだろうか…。そうだと信じたい。

「あと5分で、大気圏突入します。」
車掌のジョニーさんのアナウンスが入る。

「いよいよ宇宙空間にでるんだな。」
「ワクワクする。」

すでに、列車は雲の層の上にいるので、空の青、雲の白、そして地球と大気圏の堺がうっすらと見えてきた。
列車に乗っていると、酸素もない上空にいるはずなのに、何も変化がない。耳の圧もかからない。不思議なことが多い。なぜ？って言いはじめればきりがない。
なぜ、この列車はレールがないのに、走れるの？など。基本的な所が、普通じゃないから、この空間にいられるんだと不思議と納得した。

「宇宙空間を走る列車は、特別仕様がたくさんあるんだな。」
きっと隼人も同じ思いだったに違いない。

列車を包む回りの色が変わってきたと思ったら、数分後、宇宙空間にでた。

前は一面の星、振り返ってみると、青く輝く地球が見えた。
昔、宇宙飛行士が宇宙から地球をみて人生観が変わったと聞いたことがある。

「隼人…、地球、綺麗だね。」
隼人も言葉なく、頷く。

「地球から出てきたこと、後悔してない？」
隼人に聞く。

「何処に居ようと、俺はケイが近くにいればいいから後悔はないよ。」

「ケイは？綺麗な地球みて後悔した？」

「してない。ただ私の故郷の星だなと思っただけ。不思議、もっと感傷的になるかと思ったら大丈夫だったわ。」

宇宙空間にでたことを、地球にいる、不動産屋の主人にメール送る。

［櫻井さんへ：

鳴沢です。先程、地球を出発し、無事大気圏をぬけ、宇宙空間に出てきました。

今の所、何もなく穏やかに過ごしています。列車のお部屋、素敵すぎてびっくりしています。

ありがとうございます。私の安月給では到底無理（笑）なお部屋です。

彼と、櫻井さんから預かった鍵の重さを感じています。無事終着駅まで行けるといいのですが。

一つ、そういえば思い出しました。列車に乗る前、駅でぶつかった男性が、私の顔をみて、凄くびっくりした様子で、走って行きました。なに？と思いましたが、疑いだしたらキリがありませんが。気をつけるようにします。では、また連絡します。

ｆｒｏｍ　鳴沢ケイ］

「櫻井さんへ送ったの？」隣で隼人がちょっと不機嫌な声で尋ねてきた。

「一応ね。途中経過送っておいたほうが、何かあった時にいいかなと。鍵も預かってるし。」

「…妬いてる？」

「…少し。」

「ごめんね。でも、今回の旅に絡んでいる以上は、連絡入れたほうがいいかなと思って。鍵にＧＰＳが埋め込まれてるみたいだし。」
「あと、隼人も感じてると思うけど、この鍵、きっとただの鍵じゃない。私は狙ってくる人間がいるんじゃないかと思ってる。」
「私もある程度武術はたしなんでるから、自分で身は守る。でも、無理なら隼人お願い。」

「お願いされなくても、王子は姫を守りますよ。」

「姫？」

「俺が王子なら、ケイは俺が守る姫、だろ？」

「ああ、そっか。王子はわかるけど、私は姫らしくないわ。」

「いや…、俺にとって大切な姫だから、全力で守る。」

「王子様、ではこの先、どうかよろしくお願いいたします。」
スカートを少しつまんで、頭を下げる。

ニコッと隼人が笑う。
「では姫、次の駅の到着が二日後になるらしいので、ひとまず休みますか。」
すっと私をお姫様だっこで抱き上げる。

「寝かせてもらえるのかしら？」
「さぁ、それはお姫様次第ということで。」
隼人の瞳の奥が、輝く…。
「お手柔らかに…。」

二人が眠りに着く頃、携帯に返信のメールが届いた。

［鳴沢さん：
先程はメールありがとう。大気圏をぬけたようで、よかったですね。お部屋は気に入って頂けてよかったです。今回の旅に私の私情でお願いしてしまったので、お礼がわりと、あとは、ケイさんが心配されてるように、用心するにこしたことはないので、セキュリティがちゃんとしてる所にお願いしました。指紋認証だけど、油断しないようにね。隼人くんも近くにいるし、婚前旅行のつもりで楽しんできて下さい。あと、預けた鍵と、地図は念のため別々に保管したほうがいいかと思います。
また連絡待っています。
ｆｒｏｍ　櫻井尚人］

漆黒の世界の中、輝く星の合間を縫って、列車は、地球時間で二日後に到着予定の、次の駅『Ａｌｂａ［アルバ］夜明け』にむけてひた走る。

16　怪しい鍵

「あ、メールが来てる。」
ベッドサイドのテーブルで、光っている携帯電話に手を伸ばす。
掴んだとたん、ベッドに引き込まれる。

「おはよ。ん…。」
隼人が、妖艶な雰囲気で言葉より先に、唇から首筋へ熱いキスをしてくる。このままいってしまうと、昨夜の延長になりそうで困る。
そうじゃなくても、動けないのに…もぅ…。

隼人に何とか話かける。

「隼人、メール来てるの。多分、櫻井さんだわ。」
「あとで見ればいい。」
「だ〜め。大事なことならどうするの？」
渋々抱きしめていた腕を緩める。

「見て。」
隼人にメールの画面を見せる。
櫻井さんからきたメールを読みながら、隼人の顔つきが厳しくなる。

「別にしたほうがいい…って、普通の鍵じゃないのを完全に認めてる内容だな。何が怪しいものじゃないだよ、まったく…。契約違反じゃないか？ＧＰＳ付いてる時点で十分怪しかったけどな。そうじゃなくても、今回の旅にはリスクがついてまわるのに。」
深い溜息をつきながら、私を腕の中に抱き寄せる。

「ケイの考えていたことが当たってたみたいだな。」
「残念だけど、そうらしいわね。」
私も溜め息をつく。

「今更ながら、俺もついてきて本当によかったと思うよ。」
「手放したら、二度と逢えない所だった…。」
隼人の抱きしめる腕に力が入る。

「これだけの部屋、用意出来る人だし、ただの、不動産屋じゃないのは確かよね。」
「契約の時、もっとつっこんで聞いとくべきだったわ。」
とぼやく。

「そうだな。俺も後で櫻井さんにメールするわ。こうなったら、本当の事情を知らないと、こっちの身が危ない。どこまで正直に話すかわからないけど。」
「明日『ａｌｂａ』に到着する前に話つけとくかな。」

いつの間にか、話の仕方が、仕事をしていている時の口調になっている。
「久しぶりに仕事モードって感じね。隼人の仕事してる姿も大好きだったけど。」

「ん？そうか？」

「うん、社内にいる時は、いつの頃からか覚えていないけど、気がついたら隼人を目で追ってた。気がつかなかったでしょ？それに、私だけじゃなかったみたいだし。」
「社内でも人気があったから、色んな所で目がいたはずよ。会社辞めるとき大変だったでしょ？」

「興味本意の視線には気がついてはいたけど、他の女性は別にいいやと思ってたし。でもその中に、ケイもいただなんて、初めて聞いた。気にしててくれてたなんて嬉しい。
辞める時は、別に大変じゃなかったぞ？付き合ってるのみんな知ってるし。でも、そういえば、何人かは声かけてきたな…。」

「いつも隼人と同期っていうだけで、私のほうに、とばっちりはきてたけどね。」
思いだすだけで溜め息が出るほど。。

「そうなのか？」
知らなかったのは本人だけ…。

「でももう、過ぎたことはいいの。今はこうやって、独り占め出来てるし。」
隼人にぎゅっと抱き着く。

「ケイも知らないだけで、男性陣から俺も言われてきたんだぞ。」

「そうなの？」

「同期だから、逢えるきっかけ作ってくれって言われたけど、即答で却下してやった。自分で言えって。何人かに誘われてるだろ？」
「たしか。でも丁寧に断ったわ。彼もいた頃だったし。」

「ケイに言った時点で、仕事は容赦なかったけどな…。」
さらっと答える

「……まったく。公私ごっちゃまぜじゃない。よくみんな大丈夫だ

ったわね。王子の事情聞いたら怒られたわよ、きっと。」

「そうでもしないとやってられなかったんだ。他の奴らにケイを持っていかれるなんて考えたくなかったし。」

「でも、今はこうやって、腕の中にいてくれるから幸せだよ。」

優しい笑顔の隼人と目があう。

「せっかく手にいれた幸せを絶対持って行かれたくないし。櫻井さんとちゃんと話をしておかないとな。」

そういいながら、頬にキスをする。

「さてと、起きて朝食にするか。食堂車があるみたいだぞ。」

「そうね。言われたら急にお腹すいてきたわ。」

……

食堂車に行く途中、廊下の窓から見える外の景色は、太陽から離れて来ているためか、黒が濃くなっている気がする。

明日、地球を出て、初めて停車する星『ａｌｂａ（アルバ）』は、火星を過ぎて少し先に行った星らしい。

今では火星も地球並に環境を整えられ、政府も、地球から一番近い宇宙移住空間としてすすめている。今回、この列車は止まらず通過する。

近い所に住める所があるのに、あえて遠い星を選んだ私たち。先を行く意味があるのか…。

食堂車の入口の扉を開けると同時に、おいしそうないい香りが鼻をくすぐる。

すぐにテーブルに通される。車内を見回すと、調度品も一流ホテル並の物が置いてある。
夕食は、ドレスコードが入っているのかしら…。
朝食はトーストとスクランブルエッグ、サラダなど地球で食べていたものと変わらない。
食事もそうだけど、車内の雰囲気に、何かさっきから違和感を感じるのは私だけなのだろうか・・・。
隼人はブラックコーヒー、私はミルクティーを食後に飲みながら話しをする。
「部屋に戻って、櫻井さんに連絡するかな。」
「食事しててもも、何だか落ち着かないわ。」
「どうした？」
「私の思い違いかも知れないけど、乗客の中に、駅で私にぶつかった人いたでしょ？似てる人、さっき見かけたのよね。」
「本当か？」
「あの人が、直接影響があるとは言い切れない。櫻井さんにも一応報告したけど。疑いだしたらきりがない。」
「そうだな。とりあえず部屋に戻るか。」

部屋に戻る途中に、サロンカーがあって、乗客が軽いお酒などを飲みながら寛いでいる。
1ヶ月も一緒に旅をすれば、いずれ話もするようになるだろうと思い、私たちは、たちよらずに部屋に戻った。

「はぁ…。疲れた。」

私の隣に座った隼人は、早速、不動産屋の櫻井さんにメールを打ちはじめた。

［櫻井さんへ：
渡辺です。お世話になります。明日到着予定の『ａｌｂａ（アルバ）』に向けて、列車は走っています。今回メールを送らせて頂いたのはケイに託した「鍵」についてです。
昨日ケイに返したメールの中で、鍵と地図は別々に保管した方がいいと書いてありましたが、今回の鍵は、誰かに狙われるほど大事な鍵なんでしょうか？
もしそれが本当なら、契約の際、ケイに嘘をついたことになりますが。
本当のことを教えて頂ければと思います。このままでは、婚前旅行どころではありません。
もちろん、自分がいる限り、彼女は全力で守ります。自分にとって、大切な大切な彼女ですから。
ケイも契約の際、鍵のこともっと深く聞いておくべきだったと言っています。
今は、事情がわかって納得の上で、彼女も鍵も守りたいというのが、自分の本心です。櫻井さん、教えて下さい。　ｆｒｏｍ渡辺隼人］

「ふぅ…。」

送ってから、溜め息をつく。
「どんな返事が返ってくるんだか。」
隣に座るケイをみると、外を見ながら、不安そうな顔をしている。
肩を抱いて引き寄せる。
「俺がいるから大丈夫。心配するな。」
黙って頷く…。

少しずつ、二人に近づいて来ている怪しい影、まだ気づいていない…。

17　旅の目的

［隼人くんへ：

メールありがとう。
明日には、『ａｌｂａ（アルバ）』につくんだね。

早速、本題に入りますが。

ケイさんに託した鍵は契約の時に言った通り、決して怪しいものでも、嘘でもないんだ。

でも、とてもとても大切な鍵で。矛盾してるといわれそうだけど。

その鍵は、実は終着駅、『ｓｐｅｒａｎｚａ［スペランツァ］』、星、そのものに影響してくる場所の鍵。
それが何処の…とは今は言えないけれど。僕が持っているということは、僕もｓｐｅｒａｎｚａの少なくとも
関係者…でもあるのだが。

なぜ、今回鍵を届けるようになったのか？
それは、ｓｐｅｒａｎｚａに着いてからではないと、答えられないんだ。
最初、ケイさんだけなら、やめようと思っていた。ケイさんも、今回行くかどうか、かなり迷っていたはず。最終的に、隼人くんが一緒に行くということになって、僕もお願いすることにしたんだ。
今、二人が持っている鍵が正式な物で、もし、万が一無くしたとし

て、誰かの手に渡っても、鍵として使えないようになっている。二人が一緒にｓｐｅｒａｎｚａにたどり着いてこそ、機能する鍵なんだ。

ここまで言ったら、セキュリティもケイさんに書いたメールの意味も、わかって貰えると思う。

隼人くんは、ケイさんがリスクの高い、危険な事件に巻き込まれるのではないか、と、心配をしてるんだと思う。

今は、ちゃんと鍵に埋め込んだＧＰＳも機能してる。

乗車してる列車に２人。いつも隼人くんたちの近くにいるはず。あとは停車駅ごとに数人ＳＰをおいてある。が、出発前に言った通り、地球からでれば、１００％絶対安全という保障はない。

隼人くん、旅の間、ケイさんの近くを離れないようにお願いしたい。鍵を狙っている関係者だけでなく、旅には、女性を拉致する集団もあったり、道中治安も良くない。隼人くんよりケイさんが狙われる確率の方が断絶多い。

念のため、ケイさんが言っていた男も、注意したほうがいい。

気にかかることがあったら小さなことでもいい。電話でもメールでもいい。連絡してほしい。無理なことをお願いして本当に申し訳ないと思っている。

でも……ｓｐｅｒａｎｚａの未来がかかっている。

よろしくお願いします。

このことをケイさんに伝えるかは、隼人くんに任せたいと思う。

また連絡下さい。

ｆｒｏｍ櫻井尚人」

櫻井さんから来たメールを読んでいる隼人は、今までに見たことがないくらい、厳しく難しい顔をしている。
なかなか近寄りがたい雰囲気…どうしよう。
そんなに状況が悪いのだろうか…？

「隼人？」
恐る恐る尋ねる。

「ん？」
びっくりしたような顔で振り返った。

地球から持ってきた、隼人の好きな銘柄のコーヒーを入れる。
コーヒーの入ってるカップを二つ持ち、ひとつは隼人に渡して、私も隣に座る。
「サンキュ。」
笑顔でカップを受け取るが、隼人の表情は冴えない。
「いい内容ではなかったの？」
尋ねる私の瞳を、見つめ、頷く。。

「これから櫻井さんのメール見せてあげる。でも、実際余分な心配かけそうで、見せたくない気持ちもあるんだ。どうする？全部知るか、事情を知らずにこの先いくか。」
すごい選択肢を言われている気がするんだけど。

でも、いくら悪い状態でも、『しらない』より『知っていた』ほうが、私はいい。自分の人生だから、自分の判断で責任を持ちたい…。
この旅にでてきたのもそういう意味だから。

「見せてもらえる？」
隼人をまっすぐ正面に捉え、返事をする。
「いいよ。俺もここにいるから。」
といって、私を引き寄せ、軽くキスをする。
隼人から、携帯を預かり、櫻井さんからのメールを読む……。
読み終えて、呆然とする私の肩を抱きながら、隼人が声をかけてきた。
「どう？」
「……。」
あまりのショックに言葉も出ず、返事ができない。」
「大丈夫か？」
私の頬に隼人の指が…。
涙が流れていたらしい…。
「……たぶん。」
涙が止まる気配はなく、隼人が強く抱きしめてくれる。
「ケイ？このままよく聞いていて。」
前にも同じようなシチュエーションがあったような…。
「俺はさっき、櫻井さんからのメールを読んだ時、一瞬目の前が真っ暗になった。感情がストップしたよ。ケイの命を何だと思っているんだって、怒りもあった。一歩間違えたら、ケイが俺の前からい

なくなる可能性があるんだから。」
「でも、よく考えたら、今回の条件がなく、二人だけの旅なら、もと環境も悪く、今以上に神経を尖らせていないといけないと思うんだ。」
「そう考えたら、鍵云々言う前に、ケイをセキュリティがちゃんとした所に置いて、旅ができる方がいいと思ったんだ。」

「あとは。」
抱きしめる力を緩め、私の顎に指を伝わせる。

「俺がケイを守ればいいこと。大丈夫、俺がついてる。信用してついてこい。」
頷いて、止まっていた涙が、隼人の言葉に溢れ出す。
隼人の大きな両手が、私の頬を優しく包む。
同時に、お互い求めるように、唇を重ねる……。
不安な気持ちも隼人の熱で、震える心も少しづつおさまってきた。

私は、一人じゃない。隼人がいてくれる。
そう、思うだけでも、力が湧いてくるような気がする。
明日の朝、『ａｌｂａ』に到着する。
もう今になっては、逃げ出すことも出来ない。
地球から出てくるとき、なぜなら何があったとしても、責任は自分自身だと決めてきた。
来るもの拒まず…。来るなら来てもらおうじゃないの。

「隼人、私頑張るから。ｓｐｅｒａｎｚａに必ず行こうね。」

「ああ、必ずだ。俺はお姫様を守る王子だから、側にいるから安心しろ。」
微笑んで、私の頭を撫でる。

外の景色は闇だけれど、漆黒の闇の中には、数え切れないほどの輝きがある。

そして、私の心にも決意の輝きが…。

それぞれの思いを乗せて、数時間後には、『Ａｌｂａ』に列車は到着する。

18　『ａｌｂａ』へ

「あと１時間で次の停車駅『ａｌｂａ（アルバ）』に到着いたします。次の出発は、地球時間で３日後。時間は２０時です。時間に遅れないように、１５分前のご乗車お願いいたします。」
車掌のジョニーさんの、車内放送が入る。
車内がにぎやかになってきた。

「隼人、到着まであと１時間だって。」
私は荷物をまとめ、身支度を整えながら、隼人に声をかける。

「そっか。」
ベッドに横になって、読んでいた本を閉じて起きてきた。

「何読んでたの？」
傍らに立つ隼人に尋ねる。

「Ｇｕｉｄｅｂｏｏｋみたいなものかな。ａｌｂａに降りて、どうしようかと思って見てたんだ。」

「泊まる所はもう予約してあるし。」
「え？そうなの？」
「さっき、櫻井さんと打ち合わせしてる時、電話で話して決めたんだ。」

そういえば、難しい顔して話してたわね。

鍵を持つ、本当の理由がわかって以来、隼人と櫻井さんが、頻繁に

連絡を取り合っているみたい。
私は抜きで…。まぁ、いいんだけどね。
でも、さすが隼人、手配が早いな…。仕事している時もそうだった。先へ先へ手を打って、仕事を片付けるのが早かったし、回りの信頼も厚かった。私は、どうあがいても、隼人には追いつけないし、かなわなかった。

「同期だったのにね…。」

「ん？どうした？」
ふと呟いた言葉に反応されて驚く。

「いつも隼人にはかなわないって思ってただけ。準備できた？」
笑顔で返す。

「…何かまた余分なこと考えてただろ？」
疑い深そうな顔で覗きこんで私の顔を見る。

なんでわかるんだろう…。

「顔見ればわかるよ。櫻井さんとの話気になる？」
エスパーのような返事をしながら、私の頭を撫でる。

「別に…。私が聞かなくてもいいことでしょ？」
言わなくてもいいことまで、言ってしまいそうなので、隼人から離れようとすると、引き寄せられ隼人の胸におさまる。

「ケイに都合の悪いことは何一つ話はしてない。それより、これからどうしていこうという話をしてる。ＳＰがいたとしても、ずっと

張り付いてると怪しまれるから、俺が何処まで動いていいか…とかね。姫を守らないといけないからさ。」
見上げた私を優しい瞳で見つめる。
黙って隼人に抱き着く。
「ごめんなさい。あなたの気持ちも知らないで。小さな嫉妬みたいなものだわ。」

「いいんだよ。説明しない俺も悪かった。」
そう言いながら、私の唇に優しいキスをする。

「せっかくの婚前旅行なのに、ケンカしたくないからな。」

「婚前旅行決定なのね。」
クスクス笑いながら、背伸びをして、隼人の唇にキスを返す。
抱きしめられ、それ以上進みそうになりはじめた時、車内放送がはいる。

「あと10分で停車駅『alba』に到着致します。』

「残念…。続きはまたあとで。」
といいながら額にキスをし、隼人も降りる準備をし始めた。

……

「隼人くんも、狙われやすい素性の持ち主なんだね。」
櫻井さんが、電話で話をしていると、ふいに尋ねてきた。

「調べたんですか？俺のこと…。」
「一応ね。託す相手のバックを知っておきたいと思ってさ。悪用するつもりはないから安心して。」
悪びれた様子はなく、さらっと答える。
「ケイさんはもちろん知らないよね？」
「余分な心配かけたくないから、ケイには黙っていて下さいね。」
櫻井さんに釘をさす。
「わかってる。」
「ａｌｂａに着いてから、どうするんだい？滞在時間があるでしょ？」
「出発は地球時間で、３日後らしいです。」
「３日か。」
「隼人くん…。」
「言いたいことはわかります。ケイは必ず俺が守る。」
「うん。そうだね。ＳＰおいてあるけど、油断は出来ない。下手に動くと怪しまれるから、彼の隼人くんが一番ボディーガードには相応しい。」
「あとで、ＳＰ見分ける画像送るから見ておいて。」
「了解しました。」

「ホテルの予約は、お願いしていいですか？」
「引き受けた。予約取れたらメールする。」
「敵の多い旅かもしれないが、不安になりすぎず、楽しんで欲しいと思っている。ケイさんも隼人くんも。」
「せっかくの婚前旅行なんで、楽しんでますよ。俺は。」
「そうか。それならよかった。」
電話口で大笑いしながら櫻井は、
「じゃ、また連絡する。」
「はい。よろしくお願いします。」

電話を切ってから、一人考え込む隼人。
「まさか…な…。」
櫻井さんとの会話が、頭の中に流れる…。
「俺も、気をつけないと…だな。」
と呟きながら、いつのまにか、睡魔に襲われ眠っていた…。

19　初めての星で

「お疲れ様でした。」
「良いたびを…。」

ｍｉｄｎｉｇｈｔｂｌｕｅの列車が、定刻通り、最初の停車駅『ａｌｂａ』に、到着した。

出発の時と同じように、車掌さんとスタッフが並んで、出口で笑顔で見送ってくれる。車内でも同じ様に、ホテル並の接客の徹底ぶり。感心するばかり…。

「すごいなぁ…。」
「どうした？」
「車掌さんたちの接客の仕方、さりげないのが凄いなと思って。」
「たしかに。そこらの一流ホテルにも負けてないよな。それが、この列車の売りみたいだけどね。」

そう言いながらも、辺りを注意深く見回す隼人。彼を纏う周りの空気がいつもと違うのを感じる。

隼人と私も、挨拶をして列車を後にする。

「ＳＰさん、見分けられた？」
歩きながら、隼人に尋ねる。

隼人も前を向いたまま、顔を動かすことなく、

「列車の中のＳＰは、ケイわかった？」
「うん。教えて貰った人、降りる時、確認した。」
「ＯＫ。あの二人は、櫻井さんと直接連絡とってるし、今回駅に残るから。」
「そうなの？」
「俺達が列車を離れた後何かあっても困るから…って、櫻井さん言ってた。」
「まぁ、俺達だけのためでなく、他の用件兼ねているみたいだから。」
「あと、外のＳＰさんは？」
「３人確認した。周りにちゃんといてくれてる。見分け方は、先の二人と一緒だよ。」
「５人いるはずだからあと２人は、遠巻きにいるだろう。」
「何だか役人とかのお偉いさんたちを守ってるみたいね。」

ちらっと私の方をみて、
「それ以上かもしれないけどな。」
「大事なのは、『人』だけ、じゃないから。」

「…たしかにね。」
命と鍵……。比べるにはどうかと思うけど。

ふと、右手が温かくなる。隼人の大きな左手が重なる。見上げると、いつもの優しい笑顔で、

「命あっての鍵だ。ケイの命は俺が守る。安心しとけ。」
私は、にっこり微笑んで頷く。

「ありがと。大丈夫よ。私も負けてないから。せっかくの旅行だもん。楽しまないとね。」

お互いの気持ちを確認して、手を絡めるように、しっかり繋ぐ。
「ホテルにチェックインする前に、せっかくだから、街を散策していくか。」
「そうね。」
歩きながら、あることに気が付いた。
「ねぇ？そういえば、酸素がある…。普通に呼吸してるし。」
「ああ、基本的に列車が止まる星は、人工ドームがあって陽射しも酸素も管理されてるらしい。植物も特殊な光を浴びて、光合成して、酸素もだしてるし。」
「まぁ、植物は地球のとは違うんだろうけどね。」
環境の凄さに呆気にとられる。この先の星はどうなっているんだろう…。
地球だけでなく、他の星から来る人もあるだろうに。
「夕食は外で食べて行くか？ホテルはとりあえず泊まるだけにしてあるから。」
「それはそれでよかったんじゃない？ａｌｂａの街で食べたほうが楽しみもあるし。」
話しをしながら歩いていると、雰囲気のいいお店があった。
「ここにしようか？」
私も頷くと、二人でお店に入った。
お店の中は、お客様も多く、カウンター席になった。
「ケイと話しをした居酒屋と同じパターンだな。」

ここまできて、やっと隼人の表情が少し和らいだ。

「そうね。カウンター席が今回の旅の話の本格的な、スタートだったわね。」

「あの日がなかったら、隼人はここにいなかったもの。不動産屋一緒に行くって聞いた時びっくりしたし。」

「そうだったな。あの時すでにケイがいなくなるショックで、歯止めがきかない状態だった。」

「そうだったの？」

「うん。それまで会社とかでは感情を押さえてきたけど、昼休み話、しただろ？あれで心の何かが外れた。」

「だからあれ以降、隼人私に触れてきたのね。嫌じゃなかったけど…。」

「そうか？」

「私も、隼人ことずっと気になっていたから、戸惑いはあったけれど、嬉しかったの。」

隣から伸びてきた手が、私の頭を撫でる。

「今こうやっていられるのが嬉しい。」

「私も。」

食事を終えて、

「私、お手洗い行ってくる。」

「一人で大丈夫か？何かあったら大声だせよ。すぐ行くから。」

隼人に手を振り席を立つ。

人が多いので、避けながら歩いていると、急に手を掴まれた。
ビックリして振り返ると、
「一緒に来てもらえますか？」
と、サングラスをかけた二人組の男に捕まった。

「何するのよ。離して。」
暴れて手を振り離そうとした時に、

「ＬＡＤＹに乱暴はいけないでしょ？」
私の後ろから現れた男性に、二人ともいとも簡単に倒され逃げて行った。

「助けて頂いてありがとうございました。」
頭を下げお礼を言うと、

「大丈夫？どこも痛くない？」
という男性と目があった。
彼の目の色、深い碧色に吸い込まれそう。
お互い、言葉なく見つめ合う…。

「ケイ？大丈夫か？」
後ろから隼人の声が聞こえ、振り返る。

「隼人。大丈夫よ。連れていかれそうになったんだけど、この方が助けてくれたの。」

隼人に、私の前にいる彼を紹介する。
一瞬、隼人が厳しい顔をしたけれど。

「助けて頂いてありがとうございました。」
隼人も彼に頭を下げる。

「いやいや。僕もちょうど通りかかった時に、彼女が大変そうだったから手を貸しただけ。」

「ケイ、もう店出るぞ。」
「うん。」
もう一度彼にお礼を言い、支払いを済ませ店を出た。

「彼らも彼も何者なんだろう。」
わたし右手はしっかり隼人の左手に繋がれ、ホテルまでの道を急いだ。

二人が店をでた後、何もなかったように店の中は賑やか。
ただ、一人の男性だけは、グラスを傾け静かに過ごしている…。
先程の出来事を思いながら、
「彼女…。また逢うことになるかな。」

ａｌｂａの長い夜は、まだ始まったばかり・・。

20　心の葛藤

「２０５号室になります。」
「ありがとう。」

ホテルのチェックインを済ませ、二人で部屋に向かう。必要なこと以外、隼人は話をしない。
２０５号室は角部屋だった。きっと櫻井さんの配慮、出来る限り隣には、セキュリティ上、人がいないほうがいいからだろう。
部屋に入る際、とりあえず回りを見て人がいないのを確認し、部屋に入った。
なんだか、とても疲れた。

「隼人？」

「ん？なに？」

「なに？じゃなくて、私の手、離さないと。もう部屋に着いたから大丈夫よ。」
手が離れたと思ったら、今度は、無言で私を抱きしめる…。

「どうしたの？」

「ケイ、ごめんな。」
隼人の言葉に驚く。

「さっき、店で怖かっただろ？一人にさせて、後でひどく後悔した。

」
「守ってやれなくてごめん。」
言葉と同時に、抱きしめる力が強くなる。
「隼人のせいじゃないわ。今回のは私の完全なミス。これだけ危ないって言われてるのに、少しだけ大丈夫…って思った、私の油断からよ。」
「でも隼人がいてくれてよかった。パニックになるところだったわ。ありがとう。」
抱きしめる少し力がゆるんで、見上げると、隼人の体温が私の唇に感じる…。
お互いが相手の存在を確認するように、長い時間、角度を変えながら、重ねていた…。
「チュッ。」
濡れた音で離れる。
私は酸欠でぼんやりしていると、隼人は、
「このまま…と思ったけど、先に、櫻井さんへ報告しとかなきゃいけないな。」
と呟きながら、携帯を取り出す。
「ケイ、おいで。」
ベッドサイドに座る隼人の隣に私も座る。
いつの間にか隼人の左腕は、私の腰を引き寄せていた。
「少しの間だから待ってて。」

私の額にキスをすると、携帯で櫻井さんに電話をかけはじめた。

「こんばんは。隼人です。」

「無事ａｌｂａに着いた？」

「ええ、着くには着いたのですが…。」

「その言い方だと何かあったね。どうした？」

「実は食事した店で、ケイがサングラスかけた二人組に連れていかれそうになったんです。」

「え……？ほんと？」

一瞬の沈黙。話が止まる…。

「二人組の顔は見た？」

「俺はみてないですね。ケイも一瞬だったみたいだからどうか。」

「どんな状況から？ケイさんは？大丈夫だったのかい？」

「それが、トイレに行くというケイを一人で行かせてしまって、そのあとすぐ店内で騒動になって。」

「俺が駆け付けたら、知らない男性が二人組を倒して、ケイを助けてくれていたんです。」
「ほぉ…、助けてくれた男性がいるんだ。彼の特徴は？」
「背丈は、俺と同じくらいで、瞳の色が深い碧色…でした。」
「通り掛かりとは言ってましたが。」
「そうか…。ＳＰが追ってれば、いずれにせよ、身元はわかってくるな。」
「隼人くん、ケイさんと話せるかな？」
「はい。かわりますか？」
「そうだね。直接話をしたい。」
隼人が、私に携帯を渡す。
「櫻井さん、話がしたいって。」
「はい、かわりました。鳴沢です。」
「ケイさん、大丈夫だったかい？」
「大丈夫です。すいません、心配かけて。私が油断していたんです。」
「いや、ケイさんが無事でよかった。ＳＰがきっと追ってるから、絡んできた奴らの身元は、いずれわかる。」

「え？そうなんですか？」

「うん。探す手間が省けた。これで、相手が見えてくるから、ちょうどよかった。」

「助けてくれた彼も気になるけどね。」

「ケイさんも、今回の件があるから、これからできる限り隼人くんの側にいたほうがいいよ。」

「はい、そうします。」

「僕が言うのもなんだけど、心配も多いかもしれないが、二人には旅を楽しんで欲しいと思ってる。」

「僕も、できるだけのサポートするからね。何かあったらすぐ連絡して欲しい。」

「わかりました。隼人もいてくれるし、気をつけます。」

そう言うと、隼人に電話を返す。

「じゃぁ、また連絡します。」

「こっちも身元がわかったら連絡するよ。」

「お願いします。」

電話を切って、大きなため息をつく隼人。

「どうしたの？」

「ん？気持ちがいっぱいいっぱいだなぁと思って。全然余裕ないし。」

凹んでいる隼人を、今度は私が抱きしめる。

「あなたは私の王子様だから。頼りにしてるの。」

「でも、あなただけ、頑張ろうとしなくていいの。」

「たくさんの、わけのわからない人達に狙われていたって、私たちは何も変わらないでしょ？」

「あなたも私も、何にも疚しいことしてないもの。」

隼人と目があう。

「愛してるわ…隼人。」

「ケイ・・。俺も愛してるよ。」

唇を重ねながら、隼人とケイはゆっくりとベットに倒れ込む・・。

いつも以上に、激しく求め合う・・。

不安な心を鎮めるように・・・。

激しさの中、ふと、昼間の助けてくれた彼の瞳の輝きを思い出す。

彼とは、もしかしたら、また逢うのかもしれない・・・。

確信のような思いが浮かぶ。

地球から離れた星での出会い。

この先どうなるのか、不安と期待で、夜は更けていく・・・・。

21　カルチャーショック

ａｌｂａ到着、２日目の朝。

やわらかな身体をつつむ温かさの中、目が覚める。

相変わらず、私を抱えて寝る隼人。まだぐっすり眠っている。

「結局寝かせてくれたの、朝方だもんね…。」

呟きながら、しっかりと私に絡んでいる隼人の腕を、そうっと外してベッドから起き上がり、外も明るいので、カーテンを開ける。

２階の部屋から見える景色。

高層ビル街は流石にないけれど、商店などびっしり建てられている。

眼下には、たくさんの人々が忙しそうに行き来していて、通勤客らしき姿も見える。

地球にいるときと変わらない朝の姿。

ふと、目を遠くにむけると、漆黒の宇宙が見える。

どちらもこの星の顔、なんだろうけど、違和感があるのは私だけだろうか。

ａｌｂａは、地球時間に居住は合わせてあるので、生活するには不自由はない。

陽射しもどき…もあって、植物も成長し、光合成して酸素もだすし。

そうか…、完全に作られた世界だから違和感があるんだ。

ここは、何もなかった所に、街がつくられ人が集まり、偽の陽射し、どこからか持ってきた植物、がある。

地球に住んでいた時は、当たり前に太陽の陽射しを浴び、自然の木々に囲まれ、水もあった。私の大好きな海も。

その当たり前が、全くない世界が今ここにある。

「うううぅ…ん…。」

わかりきっていた現実を目の前にして、座り込んで考える…。

「どうした？具合が悪いのか？」

私の心の葛藤の事情を知らない優しい声が、頭の上から聞こえる。

「おはよう、隼人。なんでもないわ。」

立ち上がって上半身裸の、隼人の腰に腕を絡める。

くすっと笑う隼人の声が頭上で聞こえたと思ったら、私の顎を指でなぞり、唇を軽く重ねる。

「隣にいないからびっくりして起きたんだけど。」

「あの凹みかたは、なんでもない、には見えないぞ。」

「悩む前に俺に話せ。大丈夫だから。」

頭を撫でながら、私の大好きな笑顔を見せてくれる。

「お日様が恋しくなったのかもしれない。」
これは本当のこと。

「もう、ホームシックか？まだ旅が始まったばかりなのに。」
隼人はちょっと困り顔…。

「ホームシックというより、カルチャーショックに近いかもしれないな。」

「？？」
私の言葉に、更に納得できない、という顔をしてる隼人。

「１００％造られたａｌｂａの街を見て、当たり前に水や緑の木々や太陽の陽射しがあった地球が、懐かしいなと思ったの。」
「地球に住んでいて、当たり前にあったものがここにはなくて。」
「地球基準で考えたら、普通じゃないかもしれないけれど、この星に住む人たちには、普段の普通の環境で、私たちがよそ者だから慣れるしかないのよね。」

外を眺めている私を、後ろから抱きしめる隼人も、

「それは、地球にいてもあてはまると思うよ。海外旅行なんかそうだろ？」
「自分がいるところを中心に考えると、他がすべて違って見える。」
「それを違和感として思うより、尋ねた場所もそれぞれ違って、楽しみ方も違うから、その場に染まったほうが楽しめるだろ？」
「それは、地球でも宇宙でも同じことだと思うよ、俺は。」

「そうよね。」

「私が行こうとしてるｓｐｅｒａｎｚａの星は、さらに太陽は見えない所で、もっと環境が違うだろうし。」
「これでショック受けていたんじゃ先が思いやられるわ…私。」
後ろから抱きしめていたのが、いつの間にか、目の前に隼人の胸が。
「誰が一緒にいるんだよ。俺が一緒にいるだろ。泊まる先々で楽しんでいけばいいじゃないか。」
「せっかくの婚前旅行なんだからさ。」
と言いながら、額にキスをする。
私も、腕を隼人の背中に回す。
「隼人がいてくれてよかった。いなかったら、この先はきっと進めなかったわ。ありがとう。」
「どういたしまして。」
見上げると、隼人もニッコリ微笑んでいる。
「そういえば、昨日襲った人、身元がわかったのかなぁ？」
ふと、頭が現実に戻る。
「たぶん、今日あたり櫻井さんから連絡が入るだろ。」
「あの、助けてくれた男性も気になるんだよね…。」ボソッと呟くと、
「気にしなくていい。」
と、不機嫌な声。

「ん？妬いてる？」
背中にいた手で今度は隼人の顔を挟む。
「妬いてるというより。」
「他の男のことなんて考えて欲しくない。」
私の両手に隼人の手が重なり、そのまま、烈しく唇を重ねてくる…。
「ん…っ。はやとぉ…。」
隼人の熱から伝わってくる気持ち。
「今日は朝から出掛けようかと思っていたけど、昼からにするか…。」
と隼人が言ったと同時に、私の身体が浮く。
「このままじゃおさまらないから…。」
妖艶な微笑みで私を見つめる。
「隼人、私の身体が持たないわ…。」
すでに動き出してる隼人には聞こえてないらしい。
テーブルの上の携帯電話が、メールが届いたランプで知らせている。
櫻井さん、ごめんなさい。あとで連絡します、と心の中で謝る。
外から、陽射しがカーテンの隙間から入ってくる。
ａｌｂａの街の一日が始まる…。

22　相手の正体

「櫻井さんから、なんて書いてあった？」

隼人が櫻井さんからのメールを読んでいる。
なんとも、難しい表情で。
大丈夫なのかな…？

『隼人くんへ。

ａｌｂａに着いてから一晩過ぎたけれど、街には慣れた？その後は、かわりはないかな。

二人とも気になっていると思うから、早速報告するね。

昨夜、ケイさんを連れて行こうとした二人組の身元、まだ完全にわかったわけじゃないが、僕たちが追っているやつらと、また別口のようだ。
狙っているものは、多分鍵だと思うんだか…。今調べている最中だから、またわかったら連絡するよ。

あと、ケイさんを助けた男性も、何やら裏があるね。
ただ彼の場合は、敵ではないだろう…と思う。
ただ、１００％安全とは言えないから、次にもし会ったとしても、警戒しておいた方がいい。

次の星に出発するのは、明日だったね。
今日もし街に出かけるのなら、隼人くん、ケイさんから離れないよ

うに。

あと、これから何があるかわからないから、寝るとき以外は、護身用に、何か持っていた方がいいと思う。使うことがないのが一番だけれど…。

また情報が入り次第、連絡します。

櫻井尚人』

「正体わからず…か。」

読み終えて、隼人が呟く。

「ケイ、櫻井さんから。」

隼人から携帯を渡されて、櫻井さんからのメールを読む。

「…これはどういうこと??」

「別口って…。そんなに大勢いるのかしら。」

「もし、鍵狙いなら、私が持っていることが外部の人がわかってる…ってことよね。」

もう、怖いとか云々思う気持ちは無くなってきたようで、とりあえず、これからどうしようかと思う。

「助けてくれた彼は、敵じゃないって…、わけわからない。」

「どこまで櫻井さんたち、わかってるのかしら。」

「隼人、メールより電話の方が、櫻井さんに細かいことけ聞けるんじゃない?」

イラついた声で隼人に話かける。
「まあまあ、ケイ落ちつけ。」
私から携帯を取り上げ、頭を撫でる。
「ここで櫻井さんに電話しても、同じようなことしか返事は返ってこないだろ。」
「櫻井さんたちも追っているって言ってるし、今一番大事なのは、出来る限りの情報収集と、あとは、ケイが、絶対奴らに捕まらないことだよ。」
そう言いながら、私を抱きしめてくれる。
イライラな気持ちが落ち着いてくる。
やっぱり隼人の胸が一番安心する。
「絶対ｓｐｅｒａｎｚａに行って、そのあとは、地球に戻るんだろ？こんな所で、がたがた言ってる場合じゃない。」
「【攻撃は最大の防御】とまでいくと大袈裟だけど、俺達から手をだせないのなら、今は情報収集をできるだけしたほうが、後々動きやすくなるはずだ。」
「とりあえず、櫻井さんの連絡を待とう。ＳＰさんたちもいるし。」
「それより、まずは腹ごしらえに食事にいくか。お腹すいただろ？」
時間をみると、正午を回ってる。昨夜、お店で食事して以降、朝も食べてないし。
結局、隼人の予定通りだわね…。

「うん。」

着替えた後、櫻井さんのアドバイスを受けて、護身用にそれぞれ身につけ、今夜はまた別の所に泊まる予定らしく、荷物を持って部屋を後にした。

23　もう一人の・・。

お昼時の街はとても賑やかい。どこの街でも、これは変わらないらしい。

隼人と私は、正直腹ぺこ状態で、今なら何でも美味しく食べられる。

「何があるのかしら。」

二人でお店を見ながら歩く。

少し歩くと、かわいらしいお店が目に留まった。

カフェのようで、お店の外では、人々が思い思いの時間を、食事やおしゃべりをしながらすごしている。

「ここにしようか。」

私も頷くと、周りを少し見渡して、お店に入った。

「ＳＰさん、近くにいる？」

顔を前に向いたまま、隼人に尋ねる。

「二人、近くにいるから大丈夫。」

と言いながらも、私の繋いだ右手はしっかり握っていて、離さない。

「離れるなよ。」

「わかってる。」

席に着いてホッとしたら、とたんにお腹がすいたのを思い出した。

「緊張してると、お腹すいていること、忘れるのに。」
「忘れるだけで、お腹はすいてるだろ。根本的な所が解決してないんじゃないか？」
「たしかにそうよね…。」
わけのわからないやりとりをしていると、食事も運ばれ、話も中断、食べることに集中する。
食後に、隼人はコーヒーを、私はミルクティーを、飲みはじめた頃、
「ここまできて、ミルクティー飲めると思わなかったわ。嬉しい。」
「地球出るとき、飲みおさめ、してきたものな。」
「そうそう。あの時すっごく気分が悪くて、ケーキとミルクティーと……。」

「ケイ、どうした？」
急に、黙った私に声をかける隼人。
「隼人・・、今、外通った人、駅で私にぶつかった男の人よ。」
「ほんとかっ。」
「ほら…。」
部屋の窓の陰から、外を覗くと、歩いている3人組の中の一人、あの時ぶつかって逃げ出したやつ。

「なんで3人…。」
きょろきょろと、何気なくしてるが、誰かを探している雰囲気がわかる。
「ケイ、お前を探しているのかもしれない。」
「ほんとっ？」
「今回関連してるなら…だ。」
隼人が、携帯電話で電話をかけはじめた。
すぐ、相手がでる。
「櫻井さん？隼人です。すいません急に連絡して。今、いいですか？」
「もちろんいいけど、どうした？」
「今、昼過ぎでお店で昼ご飯食べてる所ですが、前に駅でケイにぶつかった男がいるっていいましたが、その男が、ａｌｂａにいます。それも、二人プラスで3人。歩いている姿は誰かを探している様子です。」
「お店の位置はＧＰＳでわかる。男の格好がどんなか、教えてくれる？」
隼人と櫻井さんとで、電話で打ち合わせをしている。
私は、外の彼らから目を離せない。見つからないように、視線を送る。

「よろしくお願いします。」
隼人が、櫻井さんとの話を終えた。
「櫻井さん、なんだって？」
厳しい表情をしている隼人に尋ねる。
「すぐ、ａｌｂａにいるＳＰさんに連絡して、つけさせるって。」
「とりあえず、ＳＰさんが、彼らの存在を確認できるまで、動かないほうが良いって。」
「確認が取れたら連絡がはいるから。」
ため息混じりで隼人が言う。
「こんなはずじゃなかったんだけどなぁ・・・ケイ。」
いつの間にか、私の横に座っている。
「大丈夫か？」
私の頭を撫でながら、心配そうな顔で見つめる・・・。
「大丈夫よ。それに、私には隼人がいるじゃない。」
にっこり微笑んで返すと、隼人の指先が私の顎に触ったと同時に、優しく唇が重なった・・。
彼の体温は、いつも私の心を溶かしてしまうほど熱い。
「ケイに触れていいのは俺だけ・・愛してるよ。」
「私も・・愛してる」

この先、どうなっていくのかわからないけれど、心から信じられる
彼が傍にいる幸せを
感じながら、自分が選んだ道を進む・・・。

２４　狙われているのは・・。

穏やかな昼下がり。

だが、一方で緊迫している男女一組が、お店のすみの方で語り合っている。

突然、隼人の携帯電話が鳴る。

櫻井さんからだ。

「隼人君？櫻井です。」

「隼人です。どうですか？わかりましたか？」

「わかった。確認できたよ。」

「思ったとおりだった。」

「思ったとおり・・？ですか。」

「そう、男が３人居るって隼人君言っただろ？」

「ケイさん襲ったやつも含めてＳＰに確認させたんだよ。」

「はい。」

「そうしたら・・・・3人とも・・仲間だったわ。」
「はっ？仲間？？」
「そう、昨夜お店でケイさん襲った2人組と、ケイさんにぶつかった1人とは仲間。」
「SPが確認したから間違いない。」
「・・・・・・・・・・・」
隼人は言葉をなくしていた。
「隼人君？大丈夫かい？」
「あっ、はい。」
「メールでも書いたとおり、今もまだ、彼らの動いている目的がわからない。」
「多分、ケイさんを狙っているから、鍵だと思うが。」
「違う方向から考えると、実は隼人君狙い・・というのも、考えられるんだよな。今そっちの方でも、同時に探っているところだけど。」
「まさか・・・・。」
「ありえる話。でも今のところ、なんとも言えないけどね。」
「ケイさんは、もちろん僕たちも全力で守らないといけないけれど、隼人君もくれぐれも気を付けて。」

「とりあえず、ＳＰが近くにいるはずだから、彼らの誘導で、ホテルに向かうといい。もうチェックインできるように手配してあるから。」

「ケイさんをよろしくね。」

「わかりました。」

櫻井さんとの電話をきって、厳しい顔をしている隼人。

「事情がわかったの？」

言葉なく、私を強く抱きしめる。

「隼人？」

「ケイ、３人とも仲間だったらしい。」

「はっ？仲間？」

さっきの隼人と同じ反応をする。

「ＳＰが確認したって。昨夜の２人と、ケイにぶつかった奴が仲間。」

「信じられない・・・・・。」

ふと、思い出す。

「ぶつかった奴、私たちと同じ列車に乗ってなかった？」

「ケイが見間違えでなければそうかもしれない。」

「・・・・・・・」
言葉をなくすしかない私。
「まだ、彼らが何を目的に、ケイを狙ったのかつかめてないし。」
「とりあえず、今夜泊まるホテルに移動する。」
「うん。」
「ＳＰが近くにいるから、合図で動く。まだあいつら近くにいるはずだから。」
数十分後、ＳＰに守られながら、私たちは、近くのホテルにチェックインした。

「参ったなぁ・・・・・。」
ベッドに倒れ込んだ隼人。
「初めて降りた星からこんなんじゃ、この先もっと行動範囲が窮屈になるな。」
倒れ込んだ隼人の隣に座る。
「きっと、櫻井さんたちも、想定外だったんだろうね。自分たちが追っている以外の人たちが、溢れるように、次から次へとでてきているんだから。びっくりでしょう。」
「でも、ここで弱気になるわけいかないし、負ける訳にいかない。前に進まないと・・。」

「そうだよな。ここで捕まるわけにいかないし、終着駅まで行くんだからな。」

「ちょっと、スリリングな婚前旅行ではあるな。」
といいながら、私を抱き寄せる。

「ケイ、俺、今回一緒に来て本当によかったよ。判断は間違ってなかった。」
「地球で、待っていてこの状態聞いていたら、もう仕事どころじゃなくて、宇宙船でもなんでも使って、追ってきたところだったよ。」

「そう？」

「当たり前だろ？自分の大切な人が危険な目にあってるんだから。」
「王子様が姫を助けに来るのが当然。」

抱き寄せている腕の力がさらに強くなる。

「これからまだまだ大変な旅になると思う。」
「でも、俺はケイを守るし離さない・・。」
「ちゃんとついておいで・・ケイ。」

頷く私を、優しい微笑みで見つめ、ぎゅっと抱きしめる。
私も、隼人の思いを受けて、しっかりと抱き返す・・・。

「ちゃんと着いていくから。離さないで・・・。」

隼人のジャケットのポケットの中で携帯電話がなる・・・。

「メール。櫻井さんからだ。」

不安になってばかりでも仕方がない。
明日には、次の星に向かうためにａｌｂａを離れる。

胸に下げた鍵を握りしめる。
終着駅、ｓｐｅｒａｎｚａ［スペランツァ］　に必ずたどり着いてみせる。
愛する王子様と共に・・・。

25　それぞれの思惑

結局、ホテルにチェックインしたあと、どこにも出られず朝になり、次の停車星『ｄｅｓｅｒｔｏ（デセルト）』に向かうようになってしまった。

「櫻井さんには、絶対外に出るなってメール貰ったからなぁ。下手に外に出てまた騒動になると困るし。」

「櫻井さんからの内容ってそれだけ？」

「そうだよ。まだ外にいるかもしれないからってさ。」

「うううぅ・・・ん。厄介だなぁ・・・。」

窓から見える街の様子を見ながらぼやく。

しかし実は、それ以外にもあったが、ケイに心配をかけたくなかったので、隼人はあえて言わなかった。

櫻井さんからのメールには、『ｓｐｅｒａｎｚａ［スペランツァ］』の星以外にも、王政でやっている星があって、最近、極秘に水面下で探し人をしている国がある・・という噂を聞いたと。

対象は女性らしいが、どんな条件なのか解らない。女性・・と限られているので、一応、ケイも気を付けて欲しいと、櫻井さんからの話だった。

そうじゃなくても、不安定な環境なのに、これ以上ケイには余分な

心配かけさせたくない。

列車の出発は、２０時と車掌さん言っていたけれど、ａｌｂａの現地時間だと、もう数時間早くなる。
地球だと、時差計算が出来たけれど、宇宙にでるとちょっと勝手が違うらしい。
櫻井さんに時間を確認できたので、シャワーを浴びて、朝とお昼をかねて食事をして、ホテルをチェックアウトして駅に向かう。

「隼人、駅は行っても大丈夫なのかな？」
いつもの通り、隼人の大きな左手に、しっかり右手を繋がれて歩きながら尋ねる。

「今のところは・・だな。」

「あの３人組がａｌｂａで再度動くか、他に移動してから動くか、読めないから。」

「列車には、早めに着いたほうが、ＳＰも多くなるし、相手の動きは見えやすい。」

「ケイ、ＳＰが今も近くにいるのがわかるだろ？」

「うん。」

「居るからって油断はできないけどな。」
私を繋いでいる手が、さらに強く握られる。

「とりあえず、ａｌｂａから離れよう。」
周りを気にしながら、二人で足早に駅に向かう。

「誰が何を狙っているんだか…、さっぱりわからん。」
櫻井は、隼人との電話の後、事務所のソファーに座り、資料の山の前でタバコをふかしながら唸る。
「ａｌｂａから入ってくる情報だけじゃ足りないしさっぱりわからない。」
「相手の動きが分からないぶん、これから二人とも大変だろうな…。」
「隼人君の関係も陰で動き始めているし…。実はこっちが予想外だったんだよな・・。」

パソコンの画面に出ている、移動する赤い点滅を眺める。
ａｌｂａに居る、ケイの胸元にある鍵に埋めてあるＧＰＳが二人の位置を教える。
「とりあえず、今は様子見だな。」
といいながら、携帯電話を手にとる。
「あっちにも探りを入れてみるか…。」

いろいろなしがらみが、隼人とケイを騒動に巻き込んで行く…。

櫻井も、自分も二人を追うべきかどうか本気で悩み始めた。

26　次の星へ

足早にａｌｂａの街をかけ抜け、無事に駅まで戻ってこれた。
周りを見渡して、ついてきてくれたＳＰ達に、手を振るわけにはいかないので、お礼の会釈をして改札口を通り抜ける。
後で、櫻井さんにお礼を言っておいてもらおう・・。

ホームで、列車の搭乗入り口に立つ車掌のジョニーさんを見つけ、ほっとする。

「お帰りなさいませ。ご無事でなによりです。」
笑顔で迎えてくれる、ジョニーさんのこの言葉が、旅が１００％安全ではないことを表している。

「何ともなければ１ヶ月の旅・・。」
と言っていた、櫻井さんの言葉をふと思い出す。

「ありがとうございます。ただいま。戻りました。」
挨拶をして、客室に入り、二人でソファへ座り込む。

「なぜ、ここまで私たちが追われ大変な思いをしないといけないのかしら。何も悪いことしていないのに。」
大きなため息を付く・・。

「ケイ、お疲れさま。」
隼人が私を引き寄せ、優しく唇を重ねる・・。

「隼人こそ、お疲れさま。ありがとう、守ってくれて。疲れたでしょ？」

「俺は大丈夫。それにしても、とりあえず無事ここまで帰ってこられてよかったよ。」

微笑むと私を抱きしめる。

「この先、気合入れて頑張らないと・・・な。何処のやつか知らないが、最悪、鍵は取られても、俺の姫を取られるのは勘弁してもらいたいからね。」

抱きしめながら、私の頭を撫でる隼人。

誰よりも、愛する彼の胸の中が一番ホッとする。

腕を伸ばして、隼人にぎゅっと抱きつく。

「私もがんばるから・・。隼人のそばから絶対に離れない。」

しばらく二人無言で抱き合う・・。

肌から伝わるお互いの心臓の音を感じる。

気持ちが落ち着いてくると、何としても、『ｓｐｅｒａｎｚａ［スペランツァ］』に着いてみせるという強い気持ちが湧いてくる。

負けるわけにはいかない。

ふと、外が気になる。

「この列車に乗るＳＰさん達は今、何処にいるのかな？」

「さっきは、まだ外にいたな…そういえば。」

「いた？」

「いたよ。見えにくい所にいたから、ケイじゃわからなかったかもしれないな。」

私の頭を撫でながら答える隼人。

「わからなかった…。隼人良くわかったね、すごい。」

「そんなことないよ。ケイよりは、背が高いからな、その分見えるだけ。」

「背、ねぇ・・・・。きっと隼人はそれだけじゃないよ、きっと。」

「後で、櫻井さんと打ち合わせしないとな～。これからのことでさ。」

大あくびしている、隼人は、先のことは耳に入っていないなきっと・・・。

部屋で簡単な夕食を済ませて、私をいつものように抱き枕にしながら、隼人は早い時間に眠り始めてしまった。

大丈夫と言いながら、疲れていたのね。当たり前か・・。

隼人がいつも撫でてくれるように、今度は私が隼人の頭を優しくなでる。

私は、目が冴えてしまって、眠れないのでそのままで、窓に見える景色を眺める。

ホーム側はとても明るいのだけれど、反対側は少し遠くをみると、Ａｌｂａはあまり大きな星ではないようで、明るい街の光の向こうに、暗い色が見える。

忙しい街での滞在だったな・・・と思い始めた頃、ホームから出発前の音楽が聞こえてきた。

「間もなく、出発いたします。次の停車は『ｄｅｓｅｒｔｏ（デセルト）』です。」

ホームでアナウンスが入る。

次の星に向かうには、地球時間で2日ほど走るらしい。

車掌のジョニーさんが、さっき切符を確認に来たとき、言っていたっけ。

出発のベルが鳴ると、静かに、列車は動き始めた。

外に動く景色を見ながら、思う。

Ａｌｂａにいた3人組はどうなったのだろうか・・。

私を助けてくれた彼・・近いうちに逢うような気がするのはなぜ・・・。

思いを馳せているうちに、いつの間にか隼人の腕の中で眠りについた。

「やっぱりいかないとまずいな・・これは。」

データを見ながら、つぶやく櫻井・・。

「たぶん、今ａｌｂａ出たばっかりか。滞在時間考えたら、迷ってられないわ。早急に手配しないと。」

二人の周りが、さらに騒がしくなってくる気配・・。

二人を乗せた列車は、次の停車する星『ｄｅｓｅｒｔｏ（デセルト）』に向かう。

27　あやしい人影

何か入り口の外側で音がする…。

まだ、時間的には、真夜中のはずなのに。

いつの間にか眠ってしまったが、物音で眼が覚めた。

隣を見ると、隼人も気がついていて、眼を覚ましていた。

「隼人…。」

声にならない声で、話し掛ける。

隼人は、無言で頷き、私をギュッと抱きしめて、額にキスしてから、護身の道具を身につけ、ベッドからそっと下りて入り口に向かう。

私も、枕元に置いてあったものに手を伸ばす。いつでも反撃できるように。

入口の三角窓から、そっと近づいた隼人が外を覗く。

外からは、壁に見えるが、中からはバッチリ部屋の外が見える。これは、セキュリティの面でもありがたい。

外を覗く隼人の顔が、一瞬にして厳しくなった。

隼人を纏う、空気がかわる……。。

誰かがいる…。

隼人は、できる限り視線を外さないように、手元の携帯を操作する。
すると、すぐに足音がしてきて、同時に入口から音が遠ざかっていった。
足音が聞こえなくなって、今度は、携帯電話のボタンを押している。
「もしもし、櫻井さん？隼人です。今大丈夫ですか？」
「ちょっと立て込んでいるけどいいよ。どうした？」
櫻井の話す電話の後ろでは、賑やかな音が聞こえる。
「外…ですか？櫻井さん。」
「まぁね。それより何かあったのかい？」
「ａｌｂａをでて、列車で次の星ｄｅｓｅｒｔｏに向かっていますが、今僕たちの部屋の外で物音がしたので、見たら……。」
言葉が止まる。
「隼人くん？」
櫻井さんが隼人の変化を察する。
「まさか、隼人くん関係の人かい？」
「……そうです。直接接触したことはないけれど、俺が過去に、見たことがある人……でした。」

「すぐＳＰの方にメールしたら来てくれて、今追っているはずですので、櫻井さんへも連絡が行くと思います。」

「そっかぁ…。そっちが先に動き出したか。」

「実は隼人くん、もう数時間したら、僕も地球を離れるよ。」

「えっ本当ですか？」

「隼人くん達はあと約１日ぐらいでｄｅｓｅｒｔｏに着くだろ？」

「はい。」

「僕は列車じゃないから、なんとか隼人くん達が、ｄｅｓｅｒｔｏに着く頃にでも、合流できるんじゃないかなと思ってる？」

「でも、櫻井さん、今地球を離れる訳にいかないって、この間おっしゃっていたじゃないですか。」

「それは本当だよ。でも事情が変わってきてるからね。ちょっとほっとけない。」

「例えば、今回のやつだったり。鍵狙いだけならまだしも、隼人くんまで標的になるなんて思ってもみなかったし。」

「早いうちに調べておいてよかったよ。手遅れになる所だった。」

「まぁ、それだけの理由という訳じゃなく、僕が動いたほうが他の

ことにもいいと判断したからだよ。」
「情報を待ってるだけじゃ、事は動かないし、始まらない。」
「なら、攻撃は最大の防御、だから攻めに回ることにしたんだよ。」
隼人は、電話を持ったまま唖然としている。
「隼人？」
恐る恐る近づいてみる。
「隼人くん、とりあえず部屋から出ないように。また連絡するよ。」
「わかりました…。」
無意識に電話を切る。
「隼人？」
唖然としている隼人の手をそっと握ると、びっくりした顔をして振り返った。
「大丈夫？」
両手を伸ばして、隼人を抱きしめると、大きな手が私の頭を撫でる。
「ごめん。びっくりしたよな。俺も意外な展開に戸惑ってる。」
「何があったの？」
見上げると、眉間にシワを寄せている隼人と眼が合う。

「櫻井さんが、ｄｅｓｅｒｔｏで合流する。」
「え？櫻井さんって、今地球出られないって言ってたじゃない。」
「俺も良くわからないが、もう数時間したら地球を出てくるって。今、外にいるみたいだし。」
「櫻井さんが動き出さなきゃいけない状況になってきたらしい。」
「じゃあ、私がこの鍵を持っていなくても良くなるのかな？」
胸にある鍵を握りしめながら、素直な疑問を口にする。
「たぶん、情報が動いていれば、ケイが鍵を持たなくなっても、狙われるのは、同じ…だろうな。」
「そっか…。」
がっかりと同時に、大きなため息をつくと、今度は隼人が抱きしめてくれる。
「ケイ、これからｓｐｅｒａｎｚａに着くまで、気は抜けないし、もしかしたら離れ離れになるかもしれない。」
「でも。」
隼人の抱きしめる力が強くなる。
「必ず助けに行く。信じて待ってろよ。あと…。」
「ん？」

「もし、俺がいなくなったらそのままｓｐｅｒａｎｚａへ行けよ。たぶん櫻井さんが力になってくれる。」

「え？何でそんなこと言うのよ。探しにいくの当たり前じゃない。」

「ケイはそのまま行け。ｓｐｅｒａｎｚａで待っていてくれ。」

「いやよ。隼人と離れるのは。何のために旅をしているのかわからないじゃない。」

「私は鍵のために旅をしてるんじゃないわ。」

自然と涙が溢れて止まらなくなる。

「ケイ…。」

「そうだよな。目的が違うよな。」

隼人は微笑んで、指で私の涙を拭うと、そのまま顔を寄せて唇を重ねる…。

「婚前旅行、楽しまないとな。」

明日には、次の星、ｄｅｓｅｒｔｏ着く。

櫻井もｄｅｓｅｒｔｏに向かうため、飛行場に向かう。

一般の客が乗る所と違う場所に止まっている宇宙船。

櫻井が到着すると、入口が開く。

「ｄｅｓｅｒｔｏまで、出来る限り急いでくれ。」
中へ入りながら、伝える。
「了解しました。」
数分後、櫻井を乗せた宇宙船が、ｄｅｓｅｒｔｏに向けて飛び立った。

２８　地球への帰還！？

「結局、あれは誰だったのかな？ねぇ、隼人。」

「あぁ・・。たぶんＳＰが動いているから、櫻井さんと合流した時にでもわかるだろう。」

騒動があってから、何か考え込んでいるような様子を見せる・・。

何かあれば、また話してくれるだろう、と思っていた時、隼人の携帯電話が鳴った。

「はい、隼人です。」

なにやら話をしていて、

「わかりました。では、後ほど。」

「櫻井さん？」

電話を切った隼人に尋ねる。

「そうだよ。早いな。何に乗ってきたんだろう。もうｄｅｓｅｒｔｏに着いて駅で待ってるって。」

「そっか…。」

私も、言いようがなく短い返事を返す。

「どうした？」

見上げると、ふわっと微笑んだ隼人と目が合う。

「ん？何でもないって言いたい所だけれど。」
「隼人もなんだか元気がないし、どうしたらいいのかなって思っていたの。」
隼人の腕が、私を引き寄せ抱きしめる。
「ごめん・・心配かけて。ケイを失いたくなくてさ、これから先のこと考えるとすごく不安になるんだ。」
「でも、本当は俺がこんなことじゃいけないけどな・・。」
私も手を伸ばし、隼人にぎゅっと抱き着く。
「私は、隼人が傍にいてくれるだけでいいの。」
「それ以上も以下も望まない。」
「隼人が私の傍らからいなくなるのは絶対にいや。」
私を抱きしめる力が強くなる。
「大丈夫。俺は、この先もずっとケイの傍からどこにもいかないし、どこにも行かせない。」
「たしかに、櫻井さんが合流してこれば、心強い。」
「でも、その分周りの動きは、今以上に厳しくなるかもしれない・・。」
と言った後、私の顔を上に向かせ、不安な気持ちを消すように、唇を重ねあった・・。

「ケイ、俺らの最初からの目的は、ｓｐｅｒａｎｚａに行って、住めるかどうか見てくることだったよな？」

「うん。そうよ。」

「目的が変わったならば、地球に戻ればいい。何がどこで事情が変わってきたのか知らないが、こんなに俺らが追われる筋合いはない。」

「やっぱりあとで、櫻井さんともう一回、これからの話をしよう。」私は無言で頷く。本当にその通りだと思うから。

「話の進み具合によっては、ｄｅｓｅｒｔｏに着いてから引き返してもいいし。この旅に縛られる必要はないよな。」

「私もそう思うわ。来る前に櫻井さんには確認とったもの。ｓｐｅｒａｎｚａに着かないかもしれないけれど、それでもいいか？って。」

「そうだったな。それで櫻井さんの返事はＯＫだった。」

「隼人、旅行費用は、また働いて櫻井さんに返そう。地球に帰ってから。」

「そうだな。結婚式あげてから考えるか。」

「借金があって、式挙げられる？私はしなくても構わないわ。」

「いや、俺がケイと一緒に式を挙げたいから。これは譲れない。」

「普通は反対じゃない？」
「ケイのウエディングドレス姿見たいし。」
「つき合うようになってから、ずっと思っているよ。」
頬にチュッとキスをする。
「隼人もかっこいいから王子さまみたいで、きっと似合うわね。私には勿体ないくらい。」
「なにそれ。」
クスクス笑いながら、私の頭を撫でる。
「じゃぁ、ケイの王子さまは、弱音をはかないで頑張らないとな。」

話をしていると、車掌のジョニーさんの車内放送が入る。
『あと1時間で、次の停車駅ｄｅｓｅｒｔに到着します。乗り換えの方は、お忘れもののないようにご注意下さい。』
「隼人、あと1時間だって。」
「すぐ着くか。ｄｅｓｅｒｔは乗り換えがあるみたいだな。ａｌｂａよりは小さな星でそんなに賑やかな星じゃないみたいだけど。どこかの星の中継地点なのかな。」
資料を見ながら呟く。
「とりあえずｄｅｓｅｒｔでの宿泊場所も、櫻井さんが手配してくれているし。」
「そうなの？」

「うん。」

「櫻井さんたちと一緒の宿泊場所になるかどうかは、聞いてないけど。」

「ＳＰ含めて、彼らの正体も謎が多すぎるし。ｓｐｅｒａｎｚａの関係者っていうなら、かなり生活レベルが上のはずだから違う場所かもしれない。」

「まぁ、今回に限って、俺たちと合流するために動いてきているから、なんとも言えないけどな。」

１時間後、定刻通りｄｅｓｅｒｔに列車は到着した。

今回は、この先進むかどうかわからないので、持ってきたすべての荷物を抱え、列車降りる。

降りる際スタッフにお礼を言い、周りのＳＰを確認して、待ち合わせ場所に向かった。

29　desertо／再会

「あ、櫻井さん。」

「隼人くん、ケイさん、無事着いたね。」

改札口を抜け、指定の待ち合わせの場所に、数人の人たちと話をする彼がいて、笑顔で迎えてくれた。

櫻井さん本人だけれど、立っている姿、地球でのお店で会った時の雰囲気と全く違う…。

スーツを着こなして、落ち着いた感じ。隼人とは、また違った大人の格好よさがある。

見惚れてしまうくらい…。

たぶん、これが櫻井さんの本当の姿なのね。

通り過ぎる人達が、話をしている格好いい男二人に、振り返っていく。

目立つな……。

私には、隣に立つ容姿はない…。

二人から少しづつ離れている…と。

「こら、離れるな。」
隼人に、腕を掴まれた。
「だって一緒にいると、すっごく目立つんだもの…。」
「別に気にしなきゃいいだろ。」
「そういうわけには…。」
「それより離れて、ケイがどっかに連れて行かれる方が困る。」
すでに、私の右手は、隼人の左手に捕まっていた。
「ケイさん、隼人くんの言う通りだよ。」
「腕っぷしのある、二人も男がいて、目の前で連れて行かれたなんて、冗談にもならない。」
「まぁそうなったら、手を出した奴ら、ただじゃおかないけどね～。」
恐ろしいコメントをさらっとはいて、にっこりと微笑む櫻井さん。
隣で隼人も、大きく頷いている。
「櫻井さん、何者なんですか？」
前から疑問に思っていたこと、ストレートに口に出してみる。
「俺？」
「はい。」
「うーん…。いずれわかるからその時まではシークレットだね。気

になる？」
櫻井さんとのやりとりに、隣で隼人が怪訝な顔をしていて、繋いでいる手にも力が入る…。
「そうですね。私、仕事をしている時も、相手の肩書きとかで判断することもなかったですし。今もそうですが。」
「ただ…。」
「ただ？」
「何故、今のこの状態になってきて、地球にいなくてはならなかった、櫻井さんが動き始めたのか…が気になります。」
「そうか、なるほどね。」
「まぁ、ここで立ち話をするのもなんだから、場所変えようか。」
「隼人くん、宿泊先に行こう。」
「櫻井さんも一緒の宿泊先ですか？」
隼人も気になっていたので尋ねる。
「そうだよ。違う所だと思ってた？」
「はい。」
「ここで、別々に泊まったら、俺がここにきた意味がないし、それに、そうしなくちゃいけない理由がないだろ？」

「そうですね。」
「じゃあ、移動しよう。」
そして、隼人と私に向いて表情は変えず、囁くような声で、
「たぶん、追いかけてきたい人も、ちゃんと一緒について来るだろうから…。」
一瞬、なんの事か私には解らなかったけれど、隼人は頷いて、
「そうみたいですね…。」
と答えてから、私の手をしっかり握りしめた。

宿泊先にチェックインした後、それぞれに部屋に移動する。
移動しながら、櫻井さんに
「二人とも、荷物多いんだね。列車に預けてこればよかったのに。」
と、言われ隼人が、
「何が起こるか、解りませんからね。荷物は持ち歩くようにしてますよ。」
と、即答した。
「そうだね…。」
櫻井さんも、隼人の言いたいことが、何となく解るみたいで。
「部屋に荷物置いたら、隣の部屋においで。話をしよう。」

「さっきの、ケイさんとの話の続きもあるし。」

「わかりました。後ほど伺います。」

櫻井さんと別れて、部屋に入り、二重ロックをかける。

隼人は窓からそっと外を見渡す。

私達の部屋の両サイドは、櫻井さんと、櫻井さんと一緒に来た方達の部屋なので、心配はないとは思う。

でも、外と入り口は警戒しないと…。

「隼人、外どう？」

「まだ昼間だから、大丈夫だよ。でも、夜は警戒しないと、だな。」

「あれだけ、駅で話してりゃ、向こうもそれなりに考えてくるだろ。」

「櫻井さんはそれが目的だったみたいだし。」

「えっ、そうなの？」

「たぶんな…。直接聞いたわけじゃないがそんな気がする。」

「自分たちを標的にして、狙ってきてる奴らの状況を見たかったんだろう。」

「その上で対策をねるつもりか、もう始まっているか…。」
「攻撃は最大の防御…。流石だね、櫻井さん。無駄がない。」
「全然気がつかなかった、私。。」
何も知らなくて凹んでいる私を、隼人は笑顔で抱きしめてくれる。
「いいんだよ。俺がわかっていればいいことだから。」
「ただ、これでケイのウエディングドレス姿を見るのは当分お預け…になったな。」
びっくりして、隼人の顔を見つめると、
「ケイが鍵を持っていようがいまいが、俺達が櫻井さんと繋がってるのがわかった時点で、もう逃げられない…ってこと。」
「櫻井さん、俺達が帰りたいと思ってたの、わかってたみたいだから。」
「たぶん、引き止めるつもりで、きたんじゃないかなと思うよ。」
「そうなの？」
「言わなくても、契約の時の話から考えたら、この状態になってきたらわかるもんな。」
「あ、そっか…。」
ｓｐｅｒａｎｚａに着けなくてもいいか？なんて確認してきたっけ。
。

「逃げられないんだね…。」
無意識に大きなため息をつくと、隼人の抱きしめる力が強くなる。
「俺が傍にいる。」
「隼人…。」
「頼りないかもしれないけどな…。」
ふと、弱気な発言もする。
「正直、俺もどうなってくるかわからないから。」
「なぜ？」
「ケイも狙われているけど、実は、俺も何だか別ルートで狙われてきているみたいだから。」
「なに？別ルートって。」
「まだ詳しくはわからないけどな。櫻井さんと話するときに話の中にでてくるだろうから。」
ショックで言葉がでない…。
「ごめんな。心配かけたくなくて言わなかったけど、そうも言っていられなくなってきてるみたいだから。」
私の頭を優しく撫でてくれる。
「結局は、ｓｐｅｒａｎｚａに向かわないといけないわけね。」

「そうだな。」

「さてと、隣の部屋に行くか。櫻井さん待ってるだろうし。」

「うん…。」

気持ちの整理がつかないまま、隣の櫻井さんが待つ部屋に向かう。

30　追われる理由

コンコン…。

櫻井さんの部屋の扉を叩く。

「隼人です。」

すぐ音がして、扉が開いた。

そこにはラフな格好に着替えた、櫻井さんが立っていた。

「どうぞ。入って。」

ラフな格好もいいなぁ…。なんて思って立ち止まっていたら、隼人に、無言で手を引っ張られ、そのまま部屋にはいった。

「はい、コーヒーどうぞ。」

お店での再現のように、櫻井さんがコーヒーを入れてくれて、自分もカップをもち、私達の前のソファーに座った。

「隼人くん、外の状態はどうだった?。」

タバコに火をつけながら、櫻井さんが尋ねる。

「数人…いましたね。」

「顔はチェックできたかい?」

「はい。」
その返事にびっくりして、隣に座る隼人の顔を見る。
会話の意味がわからない…。
「ねぇ隼人、なんの話なの？」
「ん？部屋での話の続き…。俺を狙ってる奴がいるっていう。」
私の右手を握る手が強くなる。
「ケイさんに話をしたんだね。隼人くん。」
「いや…全部はしてないです。ただ俺も狙われていると伝えただけで、それ以上は何も。」
「そうか。それなら話は早い。」
「ケイさんにも、ちゃんと今の状況を話しておいたほうがいいと思っていたからね。」
何がなんだかわからないまま、呆然としてると、
「ケイさん。」
櫻井さんが、真剣な顔して私を見つめる。
「駅でなぜ僕が、ｄｅｓｅｒｔｏにきたか、とケイさんに言われたよね。」
「はい。」

「今から話すこと、大事なことだから聞いていてね。」
「隼人くんが、追われているのは本当のことなんだ。」
「ただ、隼人くんが別に追われるようなことをしたわけでなく。」
「どうやら、隼人くんのお父さんが関連してきているみたいなんだ。」
「お父さん？」
隼人も黙ったまま頷く。
「彼のお父さんのこと、ケイさん達が宇宙に出てきてから、気になることがあって隼人くんのこと調べていたらわかったんだ。」
「もっと早くに事情を知っていれば、二人とも旅には出さなかった…。」
「追われるほど、お父さんは、仕事何をやっているの？」
厳しい表情をしている隼人に聞く。
「…宇宙開発事業団の開発課にいる。」
「え……？そうなの。」
「うん。俺は一切親父の仕事には関わってきていないから、今までよかったんだけど。」
大きなため息をつく…。

「隼人くんが、宇宙旅行に出てきて、お父さんの仕事関係者に狙われるようになったみたいなんだ。」

「それにもう、すでに動き始めてるし。」

「えっ？」

「列車の中で、物音した時あったろ？あの相手がそうだったんだよ。入口で見かけたやつ、過去に親父の近辺にいた奴だった。」

「そんな…。だからあの時、一瞬で表情が変わったのね。」

「親父、今、開発課で最高責任者なんだよな…。」

「推測だけど、隼人くんを捕まえて、取引の材料にしたいのかもしれない…。」

「たぶん…、櫻井さんの、推測が当たってる。」

「まって隼人、それなら私より危険じゃない。」

「櫻井さん、今から地球に戻っても隼人の周りの状況はかわらないの？」

「ケイさん、ごめんね。変わらないか、もしくは、それより悪くなるかもしれない。」

「もしこのまま引き返しても、隼人くんは、地球でも間違いなく狙われてしまうと思う。」

「はやとっ。」
たまらなくなって、隼人に抱き着く。隼人もしっかり抱きしめてくれる。
「隼人ごめんね。やっぱり一緒に来なければよかった。」
「何かあったら私のせい…。」
涙が溢れて、言葉にならない。
隼人の抱きしめる力が強くなる。
「ケイ、そのままよく聞け。俺はおまえを置いて何処にも行かないし、今、後悔もまったくしていない。」
「ずっと言ってきてるけど、宇宙にでると決めたのは俺自身だ。ケイのせいじゃない。」
「親父の仕事がら、こうなることは、少なからず予測はしてた。ただ、相手の動き出しが早かっただけ。」
止まらない涙を拭きながら、顔を上げる。
隼人が額にキスをし、指で、私の伝う涙を拭きながら、
「ケイ、俺と一緒にｓｐｅｒａｎｚａに行くんだろ？」
大きな手で、私の頭を撫でる。
「戻っても悪くなるなら、前に進んだ方がいいんじゃないか？」

「ケイ、俺はお前を離しはしないし、絶対守る…。ケイの王子だからな。」
優しく微笑む隼人。
隼人が私をしっかり抱きしめる。
「そう、そのために僕も今回ｄｅｓｅｒｔｏにきたんだよ。」
今度は櫻井さんが、私の頭を撫でる。違う手に思わず、ドキドキする。
「今回、隼人くんが狙われ追われるのは、予想外だったけれどね。」
「でも、ケイさんも狙われているのも確かだし。」
「遠い地球で、情報量が少なくてハラハラするより、近くにきたほうが何かと都合がいいと判断したから、今回動いてきたんだ。」
「ケイさんに鍵を預けた責任もあるし、ｓｐｅｒａｎｚａには、二人で行かないと意味がない。」
「そうなれば、自然と二人をＳｕｐｐｏｒｔするようになるし。」
「でも、僕たちがいても、この先１００％安心…はないから。」
「それぞれに、注意しながら行くしかない。」
「隼人くん、ケイさん、この先大丈夫かい？」
私も少し落ち着いてきて、櫻井さんに聞く。

「私達が、櫻井さん達と繋がってるのは、相手もわかってきたわけで。」

「相手に対して、駅で三人で話をしたことは、プラスになるのでしょうか？それともマイナスになるのでしょうか？」

「どちらも…なのかな。」

「僕たちも、隼人くんやケイさんを狙う奴らのすべての情報を手に入れた訳ではないから、はっきりは今言い切れない。」

「ただ、言い切れるのは。」

「全力で二人を守る体制を牽いてる…っていう所かな。」

「隼人くんには今以上に頑張ってもらわないといけないけどね。」

「もちろん、そのつもりです。」

隼人も、即答で返す。

「心強いね。」

「そういえば、隼人くんたち、お腹すかないか？」

「朝食べたきりで、そのあとは何も口に入れてないな…。」

「じゃあ、外に食事に行こうか。偵察かねて。」

すでに櫻井さん、準備を始めている。

「そうですね。」

「櫻井さんは、この星は初めてですか？」
ふと、気になったので聞いてみる。

「いや、もう何回か来てるけど、どうかした？」

「宿泊先も予約して頂いていて、助かっていますが、詳しいな…と思って。」

「今は、ネットワークが広がっているからね。何処にいても予約は出来るよ。」

「今から外にでるけど、護身用に持ってる？」

「はい。」

「それじゃあ、出掛けよう。」

すこし緊張しつつ、出かけることにした。

31　過去の女

ＨＯＴＥＬを出てきてから、少し歩いてきた所に、お店があった。
スタッフに案内され、テーブルに着き、慣れた手つきで櫻井さんが注文し、話をしていた時、
近づいてくる女性が一人。
思わず身構えると…。

「あら、隼人じゃない。ここで逢えるなんて。嬉しい～。」

「えっ？」
隣の隼人を見ると、びっくりしていた…。

「華、なんでここにいるんだ？」
「私？旅行中なの。この星で乗り換えだから。」
「それにしても、久しぶり～。」

二人で話をしていて、私は視界に入っていない…まぁいっか。。なんて思っていたら視線を感じて、正面をみると、にっこりと微笑む櫻井さんと目があった。

「席外そうか？」
頷くと、櫻井さんに手招きされたほうへ移動した…。

「面白くないでしょ？他の女性と話をしてて。」
頭に体温を感じて、顔を上げると、櫻井さんが私の頭を優しく撫でていた。

「面白くないですね…たしかに。たぶん彼女だった人でしょう。」
「彼、モテるし今までも彼女がいても不思議じゃないから…。」
と答えると、

「この先、大丈夫かい？」

「同じような場面、また出会うかもしれない。それでも気持ちは変わらない？」
「僕に、気持ちを移してくれてもいいけどな…。」
思いがけない言葉に、どう答えていいのかわからない。

「櫻井さん、またそんな冗談を。私、困っちゃいます。」

「うぅ～ん、やっぱり冗談に取られるか。。」

「当たり前じゃないですか。櫻井さんなら、周りに素敵な女性がたくさんいるでしょう？」

「たぶんいるんだろうけど…。」
私を見つめる櫻井さんの真剣な視線から離れられない。

「ケイさんほどの女性はいないかな…。」

「櫻井さん、私…。」

「あ、隼人くんがこっちに気がついた。」

「すまない。惑わすようなこと言って。でも気持ちは嘘じゃないから…。」

「必ず、ｓｐｅｒａｎｚａに行こう。ケイさんを守るために、僕もきたんだから。」
ふわっと微笑んだ櫻井さんに、戸惑いを隠せなかった。

「ケイ。」
隼人がこちらに走ってきて、私を力いっぱい抱きしめる…。

「話は終わったの？彼女と。」

「ああ。」

「気がついたらケイがいなくて焦った。」

「話が盛り上がってたみたいだから、席外してたのよ。」

「元彼女さん？」
たぶんそうだと思ったけれど、聞いてみる。

「もうずっと前のな。」

「そっか…。」

「ケイ？また良くないこと考えてるだろ。」

「そんなことないわ。」

「部屋に帰ったら、ちゃんと説明するよ。気になったんだろ？」
黙って頷く…。

「やっぱり。そうだと思ったよ。」
やわやわと私の頭を触る。
「櫻井さん、すいません。気を使わせてしまって。」
「大丈夫。ケイさんが心配そうな顔してたから席を外しただけだから。」
「ねっ。」
私の顔をみて微笑む。
「さ、食事に行こう。何のためにきたのかわからない。」
「追ってる相手方は嬉しいだろうけどね。」
途端に緊張感が走る。
その後、食事を終えてＨＯＴＥＬに帰る道中、櫻井さんが前を向いたまま、話をする。
「ＳＰは今まで以上に数はいるが、１００％の安全保障はない。」
「相手がまずどんな手を使ってくるかわからないし。」
ふいに、私の顔を見つめる櫻井さん…。
「ケイさんか隼人くん、どちらが目的なのかわからないし。」
「例えば、さっきの隼人くんの元彼女？のように、知り合いを接触させる場合も考えられる。」
すべて疑っていけってことか…。
「はぁ～～。」

無意識にため息をつく。
「俺の傍にいればいい。」
繋いでいる隼人の左手が強くなる。
「うん。」
私もしっかり握り返す。
ＨＯＴＥＬに戻り、部屋に入る前、櫻井さんが
「ＳＰは周辺にいるが、何かあったら大声だすか、部屋の壁を叩け。すぐ駆け付けるから。」
「部屋の鍵はあってないようなものだから。気をつけて。」
「わかりました。」

櫻井さんと別れて、部屋に戻ると、私の後ろから隼人が抱きしめる。
「さっき、ケイがいなくて焦ったよ…。」
「だって二人で話していて、私なんて視界に入ってなかったじゃない？」
少し拗ねてみる。
「ごめんな。」
私を抱きしめる力を緩めて、隼人と向き合う。
「あんな所で逢うなんて思わないからびっくりしてさ。」

「ケイのことも聞いてきたから、俺の婚約者で、地球に戻り次第結婚するんだって言ったら、びっくりしてたよ。」

「あいつは、学生時代に付き合ってたんだ。卒業と同時に別れたけどな。」

「そうなんだ。」

「入社して仕事を始めたらお互いに自然と離れた。あいつすぐ彼氏が出来たって聞いたし。」

「俺も、すぐ気になる子ができたし…。」

「ん？隼人、気になる子いたの？」

「そう、同期にね。」

顔を上げると同時に唇が重なる…。

「長かったよ。ここまでになるのが。」

「私…だったの？」

「そうだよ。入社してからずっと気になっててさ。」

「同期だから、下手に言って断られたら、仕事にも影響するし。」

「かと言って、ケイに手をだすやつは、許せなかった…。」

「日々葛藤してたんだよ。俺も。」

「そうは見えなかったけどな。モテモテの隼人くんはいつも周りに男女問わず人がたくさんいて。」
「私が入るスキなんてなかったし…。」
「表面的にはな。一応営業だったし。」
「でも、ケイに彼氏が出来た時の落ち込みは凄かったぞ。食べ物が喉に通らなくて、痩せたし…。」
「そうなの？」
「でも考えたら容赦ない厳しさが増したのは、あの辺からか…。」
「たぶん、そうだな。」
「今はこうやって、抱きしめることが出来る。」
「そういえば、さっき櫻井さんに何か言われた？」
「別に、なにもないけど。慰められただけ。」
「そっか…。ならいい。」
「どうしたの？隼人」
「二人でいたから気になってさ…。」
「もしかして、妬いてた？」

「そんなことない…なんて言えない。」
突然、私をベッドに押し倒し、激しいキスをしてくる。
「なんだか、いい雰囲気だったからさ。。」
「隼人、私のこと信じられない？」
彼の目を見つめる。
「信じてるよ…。」
「でも、俺以外の男には、触れさせたくないんだ。」
「隼人…愛してる。」
手を伸ばして抱き着く。
「俺も…、愛してるよ。」
ぎゅっと私を抱きしめてくれる。
長い夜になるのか、どうなのか・・。
二人は、今夜も、これからも、離れることはない。
今、このとき、二人の命は狙われているけれど、思いは離れることはない・・。
ずっと、一緒で・・。

32　一目惚れ

「ああは言ってみたものの、やっぱり近くにいても、心配だよな…。」

部屋に戻った櫻井がソファーに座り、天井を見上げ呟く。

勢いでケイに気持ちを伝えてしまったことには、後悔はしていない。

相手はいても、自分の本心だったから。

本来は、地球にいなければいけない立場である。

でも、とりあえず今は、優先順位でこちらを片付けないと…と思うのは表面的で、

本当のところ、思いのほかトラブルがおおごとになってきているケイ達が心配で、

無理を言って、地球を出てきてしまった。

鍵を預けた責任感だけ…でなく。

気がついたら、彼女のことを無意識に想っている自分がいた。

いつから惹かれ始めていたのかわからない。

もしかしたら、初めて店に訪ねてきた時…か。

一目惚れ？

「俺らしくないな…。」

思わず苦笑いをする。

「今夜、明日の夜、ｄｅｓｅｒｔｏで二人を守りきれるかが勝負…だな。」

「あれだけ昼間に動けば、どちらの相手も、間違いなく動き出すはず。」

ＳＰたちと連絡をとりながら、二人が向こう側にいるであろう、壁を複雑な思いで、眺めていた。

「隼人、ほんとに大丈夫？」

今、ベッドの中で、隼人の腕の中に、すっぽり抱え込まれている。

「なにが？」

「なにが？って、隼人すごい人達に狙われてるじゃない。」

「話しを聞いて驚いたわ。」

私も隼人に抱きつき、抱き合う。

「親父から、「今『ｐｉａｎｅｔａ　ピアネータ（運命）』という星を、開拓をしようという話がでてるが、俺は反対なんだよな、その話。」と、少し前に聞いたことがあってさ。」

「まぁ今回のが、その関係の話なのかどうなのか、改めて親父に聞くわけにもいかないし。」

「これはＴＯＰ　ＳＥＣＲＥＴの話だから、もちろん、櫻井さんにも話せない。」

「そうだよね。櫻井さん達だって、何処まで信用できるかわからないし。」

「たしかに、この間の列車の奴は過去に親父の近辺にいた奴だから、仕事がらみは間違いないんだけどな。」

「俺の方は、少しづつ相手が見えてきている。」
抱いてる腕で私を引き寄せ、優しく唇を重ねる…。

「ケイは相手が、未だにはっきりしないし、狙われる規模の大きさは、俺より数倍上だ。」

「バックだけは、無駄に大きいからな…。」
隣の櫻井さんがいる側の壁を見つめる。

「こうやって櫻井さんが、動き出してきているのが間違いない証拠だよな。」

「そうね。本来ここにはいないはずの人、だもの。」

胸元にある鍵を握りしめる。

「結局ｓｐｅｒａｎｚａに行って、この鍵で、開けるまで旅が終わらないのね…。」
嘆く私を、言葉なく、隼人が抱きしめる。

「あの一枚の張り紙で、国を背負って追われるようになるなんて、夢にも思わなかったわ。」

「自分で決めて、地球を出てきたんだから、仕方ないのかもしれないけど。」

「でも、俺個人としては、ケイとこうやって一緒にいられるようになったのは嬉しいよ。」

「そう？」

「変わらない生活していたら、まだ日々、どうしようか、悶々としてた。」

「隼人が？信じられない。」
なんだか可笑しくてクスクス笑ってしまう。

「今までもずっと言えなかったんだし。ありえる話だよ。」
ため息をつく…。

「私も、結局は田舎に帰って母親に言われて、お見合いでもして結婚していたかもしれない。」

「う～ん。でも……やっぱり私のなかじゃありえないか。」

「好きでもない人とは、結婚は無理だわ。」

「出会いがなかったら、ずっと仕事して、死ぬまでお一人さまだったと思う。」

「そうやって考えたら、今の厳しい追われる状態でも。」

「隼人がこうやって傍にいてくれるから、私は幸せだわ。」
見上げると、隼人もにっこり微笑んでいる。
「俺もだよ…。」
抱きしめられ、居心地のいい、隼人の腕の中で眠りについた。
夜も更け、皆が寝静まる頃事件は起こった。

33　拐われる

静けさのなか、非常ベルが突然鳴り響く。
櫻井が飛び起き、廊下にでる。
隣の部屋から廊下に流れてくるけむり…。
「ケイさんっ、隼人くん。」
呼んでも返事がない。
部屋の扉を開けると、ベッドの下で倒れている隼人がいた。
「はやとっ。大丈夫か。」
身体を揺すり、声をかける。
「さくらいさん…、ケイが…。」
「どうしたっ？」
「…奴らに連れていかれた。」
やっと起き上がる。
「奴ら？」
「ａｌｂａの男たち…。」
「あ……あいつらか。」

不意に、櫻井が取り出した画面で、赤い点滅が移動している。
「鍵のＧＰＳが生きてる。」
「あいつら、空港に向かってる。星から出るつもりだ。」
「隼人、追うぞ。」
「絶対逃がさない。」
櫻井さんが走り出す。
隼人もふらつきながらも、立ち上がり、後に続く。
移動中も、櫻井は片手にナビを持ち、反対側で携帯電話で話をしている。
「連れだしたのは、ａｌｂａで襲った奴らだ。今空港に向かっている。絶対星からだすな。逃がすなよ。」
非常事態にも関わらず、冷静に、次々と的確な指示を出していく櫻井。
この人、ただ者ではない…走りながら、隼人は思った。
この人が動き出すということは、「ｓｐｅｒａｎｚａの国」自体が動くのか。
バックが大きすぎる・・。
「ケイ、無事でいてくれ……。」
祈るような気持ちで、空港に向かった。

意識が少し戻ってきた頭も、朦朧としてるので、自分がどうなっているのかわからないが、
歓迎できる場合ではないことは確か。

隼人の腕の中で眠っていて、それからどうしたっけ……。

そうだ。

大きな音で目が覚めて、すごい煙が立ち込めている中、目の前で、隼人が男と組み合っていたんだ。

「はやと！こっ、この人ａｌｂａの時の…。」

「ケイっ、危ない！逃げろ。」

ふと、気配がしたと思ったら、私の目の前にはサングラスの男…ａｌｂａで私を襲ったもう一人の男がいた。

口に何か当たったと思った瞬間、意識をなくしてしまった…。

隼人、大丈夫だったんだろうか。心配になる。
彼も、狙われている身だから。

無事でいますように・・。

「『ｔｅｎｅｒｅｚｚａ（テネレッツァ）』にそのまま向かう。あの方には、随分待

って頂いているので。」

私から、少し離れた所で、男達は話している。

私の意識が戻ったことに、まだ、気がついていないみたい。

誰が待ってるの？

この鍵のＧＰＳが生きていてくれれば。

胸元の鍵を握り締める。

櫻井さん…。

気がついて……。

隼人…助けて…。

34　救出

「隼人、早くこれに乗って。」

ホテル前に着いた、一台の車に櫻井と共に乗り込む。

「空港まで急げ！」

櫻井はイライラの気持ちを抑えきれず、運転手に伝える。

「承知しました。」

運転手はすでに状況がわかっているのか、冷静に答える反面、出発と同時に猛スピードで走り始めた。

隼人は、二人の上下関係のやりとりと、車内の凄さに圧倒されている…。

「すごい…。」

一般レベルの家庭より上の生活をしてきていた隼人でさえ、お目にかかったことがない、車内の広さや豪華さ。

ちらっと横に座る櫻井をみる。

イライラはあるだろうが、落ちついた雰囲気で、ナビを追っている。

やっぱり…櫻井さんもただ者じゃないし、ケイの後ろにあるものが、大きすぎる。

隼人は、どうしてこうなってしまったのか、たまらなくなって大き

なため息をついた。
「どうした？」
櫻井が尋ねてくる。
「いや…。ケイが心配で。大丈夫かと思って。」
「まだあいつら空港には、着いていないが、特別な入り口含めて、空港の入口全部ＳＰで押さえてあるから、先には進めないだろう。」
「特別な入り口って？」
そんなの見たことがない。
「空港内で、個人で所有する宇宙船がとまる所があるんだが、そこに行くための入り口だよ。」
「たぶん、あいつら、こっちに入って来るはずだ。」
確信したように答える。
「隼人、着いたと同時に、奴らからケイさんを取り戻しに行くから準備しておけよ。」
と言いながら、身体にいろいろ装備を付け始める。
「櫻井さんって、何者なんですか？」
緊急事態だけれど、準備をする櫻井に聞かずにいられない…。
「ケイさんと同じこと聞くんだな。」
クスッと笑う。
「何者…かは、いずれ後からわかってくることだと思うが。」

「そうだな。今まで戦ってきて、銃撃戦では負けたことがないかな。」
ピストルを持ち、弾を込め準備のできた櫻井は、すでに先程とは顔つきが違う。
一瞬、言葉を失う……。
「ケイさんは、必ず取り戻す。」
櫻井の言葉に、強く頷いた。

「もう１０分ほどで、空港に着きます。」
「わかった。」
私を連れ去った、男たちが、話をしている。
「あと１０分ほどで着く。出発できるようにしておいてくれ。」
一人の男がどこかに連絡をとっている。
「たぶん、一緒にいた男も目が覚めて追ってきてるだろうが、その前に出発する。」
「もうひとり男がいましたが、大丈夫でしょうか？」
「たぶんな。たいしたことないだろう。」
隼人と櫻井さんの話だ…。
もうひとりの男って、櫻井さんのことだよね。
彼のこと知らないんだ。

ｓｐｅｒａｎｚａの関係者なのに…。

今、きっと二人で、追ってきてくれている。
少しだけ、心に生きる希望が出てくる。

（隼人……助けて。他の星に連れていかれちゃう。）
必ず、何があっても助けに行く…と言ってくれた彼の温もりを、思い出す。

私も、黙って連れて行かれるわけにはいかない。

でも、どうしたらいいの。
そっと外をみると、空港らしきものが見えてきた。

そうだ。大声あげて抵抗しよう。
身体も、男たちにわからないように、そっと動かしてみる。

大丈夫。動ける……。

隼人たちが、見つけてくれるように。

櫻井さんがいれば、ＳＰも空港内にいるはず…。

鍵を握りしめる。

必ず、ｓｐｅｒａｎｚａに行くんだから。
ここで連れて行かれるわけにはいかない。

（隼人、櫻井さん、私を見つけて…。）

車が段々とスピードが落ちてきた。
もう少しだ…。
心臓が飛びだしそうな勢いで、脈を打っている。
私が頑張らなきゃ…。
そして、車が止まった。
「よし、降りるぞ。」
男が後ろにいる私に声をかける。
「降りるぞ。一緒にきてもらう。」
私も、まだ虚ろなフリをして、ゆるゆると起き上がる。
「ここは？」
「空港だ。今から宇宙船に乗る。」
「なぜ私があなたたちと一緒に行かないといけないのよ。」
「ｔｅｎｅｒｅｚｚａという星で、待っている人がいる。」
「私は、逢う気持ちもないし必要ないわ。」
「貴方がなくても、逢って貰わないと困る。こちらは用があるのでね。貴方と、貴方の首にかかっている鍵に…。」

（やっぱり鍵か。）

「私はいやよ。」

男が強引に連れて行こうとするので、

「いや～～。誰か助けて。連れて行かれる～。」

引っ張られながら、大きな声で反抗する。

「黙っていけなければ…。」と男が言った瞬間、

「パンッ！」

「ああっ」

私の手を掴んでいる、男の足から血が流れている。

「ケイっ。」

声のする後ろを振り返った瞬間、櫻井さんが、私の手を握っていた男を思い切り殴り倒し、そして私を抱きしめた。

目の前では、隼人がもう一人の男を投げ飛ばし、ピストル口を、男の頭に当てていた。

「大丈夫だったか？」

櫻井さんが私に尋ねる。

声にならなくて、震えながら頷く。

「間に合ってよかった。」
顔を上げると、微笑んでいる。
「櫻井さん…。」
「ケイ…。」
櫻井さんが、私を包むように優しく抱きしめ、額に軽くにキスをした。
不思議…とっても居心地がいいの。

「よくも俺の大事なケイを連れて行こうとしてくれたな。いい根性じゃないか…。」
目の前で、ピストルの引き金を引きそうになっている隼人に、
「隼人まてっ。そいつを殺っても、何も解決しない。生かせっ。」
それを聞いて、隼人も我に返る。
「こいつら連れて行って、はかせろ。」
櫻井さんがいうと、ＳＰが数人きて、二人を連れて行った。
残ったのは、呆然としている私と、隼人と櫻井さん。
男たちが行ってしまうと、隼人が私の所に走ってきた。
「ケイっ」
今度は隼人に抱きしめられる。
私も、手を伸ばして隼人に抱き着く。

「はやとぉ…。怖かった…。」
隼人の体温を感じた途端、涙が溢れてきた。
「無事で…よかった…。」
隼人も、力いっぱい抱きしめる。
「必ず助けに来てくれるって信じてたけど、でも…。」
涙で言葉にならない。
「わかってるから、喋らなくていい。」
大きな手で、頭を撫でてくれる。
やっぱり隼人がいい…。

「隼人、ケイ、ここにいるのはまずい。とりあえず車に行こう。」
私の隣に櫻井さんがくる。
「はい。」
三人で歩きながら、話をする。
「櫻井さん、ありがとうございます。」
立ち止まって、櫻井さんに頭をさげお礼をいう。
「当たり前のことしただけだよ。」
櫻井さんの手が、私の頭にのる。
「責任があるからね。」
「でも、無事でよかったよ。」

「これから奴らの正体がわかってくるだろうけどね。でも、ただじゃおかない。」
意味深なことを言う櫻井…。
「今度は足だけでは、すまないから。」
「あれは櫻井さんが撃ったんですか？」
撃たれた男の足を思いだす。
「命が助かっただけありがたいと思って貰わないとね、奴らには。」
「ケイの寝込みを襲っておいて、薬で眠らせて、連れていったんだから。」
「本当なら、殺されても文句はでないと思うよ。」
「今は、あえてとどめを撃たなかったけど。」
「えっ？」
サラリと言う櫻井さんの顔をみる。
「気持ちはとどめを撃ちたいくらいだったけどね。隼人と一緒で。」
隼人をみると、難しい顔しながら、頷いている。
「死人にくちなし…だから、死なれたら奴らの思惑がわからなくなるだろ？」
「だから生かしたんだ。」
「聞いたあとは、それから考えるかな。」

「！！　」
私も、隼人も返答出来ずに固まる。
「これが、駆け引きだよ。」
「国を守るための…ね。」
「そういえば、男の話では「ｔｅｎｅｒｅｚｚａ」に行くって言ってたわ。」
「ｔｅｎｅｒｅｚｚａ？ほんとか。」
真剣な表情で、私をみつめる。
「間違いないわ。車を降りる時言ってたもの。」
「そうか・・・。」
しばらく考えてから、
「また違う方向で動くな・・これは。」
「まだ今回のは序の口かもしれないが。」
ふと、悲しそうな顔をしながら、
「騒動に巻き込んでしまって、二人には申し訳なく思っている。」
「俺がここにきた以上、全力で命は守る。」

「櫻井さん？最初にｓｐｅｒａｎｚａに行くと決めたのは、私たちだわ。」

「そう。俺らはた櫻井さんに言われたから宇宙にでてきたわけじゃない。」

「鍵を届けるのも、受けたのは俺ら。」

「嫌ならうけなきゃよかったんだから。」

「まぁ、婚前旅行に、これだけの騒動に巻き込まれるのは想定外だったけどなぁ…ケイ。」

「そうね。」

「でも櫻井さんのだけの、責任ではないわよね。」

「あえていえば、連帯責任…ね。」

「そうだな。仕事ならひと騒動あるパターンだ。」

二人でクスクス笑う。

「二人とも…。」

「後戻り出来ないなら、ｓｐｅｒａｎｚａに向かわなきゃ…ね、櫻井さん。」

櫻井も笑顔になる。

「託したのが、ケイと隼人でよかったよ。俺の人選は間違っちゃいなかった。」

「そういえば、櫻井さん。いつのまにか、俺ら名前で呼んでるよね。別にいいけど。」

「そうだな。他人と思えなくてな…。」

思わず苦笑いする。

「さて、今夜こそさらわれないように、臨戦体制を敷くか。」

櫻井さんの顔つきが変わる。

「まだ、終わったわけじゃないからな。」

気が引き締まる。

「別のＨｏｔｅｌを手配した。荷物は全部動かしてあるから、そちらに向かおう。」

まだ旅は始まったばかり。

35　背中に負うもの

「なにっ、失敗した？」

「申し訳ありません。只今ｄｅｓｅｒｔｏより報告が入りました。二人組の男に、襲われたそうです。」

「二人組…？」

「一人は、彼女と地球を出るときから一緒に動いてきている男、もう一人はまだ正体がわかりません、が、すごい腕の立つ奴らしいです。」

「味方の2人も、今行方を追ってますが、何処に行ったのかわかりません…。」

「わからない？捕まったか…。」

「たぶん。」

「でも、誰に…？」

「サムは今、3人を追ってますが。」

「ったく、あと少しだったのに…。」

「3人を、次の指示まで間違いなく追うように伝えておけ。」

「はい。承知いたしました。」

「この次は必ず…。」

……

「さてと、どうするかな。」
事件のあった後、車で今夜泊まる予定のＨｏｔｅｌへ向かっている道中、先程まで、
何やら電話で打ち合わせをしていた櫻井がタバコを吹かしながら、
呟く…。

「どうするか…ですか？」
櫻井の柔らかい視線に気がついた私は、彼の顔を見つめる。
私の右手を握っている隼人の左手に力が入る。。

「たぶん、このまま黙って身を引いてくれる相手じゃなさそうだからね。」

「ケイがさっき言っていた星の奴らなら特に…。」

「櫻井さん、心当たりでも？」
正直に答えて貰えると思わなかったけれど、口にしてみる。

「ある。ｔｅｎｅｒｅｚｚａは厄介な相手だ。」
ため息をつきながら答える櫻井。

「隼人の関係も厄介だけどなぁ。」

「隼人自身が、直接関わっているわけじゃないから、相手がどうしたいのか、全く見えてこないし。」
隣で隼人も厳しい表情をしながら頷いている。
「ケイは、相手が見えてきたと思ったらとんでもない奴らだし…。」
「そんなに、毛嫌いするほど、いやなんですか？その星の人は。」
「奴らも王政国家でね。何かとぶつかることが多いんだよ。」
「国同士か…バックが大きすぎるな。」
隣で呟く隼人も、大きなため息をつく。
「間違いなく、ケイにぶつかった男も、俺らを追ってきてるだろう。」

「もしかしたら、この前隼人にメールした国の話が、ｔｅｎｅｒｅｚｚａかもしれないな。」
櫻井が考え込むように話すと、
「この前のメール？」
私には、心当たりがない…。
「隼人、櫻井さんが言ってるこの前のメールって何？」
隼人に尋ねる。
「ん？隼人、ケイに伝えなかったのか？」
頷き、力を落とした声で隼人が答える。

「はっきりしないことで、ケイに余計な心配かけたくなかったから言わなかったんです。」

「そうだったのか…。」

「櫻井さん、何の話なんですか？」

「数日前から、ｓｐｅｒａｎｚａと同じような王政国家の国で、水面下で人探しをしているという話が流れてきていてね。それも女性で。詳しいことはわからないが、隼人には、ケイを気をつけて…と、たしかあれは襲われたあとのメールだったな。」

隼人が、言葉なく頷く。

「隠すつもりはなかったんだよ、ごめん。ケイ。」

私を引き寄せ、頬にキスをする。

「はっきりするまでは、言うのはやめようと思ってね。悪戯に不安感煽るみたいで嫌だったんだよ。」

頭を優しくなでてくれる。

「ありがとう、隼人。心配してくれて。」

話をしているうちに、宿泊先のＨＯＴＥＬに着いた。

「さて、行こうか。」

車から降りる際、

「一日でも早くｓｐｅｒａｎｚａに着くこと考えないとな。」

と言いながら櫻井さんが、私の頭をくしゃっと撫でていった。
チェックインして驚いたのは、今夜はＨＯＴＥＬ最上階の特別室らしい。
櫻井さんは、ｓｐｅｒａｎｚａの関係者なので、普段通りだと思うけれど、何故私たちまで…？
そう思っていたのは、私だけではなかったらしい。
「僕たちもこの部屋へ宿泊するんですか？」
隼人が櫻井に尋ねる。
「今夜は、臨戦体制で望むから近くにいたほうがいい。ケイを連れていかれたくないからね。」
「隼人も、相手はこの星で押さえて行きたいだろうから、油断するなよ。」
「はい。」
「それぞれ独立して部屋数はあるが、この特別室に入って来ることができる入口は、一つだけだ。」
「万が一のことがあれば、対処が出来る。夜も交代で入口はＳＰが見張るから。」
「ただ、１００％の保証はない。お互い気をつけるに越したことはない。」
「とりあえず部屋で休憩しよう。疲れただろ？二人とも。」

「後で、これからのことを打ち合わせしよう。」
「わかりました。」
櫻井と別れ、部屋に入る。

部屋の中には荷物もちゃんと届いていた。
列車も車内もびっくりしたけど、部屋も…、櫻井さんとの生活レベルの違いを改めて感じる。
ｓｐｅｒａｎｚａの関係者…いや、たぶん…国を動かせる、かなり上の身分じゃないかと感じている。
口にはださないけれど。
いずれわかること。
そうだとしても、私には、何ら関係なくだから。
肩書なんて、なんの比較の対象にもならない。
個人として、尊敬ができるかどうかだから。

「ケイ。」
隼人の呼ぶ声に、振り返るとそのまま強く抱きしめられる。
「隼人？」
返事もなく、しばらくの間抱きしめたままだった。
「俺はケイを支えきれるか、自信がなくなってきたよ。」
隼人の表情が、半分泣きそう…。
「隼人、私ね、彼らに捕まっている時、もう隼人に逢えなくなってしまうの？って思ったらとても悲しかったし辛かった。」
「でも、その時隼人が前に言ってくれた言葉『必ず助けに行くから』

と、あなたのこうやって、抱きしめてくれた体温を思い出したの。
そうしたら、このまま連れていかれるわけにいかない…て思って、
車から降りた時、抵抗したの。」

「隼人の顔をみたとき、ほっとしたわ。嬉しかった。」
隼人にしっかり抱き着く。

「だから、自信がないなんていわないで。私の心の支えなんだから、
隼人は。」

「何としても、ｓｐｅｒａｎｚａに一緒に行きましょ。私は、早く
隼人のためにウエディングドレスが着たいわ。」

「ねっ。」
顔を上げ、隼人を見つめる。

「ケイ…。」
抱きしめる力も強く、そのまま唇を重ねる…。
隼人の熱い体温を生きて感じられるのが、これほど幸せなことはな
いと実感する。

地球をでてきたことで、トラブルは多いけれど、後悔はしていない。
自分自身の判断は間違っていなかったと思いたい。
この先何が待っているのかわからないけれど・・。
櫻井さんの存在も大きい。でも彼の思いを、受けきれないのが、辛
いところ。
ｓｐｅｒａｎｚａには、まだまだ越えなければいけないことがたく

さんありそう…。

３５　背中に負うもの（後書き）

ご無沙汰しております。作者の霧島です。約１ヶ月半振りのアップとなりました。あら、忘れちゃったわ・・と思われる方、そうじゃない方も、またアップしますのでよろしくお願いいたします。今回書き始めるのにあたって、自分の書いたもの再度読み返しました・・^__^；４月から書き始めて、半年が過ぎました。これから最後の話までは、一気に書き上げる予定（笑）よかったらこれからまたお付き合いくださいませ^^

36　苦悩

「まいったな…。」

櫻井も、部屋で一人になり、無意識につぶやく…。

隼人たちとｄｅｓｅｒｔｏで合流してから、更にケイを思う気持ちが強くなっている事実に、戸惑っている自分自身がいる。

「このままだと、年甲斐もなく、隼人に八つ当たりしそうだ…。」

歳を重ね人並みの恋愛もしてきた。

結婚も、今までの自分がいた特殊な立場では、考えられなかったのもある、が、その前に、結婚しようと思う女性との出逢いがなかったのもある。

でも今は…。

身近に、強く思い惹かれる女性（ひと）がいる。

近くにいても、今は手が届かない。それでも…。

Ｈｏｔｅｌから空港に奴らを追っている際、平静を保っているように、周りは見えたかもしれないが、心の中は、厳しい戦闘の時でさえも思ったことがないくらい怒りに溢れていた。

奴らを見つけた瞬間、とどめを打ちたい気持ちを精一杯の理性で押さえ、足だけ狙った。

そして、震えているケイを抱きしめてキスをした時、心から愛しくて、離したくない…と思った。

こんな気持ちになったのは初めてのこと…。

でも隼人には、ケイへの思いを知られる訳にはいかない。

明日には次の星ｌａｇｏ（ラーゴ）に向けて出発しないといけないのに。

その前に、今夜を無事すごせるかどうかの問題なのに。

「気持ちをいれかえないとな。」

と、声には出してみても、力がない…。

ふと、外の景色が目に入る。

ｄｅｓｅｒｔｏは名前の通り、星全体が砂漠地帯になっていて、特に、夕方は光の加減なのか、砂漠が輝いて見え美しい。

Ｈｏｔｅｌの最上階から見下ろすと、街は人も多く、賑やかな様子。

「この星が、こんなに賑やかな街になるなんて、思ってもみなかった。」

「たしか、データによると、ここの開発は隼人の親父さん、関わってたよな。」面倒なことを思い出した気がする…。

「よし。これからの打ち合わせをするか。」

頭を一降りし、隣の部屋に続く入口に足を向けた。

……

隼人とケイも、一通り部屋の中巡りをし、窓際に腰を下ろして、話をしていた。

「明日、ｌａｇｏに出発しないといけない日、になってるよね。」

「列車に乗れるのかな。」

隣に座る隼人を見つめると、体温が唇に重なる…。

「隼人…。」

「何があっても、大丈夫だ。」

「たぶん、簡単にはｓｐｅｒａｎｚａにはたどり着けないだろうけどな。」

ふわっと身体が温かくなる。隼人が抱きしめてくれる。

「どうなっても、俺らは一緒だろ？」

隼人の腕の中で、頷く。

「あとは、櫻井さんとの打ち合わせ次第でどうなるか…だよな。」

「今夜、無事に越えられたら、明日の列車に乗る。」

「ただ。」

隼人が、言いにくそうにいう。

「ただ？どうしたの？」

「狙われることを、覚悟しないとな。」

「あ…そうだった。」
隼人の関係者が列車に乗っていた。
「前に親父に聞いたことがあって、たしか、この星の開発に親父が関わってる。」
「え？そうなの。」
初めて聞くので、びっくりする。
「そう。だからこそ、此処にくる列車で狙われたのかもしれない。」
「関係者はこの星のことよく知ってるからね。」
「だから櫻井さんも、さっき気をつけろって言ったんだ。」
「櫻井さんは、親父が関わってるの調べてあるだろうから知ってるんだろ。」
「そっか…。」
「ん？どうした？」
隼人の大きな手が、私の頭を撫でる。
「隼人、ごめんね…。」
事実がわかってくるほど、申し訳なく思う。
堪らなくなって、胸に顔を埋める。
「ケイ。」
隼人の抱きしめる力が強くなる。

「これは避けては通れないことなんだ。ケイの責任じゃない。」
「地球にいても、ありえることだからね。」
顔を上げると、にっこり微笑む隼人。
「俺が、背負わなければいけない責任…だな。」
「それに、絶対に守らなきゃいけないものが増えたから余計にがんばらないとな。」
と、言いながら私抱きしめ、愛を確認するかのようお互い唇を激しく重ねる…。
「そろそろ、櫻井さんの所へ打ち合わせにいくか。」
「襲撃にそなえて…。」
ｄｅｓｅｒｔｏでの、二日目の夜を迎えようとしている。

37　不安な夜

「…報告は以上です。」

「ありがとう。」

隼人とケイが、櫻井の待つ部屋に入ると、ソファーに座る櫻井とSPらしき男性とが、話をしていた。

「櫻井さん、お待たせしました。」

隼人が声をかける。

「少しはゆっくり休めたかい？」

ソファーに座るようすすめてくれながら、話をする。

「部屋の中巡りをしました。とても素敵なお部屋だったので。」

と笑いながら私が答えると、柔らかな笑顔で私を見つめながら、

「それならよかった。何かまだ希望があれば言ってくれていいから。」

「そんな。充分過ぎて、反対に申し訳なくて…。ありがとうございます。」

「いいんだよ。気にしないで。」

と、話していると、

「櫻井さん、打ち合わせって？」

隣に座る隼人が、櫻井さんに不機嫌な声で話かける。

「そうだね。始めようか。」
言葉と同時に、櫻井さん、真剣な表情にかわる。
「ケイが連れて行かれる時、ＳＰも近くにいたはずなんだが、確認してみたら、あの騒動に全く気がつかなかったみたいなんだ。」
「どうやって忍びこんで、連れ出したかは、捕まえた二人は白状したが、あと一人は泳がしてある。」
「泳がしてある！？」
隼人と私が同時に反応する。
「そう、空港でケイにぶつかった男。」
あ…そうだ。
そういえば３人仲間だった。
「奴、何処にいるかわかってるんですか？」
「わかってる。今ＳＰが奴についてる。このＨｏｔｅｌ近辺に間違いなく来てるはずだ。あれだけの騒動だ。黙って引き下がるわけがない。」
顔色変えずに櫻井さんが答えるが…。
「二人捕まえただけで、何も解決してないからな。」
隼人も怪訝な表情をしている。
「隼人の言う通りだ。肝心なことを、捕まえた二人はしらない。」
「でもあの二人、私には、ｔｅｎｅｒｅｚｚａで待っている人がい

ると言っていたわ。私と鍵が欲しい…と。」
「本当か？」
櫻井さんの動きが止まる。
「ええ、間違いないわ。私に逢わせたい人が待っていて、鍵も…って。」
「だから余計に捕まるわけにいかないと思って暴れたんですもの。」
「……。」
櫻井さんが、急に黙ってしまった。
「櫻井さん…？」
「あ…ケイ、ごめん…。考え事してた。」
「どうかしましたか？」
隼人も櫻井さんに聞く。
「…ケイが、連れていかれなくて本当によかったよ。」
真剣な眼差しの櫻井さん、私を真っすぐ見つめる。
「あのまま連れていかれたら、ケイの命も、ｓｐｅｒａｎｚａも大変なことになってたかもしれない。」
「ｔｅｎｅｒｅｚｚａの王は、手に入れたいものがあれば、手段を選ばない。」

「人の命だって、奪うにも全く容赦ない。」
「…ただ。」
「ただ…？」
私を見つめる櫻井さんと目が合う。
「鍵を手に入れたい…っていうのは、わかるんだが。」
「ケイにも逢いたいっていうのは、どうも納得がいかない。」
「確かに…。」
隼人も頷く。
「何が目的なのかな？」
私も不安になる。
無意識に、自分の腕で自分を抱きしめていた。
それに気がついた隼人が、私の腰を引き寄せ、抱きしめる。
黙って考えていた櫻井さん、
「…まさか。そんな。」
「櫻井さん？」
「たしか、ｔｅｎｅｒｅｚｚａの王は、隼人たちと同年代…。」
「もしかして、王妃探しかっ！？」
櫻井さんが、焦る…。

「王妃？」
全く話がわからない。
「ｔｅｎｅｒｅｚｚａの王は結婚していない。」
「それが、私とどこでつながりがあるのか、わからないのですが…。」
隼人の抱きしめる力が強くなる。
「ありえる話だな。」
櫻井さん、爆弾発言です…。
「いや…櫻井さん、全然ありえないんですが？」
私も焦る。
一般庶民の私が、王妃なんて、全く縁なしです。
これ以上の混乱は勘弁してほしい…。
「王妃なんて、とんでもない。」
隼人が重い口を開く。
「冗談じゃない。ケイを連れていくなんて。何奴だよ、全く…。」
「絶対に渡さない。」
「隼人、俺も同感だよ。冗談じゃない。」
櫻井さんも、ため息をつきながら答える。
「今夜が勝負だぞ、隼人。」

「わかってます。」

「今夜無事越えたら、朝一でｌａｇｏに行く列車に乗るといい。」

「櫻井さん、列車には隼人を狙っている奴らがいたわ。大丈夫かしら？」

隼人も狙われている身、とてもとても気になる…。

「大丈夫…とは言い切れないが、相手も列車内での騒動は、最低限に抑えるはず。」

「もし、隼人を捕まえても、次のｌａｇｏまでは、途中下車できないからな。」

「あと車掌には、話はしてあるから、怪しい奴はチェックができる。」

「ジョニーさん、事情知ってるんですか？そうはいっても私は、１００％の信用はしませんが。」

「買収されてるかもしれないからな。」

隼人も答える。

「一般常識でありえるはなしよね。」

「細かい事情は話してない。ただ、列車のあの部屋に入る時点で、一般の旅人ではないことはたしかだから。予約の時点で、ｓｐｅｒａｎｚａまで、間違いなく送り届けてほしいと話はした。」

たしかに…。

一般庶民は無理だわね。

「駅までは送っていくから。」

「櫻井さんはこの先、どうしますか？」

「列車には乗らないが、ｌａｇｏには向かうよ。たぶん列車より早く着くはず。」

「車内でも何かあったらすぐに連絡してくれればいいよ。ＳＰも列車に乗ってるから。心配しなくていい。」

櫻井さんがにっこり微笑んで返事をしてくれた。

「そういえば隼人、ｓｐｅｒａｎｚａに向かうこと、親父さんに言ってきたか？」

「はい。ケイと二人ででかけると。それがなにか？」

「ならいい。たぶん親父さんも隼人の身を案じているはずだから、隼人を狙ってる奴らのこともいずれ耳に入るだろう。」

あ…なるほど。櫻井さんの思いが少しわかったきがする。

「さて、食事して今夜に備えるか。」

言葉は、軽いが、表情は厳しいままの櫻井さん。

「間違いなく、今夜から、明日にかけて、多分動きがある・・・・。」

ｄｅｓｅｒｔｏでの夜が始まる・・・。

38　嫉妬

夕食を終え、部屋に戻って、お風呂も入り、早々にふかふかのベッドに潜る。

心身の疲労が昨夜の騒動で、もう限界に達していた。

お風呂上がりの、隼人も隣に潜ってきた。

鼻を擽る、彼自身の香りが私は大好き…。

「今夜、また何かあるのかしら？」

先程の話を思い出す。

ばたばたするのは、もう勘弁して欲しい。

「どうだろうな。」

「気がついたら、話が更に大きくなってきてるし。先が見えない。」

「王妃ってなに？って、話聞いてびっくりしたわ。どうしたらそんな話がでるのか。」

「俺も…。」

と、言いながら、私を引き寄せ抱きしめる。

「何が王妃だ。冗談じゃない。絶対誰にもケイは渡さない。」

「あと、櫻井さんにも…。」

「櫻井さん…？」

意外な名前が出てきてびっくりする。

「櫻井さんも、何だかケイのこと気になってるみたいだから。」

抱きしめる腕に力が入る。

「それはないと思うわ。」

「櫻井さんとは、立場が違いすぎるし。鍵を預けてるから心配だけなんじゃない？」

そう、櫻井さんは、私が近寄れるような立場の人ではない…と今回の騒動の中、確信した。

「いや…、そればっかりじゃないな。」

隼人の熱い視線を感じる。

「何となくわかるんだよ、話を聞いていて。ケイに対する、櫻井さんの思いがさ。男の勘ってやつ？」

「だから余計に…心配になる。」

抱きしめる力が緩んだと思ったら、隼人の妖艶な雰囲気で、見つめられる…。

「俺の…だから。」

そう言う間に、隼人の唇と重なりあう。

「ケイ、愛してるよ…。」

「隼人、私も。愛してるわ。」

隼人の体温が、私の身体をそっと包む…。

「私を離さないで。」

「もちろんだ…。」

「姫は王子が必ず守ると決まってるからな。」

額にふんわり体温を感じたと思っていたら、隼人の熱い息が徐々に下がってきた…。

「はやと…。」

この先不安がいっぱい。

でも今は…この快楽の中に、心も身体も委ねることにした。

……

櫻井は、身体を休ませるためベッドに横になっても、気が張っていて、結局明け方まで眠ることができなかった。

「戦場にいるときと一緒だな、これは…。」

小さなため息をつく。

SPからの細かい報告を聞きながら、これからの動きを頭のなかで、組み立てる。

「隼人関連の奴らをどうするかな。」

近くに来ているのは、わかっている。
昨日の騒動も、もちろん確認してるだろう。
そして、このまま列車に、たぶん乗ってくる…。
「俺も、一緒に列車乗っていく……訳にもいかないな。」
心配で仕方がないし、離れたくないが、下手に自分が絡んでいると、ケイまでも危ない。
それは一番避けたい。
「とりあえず、二人を列車に乗せないと前に進まないか。」
しばらく考えたあと、電話をし、一人の男性が部屋に入ってきた。
「朝、隼人たちを列車に乗せるために送って行く。俺は一緒に乗って行くわけには
いかないから、代わりに近くにいてやってくれ。列車の予約はとってある。」
「わたくしで良いのですか？」
「今回は特別だ。本当は俺が一緒に行きたいのだが…。」
「そうでしょう。」
男はにっこり微笑みながら答える。
「？」
櫻井は男に視線を送る。

「ご主人さまの気持ちは、いつもと違い、珍しく周りに漏れてます。」

「はぁ……、やっぱりか。」

これじゃあえて言わなくても、隼人もきっとわかってるな。

「真（まこと）、ケイと隼人を頼んだ。連絡は随時。」

「承知いたしました。」

木理谷　真（きりたにまこと）は、櫻井の部下ということになっているが、それは表面上。

普段は影となり日なたとなり、身近にいて櫻井を支えている。

付き合いも長い。

「まいったな。」

真が部屋を出ていったあと、一人呟く。

「さて、動き出すか。相手が動き出す前に。」

……

「おはようございます。」

櫻井が1階に降りて行くと、隼人とケイが周りにＳＰを従えて待っていた。

「おはよう。二人とも早くないか？」

「昨夜は、ハラハラしながら眠って、朝も目が覚めるのが早かったんです。」

やっぱり、前夜のことがあって、眠りが浅かったから二人とも早く目が覚めてしまっていた。

「そうか。」

「さて、出発しよう。俺は駅までだから。後は二人で行くように。」

「隼人の関係者が乗ってくると思うから気をつけて。」

隼人を見ると、厳しい顔つきで、無言で頷いた。

入り口に横付けされた車に乗りこみ駅に向かう。

駅には、数分で着き、降りる際、櫻井さんは、私の頭を撫でながら、

「次の星で会おう。くれぐれも隼人から離れないように。連絡は随時入れて。」

「わかりました。」

笑顔で別れ、隼人にいつものように手を繋がれ、列車の待つ、プラットホームに向かった。

39　隼人の生い立ち

プラットホームに停車しているｍｉｄｎｉｇｈｔｂｌｕｅの列車に戻ると、車掌のジョニーさんを始め、スタッフが笑顔で、出迎えてくれた。

「戻ってこれたわね。」

「まぁ、これからどうなるかわからないけどな…。」

車から降りて、ここまで来る間も、あまり話すことはなかった隼人。

「とりあえず、ｄｅｓｅｒｔｏからは出られる。」

隼人は、ソファーに足を伸ばし、座りながら、私を前向きで自分の膝の上に座らせ、腕を私の腰へ回してきた。

「ｌａｇｏ（ラーゴ）には、地球時間で４日かかるって、さっきジョニーさん言ってたわ。」

後ろにいる隼人に声をかける。

「そうみたいだな…。」

と言ったまま、考え込むように、そして私を後ろから抱きしめた。

ジョニーさんの出発のアナウンスのあと、列車は静かに動き始めた。

動き出す景色を、言葉なく眼で追う…。

「ケイ…。」

しばらくすると、後ろの隼人の声がする。
「ん、なに？」
隼人の抱きしめる腕の力が緩むと、今度は私の身体を横に向ける。
「ケイ、大丈夫か？」
心配そうな顔をして、両手で優しく私の頬を包む。
「私は大丈夫よ。隼人こそ大丈夫？」
「何か考え込んでいたみたいだったから…。」
「ごめん。。」
「ｌａｇｏに向かうまでのことはもちろんのこと、先のことを考えていたんだ。」
「さっき、親父にも連絡した…。」
そういえば、車内で何処かへメールしてたわね。
「公はまずいが、親父の関係者に、俺が追われてることも、ｌａｇｏに向かっていることも、伝えた。」
「何か返答はあったの？」
「怪しい動きがあるのは、掴み始めてたが、俺が追われてるのは知らなかったみたいだな。驚いてたよ。」
「そうなの…。」

「あと親父に、ケイをしっかり守ってやれって、言われた。」
「えっ？」
「言われなくてもそのつもりだけどな。」
頬にかかる手が顎に、そのまま二人の唇が深く重なる…。
「俺を追うやつらの方は、親父の関係者がすでに動き出したみたいだし。」
「櫻井さんにも、あとで連絡しないとな。」
「そうね。」
「これからは、度々親父からも連絡が入るだろう…。」
と言いながら、浮かない顔をしている。
隼人にしかわからない、何か複雑な思いがあるんだろうな。
だから、あえて今は何も聞かない…。
「でも隼人、よかった。お父さんが動き出してくれるなら。」
これは本当の気持ち。お父さんが動いてくれれば、きっと解決も早い。
「俺は良くない。」
私を引き寄せ抱きしめる。
「隼人…。」
「俺より、ケイの方がこれから本格的に周りが動き出すはず。」

「そう…、私はまだこれからだものね。気が重いわ。後戻りはできないし。」
前に進むしかない選択肢も辛い…。
「誰が一緒にいるんだ？」
隼人の大きな手が私の頭を撫でる。
顔を上げると、隼人がにっこり微笑む。
「大丈夫だ。俺が傍にいる。」
「いざという時は、本性を出す。」
「ん？本性って何？」
え？何か隠してた？隼人、怪しいものでも持ってるのかしら…。
「お前、今何かとんでもないこと考えてただろ？」
「ううん…何でもないわ。」
なんでわかったの？
「ケイの顔みればわかる。」
さすが…。
「一日でも早くｓｐｅｒａｎｚａに行って、全部解決してケイと結婚するまで、俺も倒れるわけにいかないし。」
「でもこんな所で、力が役に立つようになるなんて思わなかったな。

。」

「ちから？」

「まぁ、護身術のもう少し専門的みたいなものだな。小さい頃から、教わってきた。」

「もちろん、銃も使える。」

「親父の仕事が特殊だろ？」

「小さい頃から、狙われるのは日常茶飯事だったんだよ。」

「え？！そうだったの？」

初めて聞く話でびっくりする。

「うん。襲われても大丈夫なように、訓練受けてる。」

「…」

突然なことに、言葉がでない。

「ｄｅｓｅｒｔｏで寝込み襲われた時は、油断してた。本当なら二人とも倒せた相手だ。」

「あの時は、ケイに怖い思いさせて悪かった。」

隼人の抱きしめる力が、強くなる。

「ううん。隼人のせいじゃないわ。」

「事情があって、あえて親父の仕事とは関わりたくないから、全く

関係ない商社の仕事についたんだけど。」
「でもまぁ、俺の選択は間違っていなかったな。仕事は別として。」
「ん？」
「こうやって、ケイに出逢えたんだからな。」
「でも、出逢わなかったら、こんなトラブルにも巻き込まれなかったでしょ？」
出逢いには偶然はないというけれど…。
「ケイは俺に逢えて嬉しくないのか？」
真剣な眼差しで、私を見る。
「嬉しいにきまってる…でしょ。」
隼人の頬にキスをする。
「それを聞いて安心した。」今までにない、柔らかい笑顔の隼人。
「ただ、今は戸惑いがあるの。」
「自分の周りで、それも知らない所で、たくさんの人が動いているから…。」
「そうだよな。」
優しく私の頭を撫でながら、答える。
「大丈夫、俺の傍にいればいい。」

笑顔で頷く…。

「私の命は、隼人に預けるから。」

「…一生、預かるから安心しろ。」

「うん…。」

「さて、寝る前に櫻井さんに連絡するか。」

「気が乗らないけどな。」

隼人は、苦笑いしながら、電話を手にとった。

40　lagoへ・・

「行ったか…。」

列車に二人を乗せるため、Ｈｏｔｅｌから車で駅まで送り届けた。

歩いていく、二人の後ろ姿を見ながら、櫻井が小さな溜め息をつく。

本当なら、一緒に行きたい所だったが…。

実際、ｌａｇｏ（ラーゴ）に着くまでは、何がおこるかわからない。

自分が近くにいない時に、ケイに何かあったら…。

きっと何を置いても駆け付けるだろう。

彼女のことを思うだけで、たまらなく心が震える。

ケイとの別れ際、一瞬抱きしめたい衝動にかられたが、なんとか押さえ頭だけ触れた……。

「仕方がない、今回だけは真に托すか…。」

車を出発させ、飛行場へ向かった。

……

……

突然、ポケットにある携帯電話が鳴る。

「櫻井さんですか？隼人です。」
「どうした？何かあったのか？」
まだ乗ったばかりなのに、もう奴ら動き出したのか…？。
二人を列車に乗せたことを後悔する。
「いや、今のところ落ち着いていますが、櫻井さんに伝えたいことがあって。」
「伝えたいこと？」
「はい。実はさっき送って頂いた車の中で、親父にメールをしました。」
「親父さんに？」
どういうことだろう…。
「俺が、先日の列車で襲われた事件と、ｌａｇｏ（ラーゴ）に向かっていることを。」
「そうか。で、親父さんは？」
「怪しい動きがあるのは掴み始めていたようですが、俺が襲われたのを聞いてびっくりしていました。」
「そりゃそうだよな。」
「でも隼人、襲われたの今回始めてじゃないだろ？」
「はい…。子供の頃からそれらしきことは、よくありましたが、櫻

井さんよくご存知で？」

「親父さんの仕事がわかった時に、たぶんそうじゃないかと思ったんだよな。」

「さすがですね…。」

「あと、先日の空港での俺のフォローする姿見てたら、動きも違ったし。」

「普通、素人が緊急時、あそこまでの動きはできない。」

「場数踏んでると確信したよ。」

「櫻井さん…。」

「隼人、親父さんはこれからどうするって？」

「当てがあるから、すぐ動き出すと言ってましたし、また、連絡するとも。」

「そうか。じゃあ隼人の関連は、親父さんが絡んでくるなら、とりあえず様子見だな。」

「ただ。」

「ただ？」

「今、列車に乗ってる連中の動きがわからないし、気をつけたほうがいい。」

「そうですね。」

「あと、ケイは特にな。」

「相手は、寝込み襲ってまで、連れていく奴らだ。」

「一回失敗してるからな。今度はどんな手を使ってくるかわからない。」

「隼人、絶対ケイから離れるなよ。」

「わかってます。」

言われなくても、そのつもりだ。

「ｌａｇｏまでは、いくつかの星がある。」

「？」

櫻井さんの言っている意味がわからない。

「旅の最初の説明の時、言ったろ？『何もなくてｓｐｅｒａｎｚａまで１ヶ月』だと。」

「はい。」

「列車も何かあれば、停まる予定のない途中の駅でも停まることがある、ということになる。」

「……そういうことか。」順調に着く保証がない旅だった。

「何かあれば、1ヶ月以上になる…。」
「その何か、の騒動が二人が絡まないようにしないと。」
「そうですね。」
「とりあえず、ケイが持ってるカギはＧＰＳが生きてる。」
「カギが外れない限り、いる場所がわかる。」
「変わったことがあったら、すぐ連絡よこしてくれ。」
「俺は、飛行船で移動してるから、もし停車駅が変わってもすぐ駆け付けるから。」
「それと、隼人」
「はい。」
「親父さんとは連絡は頻繁にとれよ。」
少し間を置いて、櫻井は、「心の蟠り（わだかまり）は、あとで解決するはずだから。」
一瞬、言葉を失う。
「……、櫻井さんにはかなわないな。」
「隼人、ケイを頼むよ。また連絡する。」
「わかりました。」

……

……

二人の会話を聞いていると、何かわからないけれど、非常に緊張感があった。

「隼人？」

櫻井さんとの話が終わった隼人に声をかける。

「どうした？」

いつもと変わらない笑顔で振り向く。

「話…いろんなこと話してたみたいだけど。」

私を抱き寄せる。

「ケイは何も心配することない。」

「櫻井さんも移動し始めたし、随時連絡すればいいから。」

「ケイは俺の傍から離れなければいい。」

「うん…。」

軽い口づけをし、二人で外を見つめる。

「ｓｐｅｒａｎｚａか…。」

まだ見ぬ星に向かっている。

この先の不安と期待が、私たちを包み込む。

一人でこなくてよかったとつくづく思う。

隣にいる隼人に抱き着く…。
彼の温もりが私を支えてくれる。
そう思いながら、まったりしていると、廊下が騒がしい。
部屋の窓から廊下をみると、車掌のジョニーさんが、何やら慌てて走って行った。
騒がしい…。
「隼人？」
気がついたら、隼人が身体に色々と装着し始めていた。
「何が起こるかわからないからな。」
緊張感が走る…。

41　列車のトラブル??

『列車の点検のため、次の星ｅｎｔｒａｔａ（エントラータ）に泊まります。』
車掌のジョニーさんの放送が入る。

「列車の点検??」

「ほんとかよ…。」

「さっきのジョニーさんの慌てっぷり、気になるな。」
隼人も納得いかない様子…。

トントン。
入り口の扉を叩く人がいる。

「車掌のジョニーです。」
窓から廊下側をみると、ジョニーさんが立っている。

「何か?」
隼人も、胡散臭さを感じ扉を開けずに返事をする。

「お急ぎの所申し訳ありません。点検のため次の星に臨時停泊いたしますのでよろしくお願いいたします。」
そう伝えていくと、前の方に歩いて行ってしまった。
隼人が外を見る。
今のところ怪しい影はなさそうだか…。
たぶんＳＰも近くにいるはず。

「これは間違いなく、どちらかの関係の奴らが動き出し始めてる。」
「櫻井さんが言ってた通りだ。まずいな…。」
隼人が呟く。
「櫻井さん？」
「そう。さっきの電話での話。」
「最初の説明の時、ｓｐｅｒａｎｚａまで、何にもなくて１ヶ月って言われただろ？」
「うん。」
「トラブルとかがあれば、列車も今回のように、臨時でほかの星へ泊まったりする。
そうすると、１ヶ月じゃ着かないわけ。」
ケイには、当たり障りなく説明する。
「確かにそうね。」
「でも隼人、今回のトラブルって何なんだろう？」
隼人がふいに私を抱きしめる。
「多分、俺らの関係だと思う…。」
「えっ？」

「奴らは、俺らをこれ以上前に行かせたくないだろうからな。」
「いろんな手を使って阻止したいはずだ。」
「そんな…。」
隼人の抱きしめる力が強くなる。
「周りは敵だらけだと思っていたほうがいい。」
「ケイは俺から絶対離れたらだめだ。」
顔をあげると、優しく唇が重なりあう…。
「大丈夫だ。」
隼人の大きな手が私の頭をなでる。
「隼人…。」
私も、手を伸ばし抱きしめた。

……

……

櫻井の携帯が鳴る。
列車にいる真からだ。
「真、どうした?」
「ご主人様、何やら奴ら動きだしたようです。」

「まだ、詳細がわかりませんが、列車が次の星ｅｎｔｒａｔａ（エントラータ）に泊まるようです。」

「ｅｎｔｒａｔａ（エントラータ）か…。」

ｄｅｓｅｒｔｏより、ずっと大きな街だ。
飛行船や列車など、他の星への乗り換えができて、街も賑やかな星である。
たしか、隼人の親父さん、ここの開発も絡んでなかったか？
・・とすると、ここで危ないのは隼人か・・・。
奴ら、どう動いてくるのか…。

「二人は大丈夫か？」

「今のところは動きはないです。ＳＰも張ってますし。」

「そうか。でも油断するな。ＳＰ人数は多くないし過信してはいけない。」
ｄｅｓｅｒｔｏ事件のようなことが二度とあってはならない……。

「二人を頼む。駅に着いて降りて来るとき気をつけろよ。」

「また動きがあったら、連絡してくれ。」

「承知いたしました。」

真からの連絡に、胸騒ぎがする。

「ケイは…大丈夫なのか？」
そう思うと、いてもたってもいられなくて、隼人の電話を鳴らす。
「はい、隼人です。櫻井さん？」
「今の状況はどうだ？」
「列車トラブルでｅｎｔｒａｔａ（エントラータ）に臨時停泊します。」
「状況を考えると、１００％どちらかの関係の奴ら動き出してるかと…。」
「さっき話してた矢先だったな。隼人の考えに、まず間違いないよ。」
「隼人、今のところ変化はないか？」
「はい。目立った動きはないです。」
「あと3時間ほどでｅｎｔｒａｔａに到着するようですが。」
「列車で3時間か…。」
「櫻井さんはどうされますか？」
「俺は、列車が着く３０分位前までには、ｅｎｔｒａｔａに着ける。」
「着いたら、列車ホームで待ってるよ。」

「ｅｎｔｒａｔａには、他の星よりはＳＰが少ないからな。」
「周りにはくれぐれも気をつけて降りて来いよ。」
「わかりました。」
隼人も答え、電話を切った。

「櫻井さん？」
「うん。もうｅｎｔｒａｔａに行くのは知ってたみたいだ。」
「ＳＰから連絡が行ってるのかな？」
「たぶんな…。」
「櫻井さんも、ｅｎｔｒａｔａに向かっていて、先にホームで待ってるって。」
「えっ、そうなの？」
「列車より、飛行船の方が早いし、櫻井さん達のは、たぶん特別仕様だからだと思うけどな。」
「きっとそうだね。」
納得する。彼は、一般人とは違う…。

列車のスピードが、少しずつ落ちてきているのがわかる。
もうすぐ、ｅｎｔｒａｔａに着く。

何が待っているのか…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1421s/

星の降る街に

2011年12月19日01時45分発行